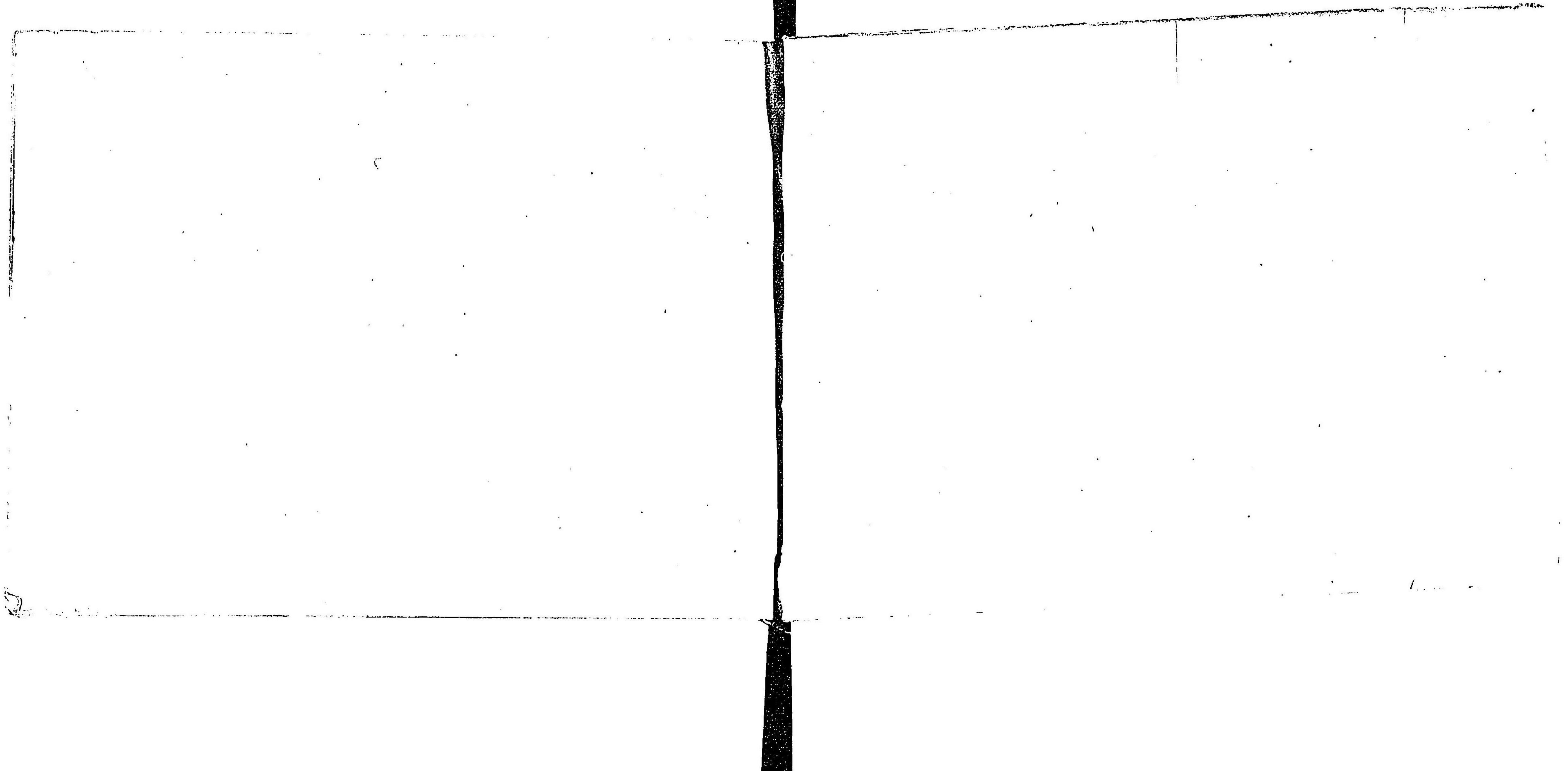


167  
837  
827

雜

論

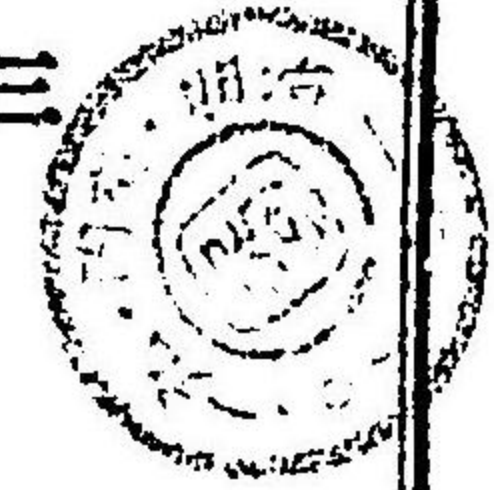
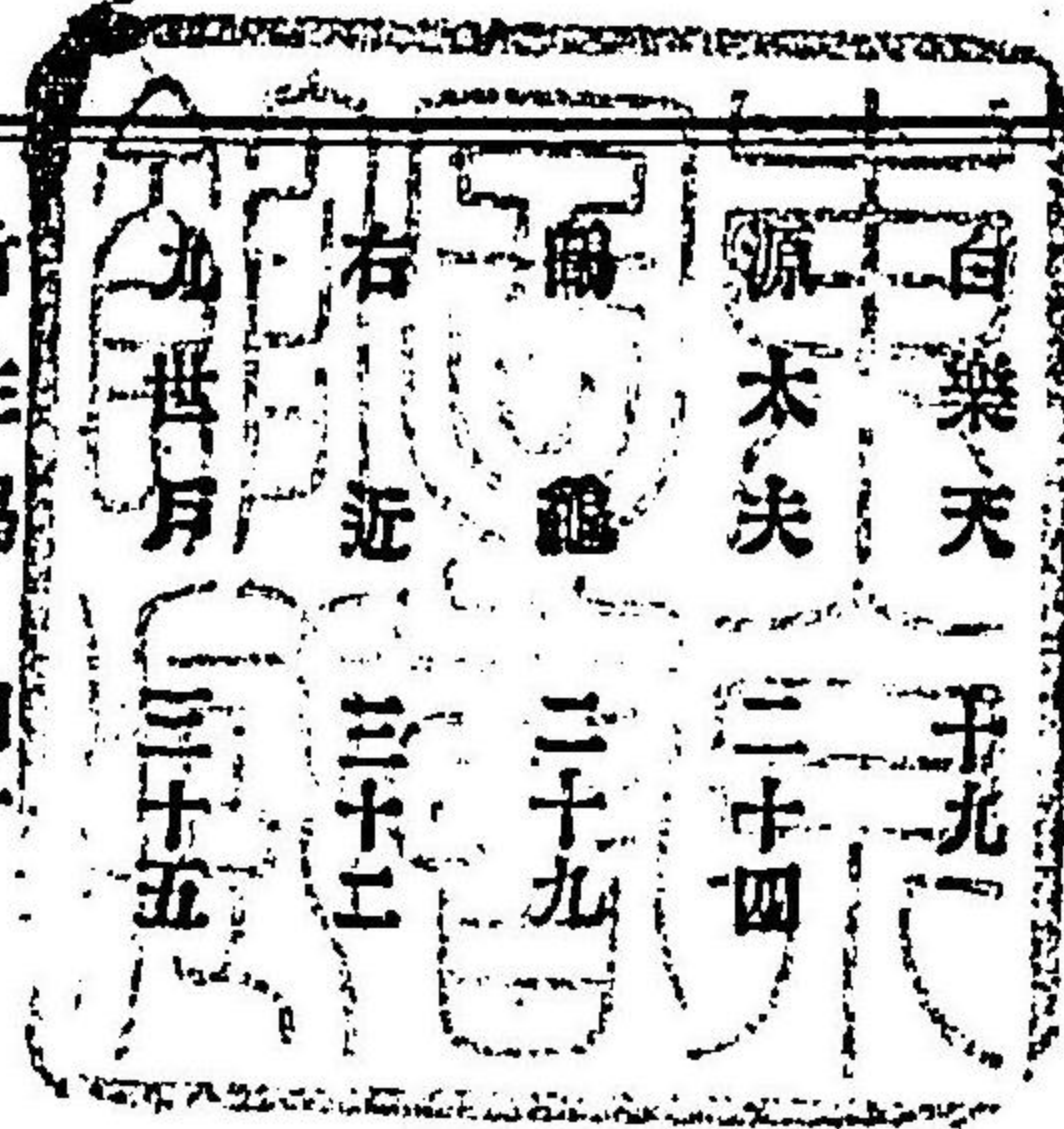
附  
外



特28  
655

雜謠目錄

高砂	一	弓八幡	三
志賀	五	伏見	八
松尾	十	養老	十三
老松	十五	放生川	十七
百樂天	十九	難波	二十一
源木	二十四	道明寺	二十六
右近	二十九	吳服	二十九
九世	三十二	西王母	三十四
竹生嶋	三十五	氷室	三十八
嵐山	四十四	賀茂	四十一
采女	四十七	東北	四十六
江口	五十	芭蕉	四十九
斑女	五十三	半蒨	五十二
		井筒	五十五



目錄

夕顏	五十七	野宮	五十九
佛原	六十二	空蟬	六十四
松風	六十六	熊野	六十八
雲雀山	六十九	吉野靜	七十
草紙洗	七十二	高野物狂	七十四
藤	七十五	羽衣	七十六
胡蝶	七十八	六浦	八十
陀羅尼落葉	八十一	西行櫻	八十三
小鹽	八十五	遊行柳	八十六
雲林院	八十七	杜若	八十九
誓願寺	九十一	葛城	九十二
雨月	九十四	三輪	九十五
龍田	九十七	卷絹	九十九
梅枝	百	富士太鼓	百二
天鼓	百四	那那	百七

唐船	百九	三笑	百九
枕慈童	百十	浮舟	百十一
玉葛	百十四	紅葉狩	百十六
歌占	百十七	山姥	百二十
花月	百二十二	放下僧	百二十四
柏崎	百二十五	櫻川	百二十七
花篋	百三十	百萬	百三十二
加茂物狂	百三十四	源氏供養	百三十六
田村	百三十八	八嶋	百四十
忠度	百四十一	瓶	百四十三
清經	百四十六	經政	百四十八
敦盛	百五十	俊成忠則	百五十二
生田敦盛	百五十四	實盛	百五十五
錦木	百五十七	松虫	百五十九
声刈	百六十	小督	百六十二

盛久	百六十三	春榮	百六十五
安宅	百六十七	元服曾我	百六十八
七騎落	百七十	護法	百七十一
是界	百七十三	野守	百七十六
鶉飼	百七十七	女郎花	百七十九
春日竜神	百八十一	國柶	百八十三
殺生石	百八十四	船橋	百八十七
熊坂	百八十九	夜鳥	百九十三
照君	百九十六	阿漕	百九十九
藤戶	二百	善知鳥	二百二
融	二百三	當摩	二百五
須磨源氏	二百七	絃上	二百十
海人	二百十一	狸々	二百十二
白鬘	二百十四	寢覺	二百十七
大社	二百十九	東方朔	二百二十一

浦嶋	二百二十三	玉井	二百二十五
繪馬	二百二十七	和布刈	二百二十九
定家	二百三十一	楊貴妃	二百三十四
千手	二百三十五	二人靜	二百三十七
祇王	二百三十八	三山	二百四十
蟬丸	二百四十三	三井寺	二百四十四
礎	二百四十五	求塚	二百四十七
綾鞍	二百五十	弱法師	二百五十三
通小町	二百五十五	籠太鼓	二百五十七
自然居士	二百五十九	東岸居士	二百六十
小袖曾我	二百六十二	兼平	二百六十四
賴政	二百六十六	知章	二百六十八
通盛	二百七十	朝長	二百七十二
巴	二百七十四	蟻通	二百七十七
豐于	二百七十九	輪藏	二百八十一

一角仙人	二百八十三	鉄輪	二百八十四
葵上	二百八十六	黑塚	二百八十八
鞍馬天狗	二百八十九	車僧	二百九十二
良張	二百九十四	項羽	二百九十六
雷電	二百九十七	羅生門	三百一
大江山	三百二	夜討會我	三百五
橋辨慶	三百七	舟辨慶	三百九
同切	三百十	大蛇	三百十二
舍利	三百十四	鐘馗	三百十六
松山鏡	三百十八	小鍛冶	三百二十
岩船	三百二十三	金札	三百二十五

已上百六十九番





實名を得たる松かえの。老木れむかし顯はして其名を  
 名乗給へや。今は何をかつむべき。是は高砂住の  
 江の相生の松の情夫婦と現し來りたり。上池「ふしきや  
 扱は名所の。松の奇特を顯はして。草木こころなけ  
 れ共一賢き代とて。土も木も。我大君れ國なれば  
 いつまでも君か代に。住吉に先行てわれにて。待  
 ちさんと夕なみの汀なる海士の小舟に打のりて  
 追風にまかせつ沖の方に出にけりや。上歌  
 高砂や。此浦船に帆をあげて。月諸共お出しほの  
 波の淡路の島かせや。遠くなるをの沖過てはや住  
 の江に着にけり。我見ても久しく成ぬ住吉  
 の。岸の姫松幾世へぬらん。むつましと君はしらすや  
 瑞籬の。久しきよしの神かくら。夜の鼓の柏子を揃へ  
 て。すしめたまへ宮つこたち。上地「西の海。あをきか  
 原の浪間より。あられ出し。神松の春なれや。殘  
 の雪の淺香瀉。玉藻かるある岸陰の。松根に倚て腰  
 を摩は。千年の翠。手にみたり。梅花を折て頭に  
 させは。二月の雪ころもにおつ。上地「有難のやうから  
 や。月住吉れ神遊ひ。影を拜むあらたさ。上

「實さま」の舞姫の。聲も澄なり住の江の松陰も  
 うつるなる。青海波とは是やらん。神と君とれ道す  
 く。都の春にゆくへは。夫ろ還城樂の舞。扱萬  
 歳の。「小思衣」さすかいはには。悪魔をはらひ。ね  
 さむる手には。壽福をいたさ。千秋樂は民を撫。萬歳  
 樂にはいのちをれよ。相生の松風。颯々の聲に  
 樂しむく。

弓八幡

「まかるお神功皇后。三韓を静め給ひしより。同し  
 應神天皇の修聖運存も久しく。國富民も。ゆたか  
 治まる天か下。今に絶さぬ。引。調どるや。上雲上の月  
 卿より。下萬民お至る迄樂しみの聲。盡もさす。然り  
 どと申せ共。君を守りの修終くみ猶も深き故により。中  
 飲明。天皇の御宇かどよ。豊前の。國。宇佐の郡。  
 れんたいしの麓に。八幡宮と顯れ。八重旗雲を知へに  
 て。洛。陽の南に。山高み。越。らぬ。修代。守ら  
 んどて。石清水いささよき。靈社と現したまへり。さ  
 れは神功皇后も。異國退治の修爲に。九州。四王  
 寺。峰に於て七箇日の修神拜。たえしも今は久堅の。

天のいはどの神遊日。群居てうたふや柳葉の青  
 和幣 白あきて取く成し神靈を 上テテ うつすや神  
 代は路すくに。今も今あるまつり事や普しやひもろさ  
 の知を玉の木の枝に。こかねの鈴をひすひつけ  
 て千早振神遊ひ。 七日 七夜の多神拜誠に 天も  
 納 受し。 地神も感應の海山。おさまる御代に立歸  
 り。 國土を守り給ふなる。八幡三所は神津ろめく  
 たかりける。 實や誓ひも影高き。 此衣更着は神祭か  
 いる神慮そ有難き。 「有かたき千代の多聲を松風の  
 更行月の夜神樂を奏して君をいのらむ。 一祈る願ひ  
 も瑞離の。 久しき代よりさかへてき。 「我はまことば  
 代々を経て。 今此としに在るまでも。 「生類をほまつ  
 上同 高良の 神とは我なるか。 此多代を守らんと。 只  
 今爰に來りたり。 八幡大菩薩の多神 詫ろうたかふあ  
 どてかきけすやうに失にけり。 「都に歸へり  
 神勅を。 悉く奏しあへし。 いへはお山も  
 音樂の。 聞きて異香薫すなる。 けにあうた成奇特  
 かな。 「荒有難あ元よりも。 人の國より我國。 他  
 の人よりも我人。 誓ひの末も明らけき。 眞如實相の

月弓の。 八百萬代の未迄も。 動かす絶す君守る。 の  
 はらの神とは我事なり。 上地 二月の。 初卯の神樂面まろ  
 や。 上テテ 「うたへや唄へ。 日影さす迄。 袖の白木綿  
 かへす返すも。 千代の聲々。 うたふどかや。 上ロキ地。 實  
 や末世といひあはら。 神の威光をいやましに。 かくあ  
 らたさるは影向。 おろむろ貴かまける。 「多代を守  
 りの多誓ひ。 本より定めあるうへに。 殊に。 此君  
 の神檢天下。 一統と守るなり。 上地 「實に神代今の世の  
 。 印の箱の明らかに。 上テテ 「此山上に宮居せし。 上地 神の首  
 は。 上テテ 「久かたの。 上同 月。 のかつらの男山。 さやけきか  
 けは。 所から。 畜るい鳥類はとふく松の風までも。  
 皆神跡と歌はれ。 實頼もしき神心に。 現大はさつ  
 八幡の神 詫ろうたか成ける。

志 賀

「然れば其多時に至つて。 和歌の道さかんに去て。  
 古へ今の詠歌を撰ひ。 同 二聖六歌仙を始めとして。 其  
 外の人々は。 野への葛のはひひろこ。 林に繁き木の  
 葉の露の。 色にすみゆく歌人の心は花に成どかや。 上テシ  
 「けに埋木の。 人しれぬ。 ことわざ迄の。 情どかや。 上テシ

ろもく。雑波津淺香山の。陰見らし山の井の。あさは  
 くは誰か思ひ草の。露ゆき霜來る宮なれや。濱  
 の真砂より。數多き言の葉の。こゝろの花の色香  
 迄も。妙成や敷島の道ある。伊代のもてありひ。えかれ  
 は三十一文字の。神も守護し給ひて。無見頂相の  
 如來も感應たれ給へは。君も安全に。萬民とさをた  
 のしみて。都鄙圓滿の。雲のした四海。八島の外迄も  
 浪の。聲万歳の。響と。長開けかりけり。今すへ  
 らきの伊代ひさに。よるつのもつりことの。道直に渡  
 るひの。東。南に。雲治り西北に。風。靜にて。言  
 葉の。さやしさかりゆくや。花も常葉の。山松の  
 。ちまたに唄ふ聲迄も。是。和歌の詠に。よるへしや。や  
 天地を。動かし鬼神も。感をなとどかや。上。實や  
 ことなる山人の。家路いつくの未ならん。床しき心成  
 へし。今は何をうつしむ。其いにしへは。大友の  
 如黒主といはれしか。伊時代とて。此山の。神とも人を見  
 ららん。上。此山は神とと。ふしきや。扱わ大友の  
 「それは黒主の家の名の。大友か。我はた。上  
 薪。おふ友もなくて。獨。山路の花の陰に。か休

みしつる恥かしやと。ゆふへの雲に立かくれて。志賀  
 の。宮路に歸りけり。上。いさげふは春の山  
 邊に交りなん。暮あはさきの花の。陰。月に詠して  
 あまの原。時の調子に。うつりくる。舞歌の聲社。  
 あらたなれ。上。雪ならば幾度袖を拂はまし。  
 花のふしきの。志賀の山。越ても同じ花園の。里も春め  
 く。近江の海の。志賀。辛崎の松風までも。千聲の春のの  
 どけさよ。海。こしに。見えてう向ふ鏡山。上。年經ぬる  
 身は老かみの。それは花か身。是は志賀の。上。神  
 のしらゆふかけまくもかたしけなしや。神樂の。舞  
 上。打上。ふしき成つる山殿の。たき。の斧の永き日も  
 残る和光のあらたさよ。上。實惜ひへし君の代の。長  
 開き色や春の花の。花にまじはる雪ならば。ふむあ  
 と。送もこ。ろせよ。上。實心して春の風。聲もろふな  
 と。伊神樂の。小忌の衣の色はへて花は梢の白和幣。  
 松はたちねの。青和幣。かくるやかへるや。梓弓は  
 るれ。山邊を越くれば。道も去取す散花の。雲の羽  
 袖をかへしつ。いくななるの。伊袴の。ろはをとり。柏  
 子を捕へて神かくら實面しろさかなてかなく。

伏見

「然れば人王代々をへて。時雨ふりおける奈良のは  
 の名におふ宮地正しくて。移り行かり雲の上。花の都  
 の春の空平安城におさまれり。」「中にも伏見の宮作  
 り。國家を守る神慮。しるやあこねの浦迄も。四海  
 のはらふわしつかあり。人王五十代桓武天皇の御宇  
 かどよ當國伏見ての里に移らせ給ひて。大宮作り始  
 めたり。皇居を定給ひしに。伏見の翁。はあら  
 はれて。いさ愛に。我世は惣おん菅原や伏見  
 の里の。あれまくもをしと詠めけるとかや。其後  
 かんなきに詫しつゝ猶重てれみとのり。われは神風  
 や伊勢のあこねの浦の波。納る伊代の爲ならんふし  
 見にみるなはして。君邊に住へしどの伊神勅に住せつ  
 い。おほみや作りし給へり。抑伏見と云事  
 は。先我朝の惣名にて。伊非諾伊非册のあまの岩  
 倉の菩提にふして見て。し國なれば伏見と名付給ふ  
 なり。さればにや國富。民豊かにて。誰も我世  
 に。あひ竹の。伏見の。里を守らんとの伊誓ひはく  
 わら萬歳にたひらのみやこなるへし。上ロキ地。實や伏

見の古への神の祭りの夜神樂に。こころをのふる有  
 難や。上シテ折節月晴て。和光のかけも明らけき古へ  
 の宮はし先伏見の夢を覺すなよ。一夢の伏見の宮はし  
 め。其代を今に歌はして。見かきうへたる玉殿に  
 「今のおさまの。立どみれば。天より金色に光り  
 さして。此庭。あみちくして。伏見の里のあれま  
 くもをしと思ふゆへ。又宮作り改めたり。われは  
 伏見の翁あるか御代を守り。申也。君は千代ま  
 せくと申捨て失にけりや申捨て失にけり。受  
 るや神の滂心を。白木綿なるの色々に。神樂の  
 鼓。聲澄て月も成今宵かな。荒有難の宮  
 作とや。我をば誰とかおもふ。伊代を守りのせいけん  
 には。伏見の翁と歌れ。しんたうにては伊勢の海。  
 あこねのうらに宮居して。こきん妙文のあいをのへん  
 かさはへの神とは我事なり。一實有難や今宵しも。  
 空晴雲もさまりて。めいゝとある夜神樂に。た  
 いや庭。火も照るひて。重なる霜の夕たみ。みてる  
 や花もむら菊の。紫れ雪。緑りの空の。月澄や  
 伏見の澤の秋の水。竹田も見へて。あはの雲の。

深草の野邊。稻荷山の打上紅葉の秋も柳櫻の。  
 花の都は曇りもなくみわたる見えてたゞや平安城のね  
 もしろやマイ打上はや明はの空の戸に。ひかりをうへ  
 て有明の月澄渡る光てたさよ。上シテ、エもとより、我  
 代は惣ぢんすか原や。伏見のさどを守らんと。又此  
 山に歌はれ伏見の翁あるとかや。上地、「實有難き神の代の。  
 昔を今にかへすなる。シテ、「其海原の波の露」こりかたま  
 どし種なれや。シテ、「今もゆるかね秋津ねの」其神の代の  
 シテ、「物かたり。上同、伊井、踏いさなみの岩枕にふ。し  
 て、見出したりし故に、ふし見と此國を名付るめ  
 られし神の代の。跡明らか今迄天下太平のま  
 つりと。絶ぬ伏見の翁草の雪を廻らすや。舞  
 の袖万歳の代にかへらんく。

松尾

然れば神は人天百王の守護神として「本地寂光の  
 都をいて給ひ。此閻浮提に示現し五衰の眠を無上  
 正覺の月にさまし。下シテ、「國土豊かに民あつかれど。安  
 全を守りおはします。和光同慈と。結縁の伊始  
 八相成道は利物の終を見する修誓ひ。實目前にあ

らたなり。佛は又常住。不滅の相を歌はし。有無中道  
 を離れて。人を濟度の方便はもつて同し悲願あり。神  
 といひ佛といひ。只是水波の隔にて本  
 地無路と歌はれ三世了達の智慧を以て現當二世  
 迄の道を照し給へり。されはにや此やしる。いつく  
 もと言なから。殊に所と九重の。雲の西の山の端を  
 照すや光りも夕月の空冴て嵐山の峰。には  
 實相の聲みちて。開法の便のみ。大井は波の音  
 迄も常樂我淨の結縁をすす心。上シテ、「梅津か  
 つらの色々々。日も茜さす紫野。北野平野や  
 加茂さふね。祇園林の秋の風。稻荷の山の  
 みちはの青。かりしぬみも襟々に。誓ひの色を  
 替れ共。此神は分て世の。月常住の地をしめ王  
 城を守る神徳の。久しき國に路垂て。慈尊三會  
 の。曉を松尾は神垣かはらぬ色久しき。上ロシキ地  
 實や誓の秋久に。代々を守りの御神驗猶行末う頼もし  
 き。上シテ、「時しもけふの御神拜。有難しどもゆふしての  
 神の夜神樂面々に神をすしめやさん。上地、「扱は時  
 も夜神樂れ。聲も普さ數々に。上シテ、「すはや照るふ夕月の



へ見ゆる山の井の質も薬と思ふより花の姿も若水と見るころ嬉しかりけき「實有難き薬の水。急き歸りて我君。に奏聞せん社うれしけれ」  
 上ツキセン「勅使かゝる傍惠み。廣きゆかけをたうとめは」  
 上ツキセン「勅使もかさねて感涙して。かゝるさどくにあふ事よと」  
 上ツキセン「天より光り輝きて。いをもあへねはふしきやな」  
 上ツキセン「花ふとぬ。是唯瀧の響きも聲澄て。音楽さこへ」  
 上ツキセン「有難や治まる傍代のしる事と思はれす」  
 上ツキセン「山河草木ふたやかに。五日の風や十日の天か下照日の光り。曇りはあらし玉水の。くすりの泉はよもすし。荒有難の奇瑞やな」  
 上ツキセン「これはとも誓ひは同じ法の水。尽せぬ御代を守るなる」  
 上ツキセン「我は此やま山神の宮居」  
 上ツキセン「又は楊柳觀音菩薩」  
 上ツキセン「神といひ」  
 上ツキセン「唯是水波の隔にて一衆生濟度の方便の聲」  
 上ツキセン「翠のあらしや。谷の水音とふとふと打上柏子を揃へて音楽の響き。瀧津心をすましつ」  
 上ツキセン「諸天らさよの。影向かな」  
 上ツキセン「松陰に。千代を移せる縁りかかアタル下さもいささきよき山の井の水」  
 上ツキセン「水滔々として浪悠々たり」  
 上ツキセン「治まる傍代の井の」

の「君は舟。臣は水。水よく舟を。浮へて。臣よく君を。わよく御代とて。幾久しきも尽せしや盡せし。君にひかる。玉水の。かみすむ時は。下も濁らぬ瀧津の水の。うきたつ涙の。かへす返すも。よき傍代なれや。万歳のみちにかへりなむ」

老松

「先社壇の跡を拜み奉れば。北に峨々たる青山あり。臨月松容の中に映し。南に寂々たる瓊門あり。斜日竹竿のもとにすけり。左りに火焰の輪塔あり。翠帳紅闥の粧ひ昔を忘れす。右も古寺の舊跡有。晨鐘夕梵の響きたる事なし。實や心なき。草木なりと申せ共。かゝる浮世の理りをは。しるへし知へし諸木の中に松梅は。ことに天神の御自愛にて紅梅殿も花松も皆末社と現し給へり。此二つの木は。我朝よりも猶。漢家に徳をあらはし。唐の帝の傍時は。國にふん學さかむ。おれは花の色をまじひ。常より増りたり。文。學。すたれば。句ひもな。其色も深からず。扱。こ。文。に。好。む。木。あり。けり。と。て。梅



をば。好文木とは付らざれたれ。松をよ。大夫と云事  
 ぞ。秦の始皇の狩の時。天に。はかにかき  
 曇り大雨しきまに。降しかは帝雨を。凌かむと小松  
 の陰によまたまふ。此まつ。俄に大木となり。枝  
 をたれ葉をならへ。木の間。透まをふさきて。其雨  
 をもらさうりしかは。みかど大夫といふ。爵。贈り  
 給ひしより松を大夫と申也。加藤に名高き松  
 梅の。花も千世まで。行末久にみかき守まもる  
 へし。や神は。爰も同じ名の。天満宮もくれなる  
 の。花も松も諸共に。万代の春と。かや千代萬代の春と  
 かや。嬉しきかなや。いささらは。此松かけに  
 旅居して。風も。囀くどらの時。神の告をも待てみ  
 ん。如何に紅梅殿。今夜のまを人をは。なにと  
 か慰め給ふへき。實珍らかに春もたち。梅も色ろひ  
 地。まつども。名ころ老木の若緑り。空澄渡る神か  
 くら。歌を唄ひ。舞をまひ。舞樂を備ふる宮寺の。  
 聲もみちたる有かたや。さすぬたの。梢  
 は若木の花の。袖。是老木の神松の。是は老  
 木の神松の千代に。やちよに。いれ石のいはほどを

て。昔のむすまで。中。昔のむすまで松竹。つるかめ  
 の打上よはひを授くる。此君の行末守れと我神詔の。  
 告を知らざる。松風も梅も久しき春社。めてたけ  
 れ

放生川

然るに宗廟は神として。後代を守り國家をたす  
 け。文武二つの道ひろく。九重つづくは八幡山。神に  
 も伊名ははつのもし。夫諸佛出世の本來くう。し  
 むしやうふしやうの道を示し。八正道を歌はし。人佛  
 不二の御心にて。正直のかうへに。やどり給ふ。人  
 の國より我國。他の人よりも我人と誓はせたまふ。惠  
 み。實有難や。我らことこの浅ましき。迷ひを照し  
 給はんの。其御誓願のあたり。行敷和尙のみりの  
 水に影うつる。都を守らんと。南の山  
 に。すむ月の光もみつの衣手に移り給へり。されは  
 にや宗廟の。跡明らかに君か代の。直なる道をあらは  
 し。國富民のかまど迄。にさばふ都のみつ。舟四海の  
 波も静なり。利益諸衆生の。誓ひ。二世安樂の。  
 神檢は猶さか行や。こ山にし松立る。木末も

草も吹風比皆質相の間にて、峯の山かつら其外里かくら。懺悔の心多さめ。夜盤もいと、神さひて。月かけろふの石清水の。淺からぬ誓ひかき實淺からぬ誓ひるな。上ロンキ地。一ふしきなりとよ老人よか程委しくゆふして、神の告かや有かたや。上シテ代々に仕へし古へも。二百餘歳の春秋を、送むかへて神徳を請し身れ給ひ武氏の臣は我也と。名乗も敢す男。山との枝にすかりて山上さして、あかりけり。上シテ。一都に歸り神勅を。くことく奏まわくへしと。さへはお山も音樂の。開きて鐘香薰すなる。これたし事と思はれず。上シテ。有難や百王守護の日の光。豊かに照す天か下。幾万代の秋ならん。和光の影も曇りなき。神と君とに仕への臣。武内とす花人なり。上地。末社はをのく出現して。けふ傳えたる放生の。神の幸をはやむれば。みさきとひさる鳩の峯。山下につらなる神拜の社人。小忌の衣の袖をつらね。地。千早振なり天乙女。久方の。月のかつらの男。山。さやけさ影は。所から打上り。扱は神代も和歌をわけ。舞をまひけるめてたさよ。上シテ。中々小忌の

浴衣を先し。れのく舞をまひ給ふ。地。さらば四季の和歌を上其品かへて舞給へ。上シテ。春は霞の和歌をわけて喜春樂を舞ふよ。上地。扱又夏にありては。いか成舞をまひ給ふ。上シテ。かたへすしき川水に。うかひてみゆる。盃のけんはい樂を舞ふよ。上地。はしめてなかさ夜も更る。風の音にほとろくはたか踏舞の柏子。上シテ。秋さぬと。目にはさ。やかま見へすとも。秋風らくを舞ふよ。上地。日敷も積る雪の夜は。上シテ。廻雪の袖をひるかへし。上地。さて百敷の舞には。上シテ。大宮人のかさすなる。上地。さくら。上シテ。花。同。花のかむりを傾けてやうこいよと立まば。北庭樂をまふと。かや。さのみと何と語るへき。言葉の花も時をぬて。其風猶もさかんにて。鬼も神も納受する和歌の道ころめてたけれく。

白樂天

和國に於て澄歌多し。上同。花に啼鶯。水にすめる蛙迄。唐公はしらす日本には歌をよみ。ひらおきなも。大和歌をはかたのことくよひなり。抑らくひすの。歌を讀たる澄歌には。孝謙。天皇の御宇かよ。

大和の國高天の寺に住人のあしきねんの春の頃。軒  
 端の梅に鶯の。來りて鳴聲を聞は初湯毎朝  
 來不相還本栖どなく。文學に寫して是を見れば。  
 三十一文字の詠歌の言葉なまけり。上ツテ。初春の  
 たとには來れ共。あはてろかへるもの。栖にと  
 開きつる鶯の聲夜始めとして。其。外鳥類留  
 類の。人にたくへて歌をよむ。ためしは多く有磯海  
 の。濱の貝砂の數々に。生どしいける物いつれも歌  
 をよむなり。上ロンキ地。一實や和國の風俗の。こゝろ有ける  
 海士人れ實有難き習ひかな。上ツテ。一迎も和國のもて遊ひ  
 。和歌を詠して舞歌の曲。其色々を歌はさむ。上地。るもや  
 ふかくの遊ひとは。其役々は誰ならん。シテ。誰なくとて  
 も侈覽せよ。我たにあらはこの舞樂の。同。鼓は浪の音笛  
 は龍の吟ざる聲。舞人は此厨か花の浪の上になつて  
 青海にうかひつゝ。海。青樂を舞へしや。上ツテ。蘆原の  
 一國も動かし萬代まで。浮シテ上。山陰の。移るか水の青  
 き海の。一浪の鼓の。青海樂。上ツテ。西の海。あをさ  
 か原の波間より打上久盛。歌はれ。出し住吉の神。住  
 吉の神すみよしの。シテ。あらはを出し。住吉の。下同。住吉

の神のちのらのあらん程は。日本をば。隨へ  
 させ給はし。すみやかに浦の波の。立歸り給へ樂天  
 上歌同。住よし現し給へは。伊勢石清水加茂春日。  
 鹿島三島諏訪勢田。安藝の嚴島の明神は。娑羯羅龍  
 王の第三の姫宮にて。海上にうかひて海青樂を舞給  
 へは。八。大。龍王は。ちりんの曲を奏し。空海  
 にかけりつゝ。舞遊ふ小忌衣の。手風神風。に  
 吹もとされて。唐船の。爰より漢土に歸りけり。實有  
 かたや神と君。實有かたや神と君か代のうか  
 ぬ國そひよし。

難波

「むかし唐國の堯舜の侈代にも越つへし。同。萬機の政  
 事穩やかにして。慈悲の浪四海に普く。治めざるに平  
 かなど。下シテ。一君々たれば。臣も又。水よく船を。うかふ  
 どかや。高き屋にのほりて見れば煙たつ。民のかま  
 どは。にさばひにけり。敬慮に掛まぐもかたし  
 けなく差聞さける。然れば此きみの代々にためしを  
 ひく事も。實有かたきみこと。のり。國々にあまねく。三  
 年の侈調ゆるさきし。其年月も極まれは。濱の眞

砂の敷積りて雪は豊年の浮調物ゆゆるすゆへに  
 や中々。いやましに運ふは實れ。千秋萬歳の。ちは  
 この玉をたてまほる。上シテ「然れは普き浮心のすい  
 くしみ深ふして八島ははか迄浪もなくや廣き浮  
 恵みつくは山の陰よりも。茂きみかけは大君の國  
 なれば土も木も。榮はさかふる津の國の。難波  
 の梅の名にしおふ。にはひも四方に普く一花ひらく  
 をば天下皆の春なれや萬代の猶安全るめてたき。上ロ  
 ンキ地。うけに萬代の春の花。榮は久しき難波津の昔語り  
 面白き。上シテ「實名にしれ難波津に。鳥の一聲折しもに  
 。なく鶯の春の曲春鶯囀を奏せん。上地「ふまきや身  
 誰なれば。かく心有花の曲舞樂を奏し給ふへき。上ツレ  
 「我はしらすや此梅の。春年くの花の精。今一人の  
 花人は。いま歌はす難波津に。咲やこの花と詠  
 しほ位をすめ申せし百濟國の王仁あれや。今  
 今も此花に戯れも。囀の聲たて春の鶯  
 の舞の曲夜。終なきをさへしや下臥して  
 待給へ花の下ふしに待給へ。上シテ「誰かすし春の色は  
 東よ來るといへども。南枝花始めて開く。後ば

も西の海。向ふ難波の春の夜の月。雪も澄浦の浪に。  
 よるのふかくは面白や。夢をましまし給ふなよ。「是  
 は難波津の浦に年を経て。ひらくる代々の恵みを受  
 る。此花咲や姫の神なり。「我は又百濟國より此國に  
 渡り國を治め君を守る。王仁といつし。相人なり。上地  
 ひらし仁徳の浮字には。浮代の鏡の影を移し  
 治るみよの。榮花をなししも。此花の匂ひ。「または  
 開くることのはの粧ひ打上難波の事か法ならぬ  
 遊ひ戯れ。いろくの舞樂は。おもしろや。梅  
 か枝に。來る鶯。春かけて。上シテ「啼共雲は。ふる  
 き鼓の音ひして。下アン「打ならず打ならず。人もなけれ  
 は。君か代に。掛し鼓も。下シテ「時守の眠りさむるは  
 ちにはの。かぬもひき。地「浦はうしほの。浪の聲  
 々。上地「入江の松風。村あしの葉おと。上地「つれをさ  
 くもよろこひの。かひこ音ひ難波の鳥も。おどろ  
 かぬ浮代なり有かたや。上ロンキ地「荒面白の音楽や。時の  
 調子にかたどりて。春鶯囀は樂をば。上シテ「春風と諸と  
 もに。花を散してどうどう。地「秋風樂はいかにや。上シテ  
 「秋のかせ諸どもに。浪をひかしどうどう。地「萬歳

樂は「よろつらうつ」地「青海波とはわを海の」シテ「波たてう  
つは。探桑老」地「坂頭の曲は」シテ「がへりうつ」同「入日を招き  
返す手に。」シテ「今の太鼓は波おれと。よりては打歸り  
てはうちちか。此」音「樂お引れつ。聖人後代に人出。  
天下を守り治むる。天下を守りおさむる萬歳樂ろめ  
てたきく。」

源太夫

「然れば景行第三の王子。名は日本武の尊。」同「地神  
五代には天照太神のこのかみ。ろさのをの見を。出雲  
國に跡をたれ。暫く宮居し給へり。上」シテ「爰に簸の川上  
にていこくする聲あり。下」同「尊至りて見給へは。老人夫  
婦か中に。少女をいたきて泣居たり。是を如何にと尋  
ぬるに。老」人「答へて申やう。我はてなつち足  
おつち。むすめを。片」地「いなた姫と云者にてみかぢ大蛇  
の生熱を。悲しむなりと申せば。然らば其姫を。我に  
得させよ其難をのかすべしと宣へは。喜悅の心妙にし  
て尊に姫を奉る。上」シテ「頓て大蛇をしたかへ。其尾  
に有し劔を。村雲の劔と名付し社やほるきの宮の御事  
よされはひかみの明神は其時のいなた姫なり。父の老

翁名をかへて。源太夫の神と歌はれ。東海道の旅  
人を守らんと誓ひ給へり。實有かたき神祕のをしへ  
唯人ならず覺えたり。名を名のり給ふへし。今  
何をかつひへき。簸の川上に歌はきし。我は手な槌  
「足を槌」シテ「夫婦是迄」二人「あらはれたり。上」同「常ち  
す御身は勅定の使なる故に。仰くへし神とて。人  
のうやまひ深ければ。まもらん爲に來りたり。爰にて  
はげんだいふのちかみろと名のりすて。ゆきかた  
見らす成ぬ行衛しらす成にけり。上」シテ「我わ是。眞如實  
相のむろを出て。うわの濁莖に光りをましへ。結縁の  
衆生擁護の神。立花姫とは我事。上」シテ「我は又無縁は  
衆生を利益せんと東海道を日夜に守る。源太夫の神と  
は。我事なり。下」同「荒有かたや。上」シテ「實有難き御影向  
感涙肝に銘しつ。心空成さかり也。上」シテ「迎姿を歌はさ  
いさや舞樂の曲を奏し。彼禰人に見せやさん。上」シテ「實  
に是もいはれたり。扱役くは。糸竹の中にこられる  
太鼓の役。すなはち身。上」シテ「源太夫か。かかれいもさ  
らな。上」シテ「思を出る。同」シテ「むかえも打たる。太鼓の御役。今  
も妙なる秘曲をうへて。撥る數ある樂柏子。今打よる

も。波のしらへ面しちやか有かたや<sup>下シテ</sup>。面白の遊樂<sup>カ</sup>。  
 や<sup>同</sup>。時しもわれや月も照るひ。松風も涼しく  
 て神さひ渡れる折からに<sup>トリ</sup>。およろ人間<sup>ミ</sup>のわさな  
 り共感應<sup>ニ</sup>などかななるへ<sup>ト</sup>。ま<sup>マ</sup>。てや神前<sup>ノ</sup>の  
 ことわさなれば<sup>ハ</sup>。實も妙なる<sup>ハ</sup>。傳代のしるし<sup>ハ</sup>。治世の聲  
 は安樂にて琴瑟は玉殿に鐘鼓庭上宮しやう上り下る時  
 に聲<sup>ハ</sup>。あやをなす舞歌の曲<sup>ハ</sup>。ほと時うつるか<sup>ハ</sup>。は  
 や明<sup>ク</sup>。たに成ぬれば<sup>ハ</sup>。都に歸る<sup>ハ</sup>。勅の使<sup>ハ</sup>。楮ころ名殘  
 の還城樂<sup>ハ</sup>。さて社名殘の還城樂のつ<sup>ハ</sup>。みの聲や二十五  
 色の<sup>ハ</sup>。五更の一天より夜はしら<sup>ハ</sup>。く<sup>ハ</sup>。どろあけにけ  
 る<sup>ハ</sup>。

道明寺

二月下は五日にして。都を出させ給ひつ<sup>同</sup>。此土  
 師の里に旅宿有て。權々の<sup>ハ</sup>。神物をと<sup>リ</sup>。め。未代<sup>ハ</sup>。值遇  
 の<sup>ハ</sup>。終結縁今にたふる<sup>ハ</sup>。ことなし。角<sup>ハ</sup>。てもとふらぬ<sup>ハ</sup>。道  
 の<sup>ハ</sup>。への。草葉の露も。しほる<sup>ハ</sup>。はかり<sup>ハ</sup>。君<sup>ハ</sup>。る<sup>ハ</sup>。住宿  
 の梢をゆく<sup>ハ</sup>。も。かくる<sup>ハ</sup>。途<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。かへり見<sup>ハ</sup>。うす  
 る<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。御<sup>ハ</sup>。ならめ<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。ころと<sup>ハ</sup>。知り<sup>ハ</sup>。かたしけ<sup>ハ</sup>。なき<sup>ハ</sup>。扱<sup>ハ</sup>。も<sup>ハ</sup>。い  
 つ<sup>ハ</sup>。しかに。習<sup>ハ</sup>。はせ給<sup>ハ</sup>。はぬ<sup>ハ</sup>。旅<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。空<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。お<sup>ハ</sup>。ふ<sup>ハ</sup>。心<sup>ハ</sup>。つく<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。と

て<sup>ハ</sup>。天<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。る<sup>ハ</sup>。鄙<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。國<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。住<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。せ<sup>ハ</sup>。給<sup>ハ</sup>。ひ<sup>ハ</sup>。しか<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。あ<sup>ハ</sup>。たり<sup>ハ</sup>。は  
 都<sup>ハ</sup>。荷<sup>ハ</sup>。樓<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。ら。觀<sup>ハ</sup>。音<sup>ハ</sup>。寺<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。鐘<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。聲<sup>ハ</sup>。朝<sup>ハ</sup>。暮<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。ひ<sup>ハ</sup>。く<sup>ハ</sup>。折  
 く<sup>ハ</sup>。は。都<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。春<sup>ハ</sup>。秋<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。思<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。召<sup>ハ</sup>。出<sup>ハ</sup>。ぬ<sup>ハ</sup>。時<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。なし。家  
 を<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。な<sup>ハ</sup>。れて<sup>ハ</sup>。三<sup>ハ</sup>。四<sup>ハ</sup>。月<sup>ハ</sup>。一<sup>ハ</sup>。落<sup>ハ</sup>。る<sup>ハ</sup>。涙<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。百<sup>ハ</sup>。千<sup>ハ</sup>。行<sup>ハ</sup>。万<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。皆<sup>ハ</sup>  
 片<sup>ハ</sup>。地<sup>ハ</sup>。夢<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。こ<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。よ<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。く<sup>ハ</sup>。彼<sup>ハ</sup>。者<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。期<sup>ハ</sup>。す<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。い<sup>ハ</sup>。ふ。其<sup>ハ</sup>。御<sup>ハ</sup>。心  
 の<sup>ハ</sup>。至<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。や<sup>ハ</sup>。昨<sup>ハ</sup>。日<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。北<sup>ハ</sup>。關<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。思<sup>ハ</sup>。ひ<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。う<sup>ハ</sup>。ふ<sup>ハ</sup>。さ<sup>ハ</sup>。した  
 感<sup>ハ</sup>。あ<sup>ハ</sup>。ら<sup>ハ</sup>。た<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。生<sup>ハ</sup>。て<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。恨<sup>ハ</sup>。み<sup>ハ</sup>。死<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。て<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。よ<sup>ハ</sup>。ろ<sup>ハ</sup>。こ<sup>ハ</sup>。ひ。あ<sup>ハ</sup>。ま<sup>ハ</sup>。ね  
 し<sup>ハ</sup>。や<sup>ハ</sup>。天<sup>ハ</sup>。滿<sup>ハ</sup>。陽<sup>ハ</sup>。感<sup>ハ</sup>。ら<sup>ハ</sup>。め<sup>ハ</sup>。て<sup>ハ</sup>。た<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。ける。上<sup>ハ</sup>。ロ<sup>ハ</sup>。ン<sup>ハ</sup>。キ<sup>ハ</sup>。地<sup>ハ</sup>。實<sup>ハ</sup>。有<sup>ハ</sup>。難<sup>ハ</sup>。や<sup>ハ</sup>。草  
 も<sup>ハ</sup>。木<sup>ハ</sup>。も<sup>ハ</sup>。皆<sup>ハ</sup>。成<sup>ハ</sup>。佛<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。こ<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。み<sup>ハ</sup>。ま<sup>ハ</sup>。て<sup>ハ</sup>。國<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。つ<sup>ハ</sup>。ら<sup>ハ</sup>。ぬ<sup>ハ</sup>。る<sup>ハ</sup>。光<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。あ  
 上<sup>ハ</sup>。シ<sup>ハ</sup>。テ。枯<sup>ハ</sup>。た<sup>ハ</sup>。る<sup>ハ</sup>。木<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。た<sup>ハ</sup>。にも<sup>ハ</sup>。誓<sup>ハ</sup>。ひ<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。花<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。咲<sup>ハ</sup>。う<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。ま<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。て  
 や<sup>ハ</sup>。め<sup>ハ</sup>。い<sup>ハ</sup>。せん<sup>ハ</sup>。木<sup>ハ</sup>。櫻<sup>ハ</sup>。樹<sup>ハ</sup>。花<sup>ハ</sup>。咲<sup>ハ</sup>。み<sup>ハ</sup>。なる<sup>ハ</sup>。傍<sup>ハ</sup>。覽<sup>ハ</sup>。せ<sup>ハ</sup>。よ。上<sup>ハ</sup>。地<sup>ハ</sup>。實<sup>ハ</sup>。や<sup>ハ</sup>。花  
 さ<sup>ハ</sup>。實<sup>ハ</sup>。なる<sup>ハ</sup>。なる。梢<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。色<sup>ハ</sup>。も<sup>ハ</sup>。あ<sup>ハ</sup>。ら<sup>ハ</sup>。た<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。て<sup>ハ</sup>。法<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。な<sup>ハ</sup>。ふ<sup>ハ</sup>。る  
 理<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。お<sup>ハ</sup>。も<sup>ハ</sup>。ひ<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。國<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。お<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。つ<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。ら<sup>ハ</sup>。河<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。梢<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。葉  
 こ<sup>ハ</sup>。ろ<sup>ハ</sup>。此<sup>ハ</sup>。珠<sup>ハ</sup>。數<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。法<sup>ハ</sup>。な<sup>ハ</sup>。れ。か<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。ら<sup>ハ</sup>。す<sup>ハ</sup>。つ<sup>ハ</sup>。け<sup>ハ</sup>。ず<sup>ハ</sup>。さん<sup>ハ</sup>。と  
 て。歸<sup>ハ</sup>。ると<sup>ハ</sup>。見<sup>ハ</sup>。れ<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。立<sup>ハ</sup>。留<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。て<sup>ハ</sup>。我<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。天<sup>ハ</sup>。神<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。傳<sup>ハ</sup>。使<sup>ハ</sup>。  
 名<sup>ハ</sup>。を<sup>ハ</sup>。は<sup>ハ</sup>。誰<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。か<sup>ハ</sup>。白<sup>ハ</sup>。太<sup>ハ</sup>。夫<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。神<sup>ハ</sup>。と<sup>ハ</sup>。す<sup>ハ</sup>。翁<sup>ハ</sup>。く<sup>ハ</sup>。さ<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。霜<sup>ハ</sup>。曇<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。て  
 け<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。や<sup>ハ</sup>。霜<sup>ハ</sup>。く<sup>ハ</sup>。も<sup>ハ</sup>。り<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。失<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。け<sup>ハ</sup>。り。上<sup>ハ</sup>。ツ<sup>ハ</sup>。レ。久<sup>ハ</sup>。堅<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。あ<sup>ハ</sup>。ま<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。岩<sup>ハ</sup>。戸  
 の<sup>ハ</sup>。神<sup>ハ</sup>。遊<sup>ハ</sup>。ひ。今<sup>ハ</sup>。思<sup>ハ</sup>。ひ<sup>ハ</sup>。出<sup>ハ</sup>。る。お<sup>ハ</sup>。も<sup>ハ</sup>。し<sup>ハ</sup>。ろ。や<sup>ハ</sup>。打<sup>ハ</sup>。上<sup>ハ</sup>。舞<sup>ハ</sup>。樂<sup>ハ</sup>。の<sup>ハ</sup>。役<sup>ハ</sup>。々

取にや。琵琶琴和琴。笛竹の。夜は更行ともはどき  
 の役者やなどや置さる白太夫いろいで出よと待た  
 まふ打上月もかやく宮寺の常の燈火めい光いた  
 上引上ッレ「如何にまら太夫の神。七社の御前に韓神催馬樂  
 唄ふや岳笏柏子の。役とは知すや白太夫 一仰は重  
 くは得とも。既に名にたにしら太夫か。星霜つもる老  
 の身の。役をはゆるし給ふへし「伊やとよ其役定りた  
 り。いろいで役をさすへきなり 一扱は辞す共叶ふま  
 上カシ「扱其扱は「韓神催馬樂 一燎のかけや「わけ  
 の二人、上同「玉垣「かやくける其中に「白太夫か小忌  
 の袖よるやとどるや 笏 柏子とらうくと。うつもよる  
 も「老のなみの雪の白太夫か岳の笏 柏子は面し  
 るや「下シテカ下シテカ唯今「かあつる舞歌の曲「七徳さう  
 しやう七柏子膝を屈して佛を敬ひ指かいなには。魔  
 縁をばらひ。おさむる手には。壽福をまねき。千秋樂  
 には民をやしなひ万歳樂には命をのふる。法の慈  
 をしきたまへの枕は袂うへは。尊き木櫻樹の梢にか  
 けりてふるや。一味の雨風をうらさて枝によりてこ  
 のみをふるひ落して彼尊性にわたへは。これこそお  
 先にけり

もひの玉をつらぬく数は百八煩惱の。數わ百八煩惱  
 をかたどる數珠の。道明寺の鐘。鼓に神樂の夢はさ  
 先にけり

鶴 龜

上シテ「千代のためしの數「何をひかまし  
 姫小松縁の龜も舞遊へは。丹頂の鶴も。一千年の  
 齡を君に。授け奉り庭上に參向申ければ。帝も  
 感の余りにや舞樂の秘曲は面白や打上月宮殿の白  
 衣の袖か「の色々妙成花の袖、秋は時雨の紅葉  
 の葉袖。冬はさへ行雪の袂を。ひる返す衣も薄紫  
 の雲の上人の舞樂の聲々に霓裳羽衣の曲をなせ  
 は。山河草木國土ゆたかに千代萬代と。悦ひ給へは  
 官人加興丁修こしをはやめ。君の齡も長生殿に。君の  
 よはひも長生殿に。還御なるころ。めてたけれ

吳 服

然るに神功皇后。三韓をしたかへ給ひしよ。和國  
 異朝の道廣く。人の國迄なひく世の。或日の本は長閑  
 なる。修代の光はあまねくて國富民ゆたかなり  
 東南雲治まりて。西北に風靜なり。應神天皇の

彦字かどよ。異國の勅使此國に。はし来たて来りたまひ  
 しに。あやめいどめの女婦をうへ。萬里の滄波を凌  
 き来て西日かけ残りなく吳羽の里に休らひ連日  
 にたつる。はた物の織にしきを織々の綾の紗衣を奉  
 つる。勅使奏覽有しかは。殿感ことにはあはたし。夫  
 より名付つ。如裏龍の衣の紋。いとなみも名高き山  
 はと色。をうつしつ。い。色。たつちり雲鳥の  
 はふさをた。い。あやどなす。い。かまこかりけり  
 上。然れば萬代は。同。絶せぬ御調あるへしと。彦定め有  
 しより吳服の文字をやわらけてくれはどりあやはど  
 りと名付させ給へは年をむかへて色をかす。あ  
 や。の。にしきの。からころも。返す。も君か袖。ふ  
 る。さためし。を引糸の。か。る。御代。め。て。た。き。上。ロンキ。抽。こ  
 れにつけても此君の。め。て。た。き。ためし。有。明。の。夜。す。か  
 らはたを織給へ。上。い。さ。く。さらははた物の。錦。を。お  
 りてわか君の。調。に。備。へ。や。さん。上。地。一。質。や。み。は。き。の。數。々  
 に。に。し。き。の。色。は。小。車。の。一。う。し。見。つ。の。時。す。さ。あ  
 かつ。され空を待給へ。そかたを。か。へ。て。來。らん。さら  
 は。い。ひ。て。吳。羽。と。り。あ。や。は。ど。り。と。か。へ。れ。共。の。鶴。は

またあやすや夜ながなりと待給へ夜をか。い。と。て。も  
 待給へ。上。歌。嬉。し。さ。か。き。や。さ。ら。は。は。く。此。松。陰  
 に。旅。居。し。て。風。も。う。ろ。ろ。く。と。の。と。き。夢。の。告。を。も  
 ま。ち。て。見。ん。君。か。代。は。天。の。羽。衣。ま。れ。に。ま。て。  
 あ。つ。と。も。儘。ぬ。岩。は。さ。ら。を。ん。ち。よ。に。八。千。代。の。松。の。葉。の  
 散。ら。な。す。し。て。色。は。猶。ま。さ。ま。の。か。つ。ら。な。り。さ。代。の。例  
 し。に。ひ。く。や。綾。の。紋。響。ら。ざ。り。け。る。時。ど。か。や。上。地。一。此。君。の  
 か。し。こ。き。世。ろ。と。夕。浪。に。聲。た。て。る。ふ。る。は。た。の。音。引。下  
 「にしきを織はた物のにち。に。さ。ら。し。の。字。を。顯。は。し。  
 こ。ろ。も。う。つ。ま。ぬ。た。の。う。へ。に。懸。別。の。聲。松。は。風。ま。た  
 は。磯。う。つ。浪。の。音。の。さ。り。に。ひ。ま。な。き。は。た。物。の。木。コ  
 仄。い。と。る。や。吳。羽。の。手。く。り。の。い。と。一。我。ど。る。は。あ。や。は。下。シ  
 「ふみ木の。あ。し。を。と。地。さ。り。は。た。ま。ち。よ。う。引。シ。テ。は  
 たり。ち。よ。う。と。打。上。惡。魔。も。恐。る。聲。な。れ。や  
 實。織。姫。の。か。さ。し。の。袖。打。上。思。を。出。た。り。織。女。の  
 引。く。た。ま。く。あ。へ。る。旅。人。の。夢。の。精。靈。妙。蓮  
 菩薩も。影。向。を。り。たり。夜。も。す。か。ら。よ。も。す。か。ら。寶。の。あ。や  
 を。織。た。て。く。我。君。に。さ。い。け。物。彦。代。の。た。め。し。も。二。人。の  
 お。り。姫。吳。羽。綾。は。の。と。り。く。に。く。れ。は。あ。や。は。の。と。り



どりのみつき物ろなるる。彦代ころ先てたけれ

右近

上シテ「見もせぬ人や花のとも<sup>同</sup>く知もしらぬも花の  
 陰<sup>ツミ</sup>の相宿りしてもる人の。いほしかかれて花車  
 の。榻立て木の本に。下居ていさやなかなん<sup>〇</sup>實  
 や花のもどに。歸らん事を思るは美景あよりて花  
 心の馴々初て詠んいさくなれてなか先ん<sup>〇</sup>百千  
 鳥花になき行わたしみは。はらなき程にうらやまれて  
 うはの空の心るれやうはの空のこころなれ<sup>上ロキキ地</sup>「け  
 に名にしおも神垣や。北野の春も時めける神の名所  
 数々に<sup>上シテ</sup>「詠むれば都の空のはるく<sup>〇</sup>と。霞渡や  
 北野宮居<sup>〇</sup>彦覽せよ時をなてはな<sup>〇</sup>櫻葉の宮所<sup>上地</sup>「花  
 のころ先のいろわけて。紅梅殿や老松の<sup>上シテ</sup>「縁<sup>〇</sup>よ  
 りあけ初てひとよ松も見てたり<sup>上地</sup>「日影の空もあかね  
 さす<sup>上シテ</sup>「ひら咲野行標重行<sup>上同</sup>野守は見ぞや  
 君か袖<sup>〇</sup>ふるさ彦幸の物見とて。くるまも立やみ  
 こしをか是る此神の彦<sup>〇</sup>旅居の右近の馬場渡り神  
 幸<sup>〇</sup>ろたほどかりける<sup>上同</sup>「あらかたの事かな。か  
 くしも委しく語り給ふ。社々の彦本地を。猶々教へた

はしませ<sup>シテ</sup>「誠は我は此神の。末社と歌れさみか代を

守りの神と思ふへし<sup>ワキカン上</sup>「能く聞は有難や。守りの

神とは扱々いづれの靈神にて。か様に歌れ給ふらん<sup>シテ</sup>

「荒恥かしや神ろとぞ。あさまには何といはしるの<sup>上同</sup>

まつとありや有明の<sup>〇</sup>く。月も曇らぬ久堅の<sup>〇</sup>天照

神にては。櫻の宮と歌はき。爰に北野のさくら葉の<sup>〇</sup>

神と夕の空晴て。月の夜神樂を待玉へと花にかくれ<sup>〇</sup>

失にけりや花に隠を失にけり<sup>上同</sup>「實今とても神の

代の<sup>〇</sup>く。誓ひはつきぬしるしとて。神と君と<sup>〇</sup>の

彦恵み。誠なりけり有難や<sup>〇</sup>く<sup>上同</sup>「すへらきの賢

き彦代を守るなる。右近の馬場の春をなて。花上苑に

あきらかにして。輕軒九陌の塵にましはる神慮。和光

の陰も曇<sup>〇</sup>なき。君の威光も影たかく。花もゆるかす

治る風も。のどかある代の先てたさよ<sup>上地</sup>「曇りなき。天

照神の恵みをうけては。櫻の宮井とあらはれ給ひ<sup>上シテ</sup>

「爰に北野の神の宮居に<sup>上地</sup>「花さくら葉の神と

歌はれ。曇らぬ威光をあらはしきぬの袖もかさしの

る雲のかげはし。はなに戯れ枝にむすほれかざし  
 も花の。いとさくらマイ打上「治まる都のはなきかり  
 同く、  
 春の。みいけの水に影を移し。うつし移らふさく  
 ら衣のうら吹返す梢にわかり。枝に木傳ふ花鳥の。  
 とふぎにかけり。雲につたひ。慥にわかるや雲の羽風  
 。はるかにあがるや雲れは風に。神は上らせ給ひけ  
 り。

西王母

上シテ、  
 三千年になるてふ桃のことしより。〜。花さ  
 く春にあふ事も。唯此君のよもの悪み。あつぎ國土  
 の千々のたねも。花の色も妙ある。上ロキ地、一扱はふし  
 きや久かたの。天津處女のまのわたりすかたを見る  
 ぞふしきある。上シテ、  
 齡ひの心なき露のまに。やど  
 るか袖の月のかけ。雲のうへ迄其めくみあまねき  
 色に移さぬ。上地、  
 うつろふ物は世の中の。人の心の花  
 ならぬ。「身は天上の。上地、  
 樂みに。明ぬ暮ぬを送りむ  
 かふ年とふれと限りもなき。身のはとも隔てなく。誠  
 は我こそ西王母の。分身よ先歸りて花の實をも歌

はさんど。天にろわかりける天にろ上り給ひける。ワキ  
 上歌、  
 糸竹呂律の聲々に。しらへをさして音樂の聲  
 澄渡る。天津風。雲の通ひ路こころせよ。上地ヨ  
 打上、  
 「面白や。〜。かゝるてんせんりわらの來臨なれ  
 は數々に。孔雀。鳳。迦陵頻伽。飛廻り聲々に。立  
 舞や袖の羽風天津空のころもならん天の衣あるら  
 ん。下シテ、  
 「色々のさしけ。物〜の中に。妙に見へたる  
 は西王母の共すかた。光りていらをか。やかし  
 ン。くさうさんの滌衣を着し。下シテ、  
 〳〵〳〵しん。櫻の冠を着。さよくしやうにもれる桃  
 を侍女か手より取かはし。上シテ、  
 君にさくくる桃實の  
 花のさかつき取敢す。マイ打上花もあゝるや。盃の  
 〳〵〳〵。年先遮る曲水の宴かやみかはれ水に。殿れたは  
 ふる。たをやめの袖も装束もたな引棚ひく雲の花  
 鳥春風に和しつく雲路に移れば王母も伴ひよち上  
 る。玉母も伴ひのほるや天路の。行衛もしらすろ。  
 成にける。

九世戸

これは此地開闢のむかし。同、  
 はや神國とあらかねの

きうの祭り品々の。衆生濟度の方便生死のさうを  
 たすけんとして「三世かくもの大聖文珠をこの島  
 に安置し給ひけり」此はし立を作らんと。初諾有  
 し其頃は。神の代末遠からず雲霧の虚空に満々てと  
 こやみのことく成しかはをのしん火をともし  
 て日夜に土をはこひて同じく松を植玉ふ。其とも  
 し火のあまりをかしこに。おかせ給ひしよ。火置の  
 島にて是も故ある神所あり。かくて神々あつまり  
 て。天竺五盛山の文珠を勸請したまへはかみは  
 うちやうの雲をわけ下は下男の龍神。音楽種  
 々ののはなふり。燈を捧げ奉る。其影向の有様語  
 るもあちか成けり。「寶有難き神の代の昔かた  
 りも今の世に。殘るどもし火くもりなき御影を松の  
 木陰かな。みまか夜の空も更行浦風の音をしつめ  
 て待給へかならず燈あらはれん」嬉しや扱もかく  
 斗。委く語る浦人の其名を名乗給へや。今は何を  
 かほむへき。我はしらすやこの寺の。大聖文  
 珠の修前なる。いしやう老人は我など。身位  
 心清淨は。こころを感じ來りたりと。いひ捨て其姿

松の木陰に失にけり。久堅の雲に渡る橋  
 立は。天津み空の。見はしか。打上月も更行天の  
 はら。紫雲たなひき。靈香薫し。天津乙女の雲の羽袖  
 光りも妙ある。燈を捧げ。松のこすゑに天降り。あま  
 くだる。あかりければ龍宮より捧ぐる御燈の光。海上  
 にうかんで見えたる粧ひ。あらた成ける出現かな。上  
 打上。本光あまねきともし火の。龍宮の内裏。照すなり  
 上地。空には日月燈明佛。又下界には龍神の  
 燈火。うしはにゆられ浮沈め共。光りはい。か  
 やきあかりて天地の両燈ひとつになりあひ。九世の戸  
 のあけかた。光い。た。一本より龍神は飛行自  
 在。に通力へんまんのさどくを見せんと。平地に  
 波瀾をおこしつ。海山虚空に飛かけつて。嵐をけ  
 たて。雨を起して吹くもり。震動すれ共。燈の光  
 は。明らか。猶澄のはるや天津乙女の姿も雲井に  
 入せ給へは又龍神は。波を蹴たて。さかまくらしはの  
 めくると共に。さかまくらまはの廻ると共に。ひかき  
 て波にう入にける

氷室

唐土長くかたぐ。帝都遙かに盛なり。佛日ひかりますくにして。法輪常に轉せり。陽徳折をたかへすして。雨露霜雪の時を得たり。夏の日にあたる迄消ぬす氷。春立風やよきよきて吹らん。實妙なれや。万物時に有あら。君の恵みの色ろへて。都の外北山に。や葉山の枝しけみ。此面彼面の下水に。集むる雪のひびろ山つちも木も大君のほ蔭にいかてもるへき。實我なから身れわぞの浮世の敷に有あから。實にもどり分て。猶天照すひの物や。他にも異なる捧物。威感以て甚しき。玉體を拜するも。御雪を運ふ故と。かや。然きは年立はつはるの。初音のけふの玉箒。手にとるからにゆらく玉のちおきなさひたる山陰の。ころの儘にて降つ。雪のしつりをかきあつめて。木の下水に播入て。氷をかきね雪を積て。待をれば春過てはや夏山に成ぬれば。いと。氷室のかまへして。立去事も夏陰の水にもすたる氷室守となつ衣なれども袖さゆるけしき成けり。實妙なれや氷の物の。伊弉諾の道も直にあるみやこに。いとや歸らん。暫く待

せ給ふへし。とて山路のお原に。今雷の水の伊弉諾備ふる祭り御覽せよ。ろもやひつきの祭りとは。いがある事にあるやらん。一人ころしらね此山の山神木神の。氷室を守護し奉。毎夜に神事あるなまを。いひもあへね。山暮て。寒風松聲に。こゑたて時ならぬ。雪は降おち。山河草木おしなへて。氷を敷て瑠璃檀に。あると思へは氷室室の。薄氷を踏と見ぬて室の内に入にけり氷室の。うちお入にけり。樂にひかれて古鳥蘇の。舞のろてころ。ゆるくなれ。打上。響りなき。御代の光りも天照す。氷室の伊弉調。備ふなり。打切備へよや。く。さも。水底のいさこ。長しては又巖の陰より。山河も震動し天地に。いきて寒風。颯りに肝をつめて。紅蓮大紅蓮の氷をいたく。氷室の神體さへ。か。やきてる歌はれたる。打上。谷風水透さ。ほこほりて。く。月も輝く氷の面。刀境を寫す。鏡のこどく晴嵐こするを吹はらばて。影もこふかき谷の戸に。雪はしよき。霞は横きりて岩漏水もさ。れ石の。源井の氷に閉付らる。いを。引放しく。浮み出たる。氷室は神風。荒さ

むや冷かや打上下シテ「かしこき君の汚調なれや。同」。波を治むるも氷。氷をしつむるも氷の日にろへ。月に行年を待たるひれ物の備へ。ろちへ給へや備へ給へど采女の舞の。雪を廻らす小忌衣の袂に添て薄氷を。砕くなくたくを解すなどかすなど氷室の神は。氷を守護し。日影をくたて。寒水をろく。清風を吹して花のみほこへ雪をわけ。雲を霞きて北やまのすはや都も見えたり。急げやいろま氷の物を備ふる所も愛宕の郡。捧くる供御も日のもとの君に。汚調物こそめてたけれ

竹生嶋

上シテ「辨財天は女體にて。同」。其神徳もあらたなる天女と現しおはしませは。女人とて隔てなし唯しらぬ人の言葉なぞ。かゝる悲願をおこして正覺年久しまゝつう王の古まへより利生さらに憐らす。上シテ「實にか程齡ひの。同。あら磯島の松陰をたよりによする海士小ふね。成は人間にあらすとて社壇れ。扉を押ひらき。御殿に入せ給ひければ。翁も水中に入。かど見しか白浪の立歸り我は此海の。あるし

ろどいひすて。又波に入せ給ひけり。上地「御殿しきりに鳴動して。日月光をかりやきて山の端出る如くに。歌れ給ふるかたしけなき。抑是は。此島にすむて神を敬ひ國をまもる。台藏界の。辨財天とは我事也。打上其時虚空に音楽聞て。花ふりくたる。春のよの。月に暁く乙女のたもと返す。面しろや打上夜遊の舞樂も時過て。月澄渡る海つらに。浪風頻りに鳴動して下男の龍神歌れたり。打上龍神湖上に出現して。光りも輝く金銀珠玉を彼稀人に捧る景色有難かりける奇特か打上本より衆生濟度の誓ひ。さましくをそと。あるひは天女のかたちを現し。有縁の衆生の諸願を叶へ。又は下界の龍神と成て。國土を静め。誓ひを歌はし。天女は宮中に入らせ給へは龍神はすなはち湖水に飛行して。波を蹴たて。水をかへして天地にむらがる大蛇のかたち。天地に群がる大蛇のうたちは。龍宮にどんでういりにける。

賀茂

上シテ「石川やせみの小河の消ければ。同」。月も流を

尋ねては澄も濁る同じ江の浅からぬこゝ  
 るもて。何齡ひの有へき年矢のはやくも  
 過る光陰をしみてもかへらぬはもとの水  
 流れはよもつきし絶せぬ手向成ける  
 下歌 ささ水を汲ふ  
 よく上ロキ地 汲や心もいさよ。加茂の川瀬の水  
 上は如何なる所あるらん 上シテ さつくとか岩根松か  
 ねしのさくる。瀧津流れは白玉の音ある水や貴船  
 川 上地 水もなくみらしかはる川。ろきは紅葉の雨どふる  
 シテ 上地 「あらしのろこの戸難瀬なる汲も名にや流るらん  
 「清瀧川の水くまは。高根のみ雪どけぬへき 朝日ま  
 ちるて汲ふよ 汲ぬ音羽の瀧浪は 下シテ 「うけてかしら  
 の雪どのみ一戴く桶も 身の上と誰もしれ老らく  
 の暮るも同じ程なき。けふの日も夢の現ると。う  
 ぼらふ影は有るからと 濁りななく水むすふの神の  
 こころくまよ。神のは心汲ふよ 上地 一けに有難き  
 多事哉。扱々か様に委く語り給ふ。多身は如何成人や  
 らん 上地 誰とはなとや思也。汝しらすや神慮にお  
 もひき。向へ給はし君を守りの。此神徳を告しらしめ  
 んど。顯れ出て 上地 恥かしや我姿をく。のち眞を歌

はなは浅間しやまのましや成なめよし名斗はしら  
 ま手の。やことまき神ろかしとゆふしてに立ま  
 ざれて神かくれに成にけりや神かくれになりけり  
 上ツレ  
 「荒有難の折からやな。我此宮居に地をしえて。法  
 界無縁の衆生をたに。一子と思し見ろまはす。御祖  
 の神徳あふくへしやな。曇らぬ御代を。守るなり 上地 「守  
 るへし守るへしやな君の恵みも今この時一時至るあり  
 時 いたる打上 地 感應 あれは影向微妙の。相好 莊  
 嚴まのあたりに。有 上歌同 打上加茂の山浪みたらし  
 の陰。移りうほらふみとせれ袖を。水にひたしてす  
 いみとるく。裔をうるはす折からに 上地 山河草木  
 動搖して。まのあたりなるわけいかつちの。神体來  
 現し給へり 上地 抑 是は。王城を守る君臣の道  
 別雷の神なり打上 有るひは諸天善神となつて。虛  
 空に飛行し。または國土を乗跡の方便 上地 和光同  
 瑩結縁のすかたあら有 上地 有かたの多事やな。打上 風雨隨  
 時の見ろらの雲井の。上地 「別いかつちの雲霧を  
 うから 上地 「光り稻つまのいさはれ露にま 下シテ 「やどるは  
 どたに鳴らかつちの 上地 「雨をおこして降くる足音は 下地

「ほろく、下同、ほろほろと、いさく、と踏ど、いさかす。  
 鳴神の鼓の、時も至れば、五穀成就も國土を守護し。治  
 まる時にはこの神徳と。威光をわらはしおはしまし  
 て。彦祖の神は、紅の、もりに。飛去く、いらせ給へは猶  
 たちろふや、雲霧を。別いかつちの。神もあまちに  
 よちのほり。神も天路によちのほつて。虚空に、あ  
 からせ給ひけり。

嵐山

上シテ、しやらの岩屋の松風は、同、く、寶相の花盛。開く  
 る法の聲たて、今は嵐の山さくら茶摘の川の  
 水清く。真如の月の澄る世に五濁のにこり有とて  
 も、流れは大井川其水上はよも盡し。いさく、花をも  
 らふよく。はるの風は、ららにみちて、庭前の木  
 をさるども神風にて吹かへは妄想の雲も晴ぬへ  
 し。千本の山さくら長閑さあらしの山風は。吹共枝  
 はならさし。此日も既に呉竹の。よのまを待せ給ふへ  
 し。明日も三吉野の山櫻立くる雲に打乗。夕陽  
 のこる西山や。南の方に行にけり。上同、打上  
 三芳野の。く。千本の花の種うゑて嵐山わらた

なる神遊ひ、ろめてたせこの神遊ひ、そめてたさ。上レ  
 奇色、々の、同、く、花ころましを白雪の。上ツレ、木守  
 勝手の、同、恵みなれや松の色。下ツレ、青根か、職爰に、下同、く、  
 小倉山も見えたり。向ひは嵯峨のはら。下は、大井  
 川の、岩根に波かゝる。龜山もみえたり。代と、  
 く、はやせく、神遊ひ、ちはやふる打上神樂の、鼓  
 聲澄て。く。羅綾の袂を、翻し、ひるかへす舞樂の  
 秘曲も度重つて。感、應、肝に銘する折から。上レ、ふし  
 さや南の方より吹くる風の。異香薫して瑞雲、引。金  
 色の光を輝き渡るは。藏王權現の來現かや。打上、和光  
 利物の御姿、く。上、われ本覺の都を出て。同、分  
 段同語の衆に交はり金胎兩部の一足をひつさけ惡業  
 の衆生の苦患をたそけ。扱又虚空に、手をあけては  
 忽ち苦界の煩悩をばらひ。惡魔降伏の正蓮のまなし  
 りに。光明を放つて。國土を照し、衆生を守り。誓ひ  
 を歌はしこも、かつて、藏王權現一躰分身同躰異名の  
 姿をみせて、をのく、あらしの山によちのほり、花に  
 たふれ梢に、かけて。さあ、ら、愛も金の峰の光  
 りも輝く千本の櫻。く、のさかゆる春ころ、久しけ

東北

色、  
 同「かかるか故に天地を動し鬼神を感せしむることわざ  
 神明佛陀の冥感に至る。殊に時ある花の都。雲井の  
 春の空迄ものどけき心を種として。天道に叶ふ。詠吟  
 たり。引所は九重の東北の靈地にて。王城の鬼門  
 を守りつゝ悪魔を拂ふ雲水の水上は山あけの加茂  
 川や。未白河の浪風もよひさきよひさきは。常樂  
 の縁をなすどかや庭には池水を湛へつゝ鳥は宿  
 す池中の樹僧はたゞ月下の門出いる人跡かす  
 く。の袖をつらねもすうを染めて色めて有様は實々  
 花の都なり。上見佛開法の數々。順逆の縁はいや  
 ましに。日夜朝暮に怠らす九夏三伏のまつた  
 けて秋きにけりと驚かす濁庭の松の風一聲の秋  
 を催して。上求菩提のきを見せ。池木に移る  
 月影は。下化衆生の相をえたり。東北陰陽の時節  
 も實どしられたり。松の夜の。春の夜の。間はあ  
 やまし。梅の花。上地。色ころみらね。かやはるく  
 る。かやは隠る。かやはかくる。實や色にう

み。香にめてしむかしを。よしなや今更に。思ひ出  
 れは我なからなつかしく戀しき涙を遠近人に。もら  
 さんも恥かし。暇。是まて。花は根に。同  
 今は。是。送。花はねに。鳥。は古巢に歸るると  
 て。方。丈の。もし火を。火宅とや猶人はみむ。爰こ  
 る花のうてな。和泉式部の風所よとて。方。丈の。室  
 に入と見えし。夢。は覺にけりみし夢は覺て失にけり

采女

同「然れば君につかへ人。其しなくの多き中に。同  
 きて采女の花衣の。うら紫のこころを碎き。君邊  
 仕へ奉るに。下。されは世上に其名をひろえ。情。う  
 ちにもり言葉外に歌はるためし。世もつて類ひ  
 おほかりけり。引。かつらきの大君。勅にしたかひ陸奥  
 の。忍ふもち摺誰も皆。ともおろそか成とて儲など  
 したりけれど猶しもなどやらん大君のこころ解さり  
 しに。うねめ成ける女のかはらけ取し言の葉の  
 露の情にこころどけ。敬感もつて。甚。し。されは  
 淺香山。陰さへ見ゆる山の井れ。あさ。くは人をおも  
 ふかの。心の花ひらけ。風も治り雲しつかに。安せん



をさすどかや 上シテ「然れど采女の戯れの。色音にうつる花鳥れ。とふさふ及ふ雲の袖。影も廻るやさかつきの。伊遊れみきの折々は采女のさぬの色へて。大宮人の小忌衣。さくらをかさすあしたよりにけふもくればとり聲の綾をなす舞歌の曲柏子を揃へ袂をひるかへして遊樂快然たる采女のさぬる妙ある。取分忘れめや曲水の宴の有し時。御土器たひくめぐり。有明の月更て山郭公さそひ顔なるに敬應を受けて遊樂の。月にあけ。マイ月になげ。おなし雲井の時鳥。天津うらねの。萬代迄に。万代と。限らし物を。天衣なつともつきぬ。岩はならなむ。松の葉の。散うせすして。正木のかつらなかつたはりの鳥の跡絶と。天地おたやかに。國土安穩あ。四海なみしつ。かぎり。猿澤の池の面。猿澤の池の面に。水。滔々として浪また悠々たりとかや。石根に雲起つて。雨はろうようを打なり。遊樂の夜すからこれ。采女の戯れと思すよ。讚佛乗の。因縁成物を。よく吊らはせ給へやとて又浪に。入にけり又なみの底にけりけり

芭蕉

「然るに一枝の花をさしせ。御法の色をあらはすや。一花開きて四方の春。のとけ空の日影をえて楊梅桃李数々の。色香にうめる。諸法實相。隔てもなし。水にちかき樓臺は。つ月をうるなり陽にむかへる花木は又。はるにあふ事安きなる。其ことわりも櫛々の。定。光の前にあもしろや。な。松過夏たけ秋来る。風の音信は。庭のおき原先。よりよか。秋としらすなり。身に古寺の軒の草。忍ぶとすれど。しへの。花はあらしの音にのみ。はせを葉の。もろくも落る露の身は。おき所なき出の音の。よもさにも。心のあさ。とも。かかはら。よしや思へは定めなき。世は芭蕉葉の夢の中。に。の。鳴音は。なから。おどろさあへぬ。人心おもひいるさの山は。あれど。月ひとり。伴ひ馴ぬ。秋の風の音。起ふし。けき小篠原。しの。に物思ひ立舞。袖は。しいさやかへさん。今。露は。月も。自妙の。こほりの衣。しものはかま。霜の。たて。露のぬき社。よわからし。草の袂も。久堅。

の同、く、の、あまつをどめの羽衣あれや、上シテ、  
 せをの葉袖をうへし、上地、返すたもとも芭蕉のあふきの  
 風はうはうと物凄き古寺の、庭の浅ちよのおふち  
 へしかるかや、おもかけうつろふ、露のまに。山お  
 るし松の風。吹はらひく。花も千種も散々に花  
 もちくさもちりくになれど。芭蕉は破れて。残り  
 けり。

江口

「或は人中天上の善果をうくといへ共。顛倒迷妄し  
 て未解脱の種をうへそ。上シテ、あるひは三途は難の悪趣  
 に墮して。思にさへられて既に發心のなかつたをうし  
 なふ。下シテ、然るに我等たましく受かたき人身をうけた  
 りといへ共。罪業深き身と生れ。ことにためしすくな  
 き河竹の流れの女となる。前の世の報ひまで思ひや  
 る社かきしけれ。引クセ、紅花の、片地、松のあしたつ紅錦繡の  
 山粧ひをなすとみえしも。夕のかせにさうはれ紅葉の  
 秋の夕、黄絞繡のはやし。色を合ひといへとも朝の  
 霜にうつらふ松風羅月に言葉をかはず賓客も去て  
 來ることなし。翠張紅圍に。枕を并へし妹背もいつの

まにかはへたはらむをよる心なき草木情ある人  
 倫いつれ袂を通るへきかくはおもひしりあから  
 「ある時は色にろみ貪婪の思ひ淺からず。又ある時  
 は聲をさし愛執のこころいと深きこころに思ひ口  
 にいふ妄舌の縁とある物をたす實や昔人は六道の境  
 に迷ひ六根の罪を作る事も見ること聞ことに  
 まよふ心あるへし。上地、おもひしりや。引クセ、實相無漏の大  
 海に。五道六欲の風は吹ねども打上階縁、具如のな  
 みの。たしぬ日もあし。下シテ、浪のたちあも何故  
 ろ。假なる屋とに。こころとむるゆへ。上地、こころと  
 めすは浮世もあらし。下シテ、人をもしたし。上地、待暮  
 もなく。下シテ、別路もあらし。上地、花よ紅葉よ月雪  
 の降こども。あちよし。下シテ、思へは假の宿。同、あ  
 もへは假の宿に。こころとむるゆへ。上地、こころと  
 我なむ。是までなりや歸るとて。すなはち普賢菩薩  
 つと歌はれ船は白象と成つし光りと共に白たへの白  
 雲にうち乗て。西の空に行給ふ有かた。く覺ゆる  
 有難くころはねはゆれ

半部

上シテ「窓燈に向ふらうけつは」同「や琴瑟にあたり」  
 愁傷の秋の山物すこのゆふへや 上ニキ地 實物すこと  
 風の音。すとの竹垣有し世の夢のすかたを見せ給へ  
 菩提をふかく吊らばむ 上シテ「山の端のこゝろもしらて  
 ゆく月は。うはのそらにて絶し跡の又いつか逢へき  
 上地「山腹のかきはあるとも折々は」下シテ「衾をかけよ撫  
 子の」上地「花のすがたをま見ぬなは」上シテ「跡どふへさか  
 中々に」中シテ「さらはどおもひ夕かほの」下同「草の半蔀お  
 し明て立いさる伊姿みるに涙もどしさらす」下クセ  
 其頃源氏のの中將と開けしは。此夕顔の草まぐら。唯  
 假ふしの夜もすから。隣をさけはみよし野や。多たけ  
 精邊の伊聲にて。南無 片地 當來導師の彌勒佛と唱  
 へける。今もたつときお供養に其時の思ひ出ら  
 れてうしろに濡る袂かな。猶夫よりも忌れぬは源氏  
 此宿を。見初給ひし夕つかたの惟光を招きよせ。あの  
 花をれどの給へは。白き扇のつまいたうこかしたり  
 しに此花を折てまいらする 上シテ「源氏ほくく」と伊覽  
 して。同「うちわたす遠方人に問どても。夫の花とこた  
 へすは。終にしらても有へきにわひにわふさを手

にふる。お契りの程は嬉し。おりく尋ねよるお  
 らは。定めぬ齋のこの宿の。あるまを誰としら浪の  
 ちよるへのすゑをたのまん。一首を詠えおはします  
 上「折てころ」上シテ「折て社。ろれかともみだ。たろかれに  
 上同「打上ほの」見らし。花の夕かほは花のゆふ顔。花の  
 夕顔」終の宿りはしらせ申つ。上地「常にはとふらひ  
 下シテ「おはしませと」上地「ゆゆつけの鳥の音」下シテ「鐘もし  
 さりに」上地「告渡るしの」め浅間にも成ぬへし。明  
 め先に夕顔のやとり。明ぬ先に夕顔の宿りの  
 また半蔀のうちに。入て其ま。夢とる。成にける

班女

「夕の嵐おしたの雲。何れか思ひの妻ならぬ。淋し  
 き夜半のかねの音。けしらの山に響つ。明きんと  
 して別れを催し。下シテ「せめて聞る月たにも。しはし  
 枕に残らずして。又。獨りねになりぬるや。又。翠  
 帳紅圍お。枕ならふる床の上。なれしふすまのよすか  
 らも同穴の跡夢もあし。よしうれもおなし世の。最の  
 みを去とも。いつまで草の露の間も。比。翼。連理  
 の語らひ其。山宮の私語も。誰か聞傳へて今の世

迄漏すらんか去にても我妻の秋より先にならずと。  
 夕の敷は重かれど。わたし言葉の人心を頼きて來ぬ  
 夜はつもれとも欄干に立つして其方の空よ  
 と詠れば夕ぐれの秋風あらし山下風野分も。あの  
 松をこころはおどつるれ我待人よりの音信をいつ  
 きかまし。せめてものかたみの扇手にふれて。風  
 の便とおもへとも夏もはやすきの煙の秋かせひ  
 やかに吹落て團雪のあふさもゆきなれば名を  
 聞も冷しくて秋風恨みありしや思へは是  
 も實逢は別れなるへし其むくひなれば今更。世を  
 も人をも恨じまし唯思はれぬ身のはとを思ひつ  
 けてひとり居の班女か。ねやうさひしき。陰にか  
 ける。月をかくして懐に。持たるあふさ。袖も  
 三重かさね。其色衣の妻のかね言  
 「かならずと夕暮の月日もかさなり秋風は吹とも  
 」。おきの葉のうよとの便りもさかて。鹿の音虫のね  
 も。かれくの契り。あらしなや。形見の扇よ  
 り。猶うらおもて有物は人。心成けるうや。  
 わふさとは空言やあはてう戀はうふ物をく。

井筒

「其頃は紀の有常か娘と契り。いもせのこゝろ淺か  
 らざりしに。又河内の國高安の里に。知入ありて二道  
 に。忍ひて通ひ給ひしに。風ふけは興津白波た  
 つた山。夜半にや君か獨り行らんと覺束さみのよるの  
 道。行術を思ふ心とけてよりの契りはかれく。かり  
 實ささけしるうたかたの。衾をのへしも。理りなり  
 のまへ。井筒によりてうなひこの友たちかたらひて  
 たのひに影を水かみ。おもてをあらへ袖をかけ心  
 の水も底井なく。うつる月日も重どて。ねどなまぐ恥  
 かはしく。樂に今は成にけり。其後彼。まめ男言  
 葉の露の玉章の心は花も色ういて。筒井。筒井  
 つ。かけしまろかたけ。老にけらしな妹見さる間  
 にと詠て贈りけるほどに其時。女も競へこし振  
 分髪も肩過ぬ。さみあらまして。誰かあくへさ  
 ど。樂によみし故あれや。つ井筒の女ども。聞  
 らしは有常か。娘の古き名なるへし。實や古  
 にし物語。聞は妙なる有様のあやしや名乗おはしま

せ 上シテ、誠は我は戀衣。紀の有常か娘どもも、白  
 浪の立田山よはに紛れて來りたり。上地「ふしきや扱は龍  
 田山。色にう出る紅葉はの。」「紀の有常か娘ども」又は  
 井筒の女共、「恥かしから我なりと、下同いふやしめ  
 細のななき世を。契りし年はつゝ、井筒のか  
 けにかくれけり。」「更行や在原寺のよるの  
 月。昔をかへす衣手よ。夢待ろへてあり枕  
 苔の庭に、臥おけり。」「あたなりと名にころた  
 れて櫻花。年に稀成人もまちけり。加様によみし我  
 なれば。人待女どもいはれしなり。われつゝ井筒の昔  
 より。まゆみ 槻 弓年を経て今はなき世に業平の像  
 見のなを去。身にふれて「恥かしや。むかしおどこに  
 うつり舞「雪を廻らす。芭の袖、爰に來て。む  
 かし、ろかへす。在原の打上寺井にすめる。月ろさや  
 けさく。」「月やあらぬ。松や昔と詠めし。さつ  
 の傾ろや。つゝ井筒「つゝのつゝ井筒にかけ  
 ます。」「まるかたけ。」「老かけらしき。」「おひにけ  
 るろや。」「さあからみえし昔男の冠なをしは  
 女ども見らす。おどこ成けり。業平の面影。」「みれ

はまつかしや、下同われなからなつかしや、亡婦はく  
 れいの姿はしほめる花の。いろな、片地、ふて匂ひ残り  
 て在原の寺の鐘も。ほのくどあくれは古寺の松  
 風やはせを葉のゆめも、やふれてさめにけりゆめは  
 破れおけにけと

夕顔

「中にも此夕顔の巻は。とに勝れて衰れなる。情の  
 道も淺からず。契り給ひし六條の。汐息所に通ひ給ふ  
 によすかに寄し中宿に。」「た、やすらひの玉鉾の。便  
 りにたてし御車なり。物の綾目も見ぬあたりの。小  
 家かちなる軒のつまに。咲かゝりたる花の名も。おな  
 らすみてし夕顔の。折すことしとあた人のこゝろの  
 色は白露の。情おさける言の葉の。末をあはれと尋  
 見し。園の扇の色ことたかひに秋の契りとは  
 なさ。りし篠目の。道の迷ひの言の葉も。此世は  
 かく斗。はるなかりける陽炎の。いのち懸たる程もな  
 く。秋の日やすく暮はて。宵の間過る古郷の松の  
 ひいさも怖しく。上シテ、風にまたたく燈火の。さめる  
 と思ふこゝちして。あたりをみればうは玉の、やみ

のうつゝの人もなくいかにせんとかおもひ川うたか  
 た人はいさ消てわかへらぬ水の淡とのみ。散果  
 し夕顔の花はふたてさかめやど。夢に來りて申  
 きて。有つる女もかき消様に失にけり。一上歌  
 更は夜もすからちか。月見かてらにわかしつ。法華  
 讀誦の聲絶す。とふらふのりまことなる。一上  
 シテ上  
 「さなきたに女は五障の罪深きに。開も氣疎き物の  
 怪の。人失ひし有様を。あらはす今の夢人の跡よく  
 吊ひ給へどよ。打上ふしきや扱は宵のまの。山の  
 端出し月影の。ほのみみろめし夕顔の。すへは露の  
 消やすき。本のしつこの世かたりを。かけて歌はし給  
 へるか。一見給へ爰もおのつから氣疎秋の野らとな  
 りて。池は水草に埋めて。古たる松の陰暗く。又鳴  
 さわく鳥のから聲身にしみわたるをりからを。さも  
 物凄く思ひ給をし。心の水は濁り江にひかれてか  
 る身となれ共。優婆塞か。行ふ道を知へにて。一地上世  
 もふかき。ちさら絶すな。一打上御僧の今の  
 吊ひをうけて。御僧のいまのどふらひを受て。か  
 すく嬉しやと。夕顔の笑の眉。一開くる法華

下シテ上同  
 の「花ふさも 變成男子の願ひの儘にわ解脱の  
 衣の袖をから今宵は何をついまんと言かと思へ  
 は音羽山。峯の松風通ひ來て。明渡る横雲のま  
 よひもなしや。襟目の道より。法に出るうと。わけ  
 くれの空かけて雲の紛れに。失にけり。

野宮

シテ上同  
 會者定離のならひ本よりも。おどろくべしや夢の  
 世と。程なくふくれ給ひけり。一下シテ上同  
 露の。光源氏のわりをくも忍ひ。くゆきかよふ  
 といろの末のなとや覽。またたどくの中をりしに  
 一上同  
 「つらき物にはさすかに思ひ果給はすはるけき  
 野之宮に。分入給ふは。ろいど物おはれなりけりや  
 秋の花皆おどろへて出の聲もかれ。く  
 一上同  
 松吹風の響き迄もさきひき道すから秋のかなし  
 みもはてなし。かくてさみ爰に。詣させ給ひつ。情  
 を懸てさま。の言葉の露も色。のゆ。ろの  
 うちろ哀ある。上シテ上同  
 河さみの身はうき草のよるへさき。ろの水に  
 誘はれて。行衛も鈴鹿川八十瀬の波にぬれ。す伊

勢まで誰か思はんの。こののは、うひゆく事もたらし  
 なきものを親と子の<sup>ト</sup>たけの都路におもむきし  
 こころ<sup>ト</sup>恨み成けれ<sup>上</sup>。けにまいはれをさ<sup>上</sup>か  
 らに。た、人ならぬ御氣色、其名を名乗給へや<sup>上</sup>。  
 「名乗てもかひなき身とて恥かしの。もりてやよろに  
 しられまし<sup>上</sup>。よしさらはるの名もなき身とて問せ給へ  
 や<sup>上</sup>。ちき身と聞はふしきや。扱は此世をはかき  
 む<sup>上</sup>。さりてひさしきあどの名の<sup>上</sup>「御息所は」「我なり  
 と<sup>上</sup>。夕くれの秋の風<sup>上</sup>。杜、木の間の夕月夜影か  
 すか成このしたの。黒木の。鳥井のふたはしらに  
 立かくれて失にけり跡たちかくれ失にけり<sup>上</sup>。かた  
 敷や森の木陰の昔ころも<sup>上</sup>。同じ色成草むしろ。思  
 ひをのへてよますから。かの御跡をとふどか<sup>上</sup>。  
 「野宮の秋の千種の花車。我もむかし  
 に廻り來にけり<sup>上</sup>。打上ふしきやな月の光りも幽ある  
 車の音のちかつく方を。みればあしろの下簾。おもひ  
 かけざる有様なり。如何様疑ふ所もなく。御息所にて  
 ましますかさもあれいか成くるまやらん<sup>上</sup>。いか成車  
 と問せ給へは思ひ出る其昔<sup>上</sup>。賀茂のまつりのくるま

あらしひ主はたれどもしら露の<sup>上</sup>。「所せき迄たてな  
 らふる<sup>上</sup>。「物見車のさま<sup>上</sup>。ことに時を<sup>上</sup>。葵の上の  
 「傍車とて人を拂ひ。立さわきたる其中に<sup>上</sup>。「身は小  
 車のやるかたもなしと答へて立おきたる<sup>上</sup>。「車の前後  
 に<sup>上</sup>。「はつとよりて<sup>上</sup>。「人々ならぬに取付つゝ人給ひ  
 の奥に。おしやられて物見くるまのちからもさき身の  
 ほどろおもひしられたる<sup>上</sup>。よしや思へは何事  
 も。報ひの罪によもれし。身はをうししの小車の  
 廻り<sup>上</sup>。きてつまつてうま<sup>上</sup>。をばらし給へや。<sup>上</sup>  
 「昔を思ふ。花の袖<sup>上</sup>。月にどかへす。けしきか  
 さひしくも森の下露<sup>上</sup>。身の置所も哀れむ  
 かし<sup>上</sup>。「庭のた<sup>上</sup>。すまゐる<sup>上</sup>。「よろにうかはる<sup>上</sup>。景  
 色もかりある<sup>上</sup>。「小柴垣<sup>上</sup>。「露打はらひ。とはれし<sup>上</sup>。我  
 も其人も。唯夢の世とより行跡あるにたき松  
 虫の音は。うりむりんとして風茫々たる野宮の夜す  
 からなつかしや打上<sup>上</sup>。爰は元來なたしけなくも神風や  
 伊勢のうちどの鳥居に出入すかたは生死の道を。神  
 は受すや思ふらんと。また車にうち乗て火宅の

門をやりてぬらん火宅のかど

佛原

「始めは妓王を召おかれて。遊舞の寵愛はあはたし  
 くて。色香をかざる玉衣の。袖の白露おきふしの。ほ  
 雁のうちを立さらして。さながら宮女のごとくありしに  
 思はざるに折をぬて。佛前を召れしより。心  
 うつりていつしかに妓王は出されまいらせて。世  
 を秋かせの音更て。あみたの雨も。をやみもせず  
 下クセ  
 下クセ 實や思ふ事かなはねはこり浮世なれ。われはもと  
 よよゆうしよくのち花。一時の盛なればちるを何  
 と恨みんや。嵐は吹共松は本よりとさはをり。いつ歎  
 さいつ驚む浮世と。思へはかゝる折節の。来る  
 ころ教へされ。しどもまよひを照すなる。彌陀の  
 浮國もろきたると。頼みをかけて西山や。うさ世のさ  
 かの奥深き草の庵りにかくれ家のかくれてすむと思  
 ひしにおもひの外なる佛前のご様をかへ來りた  
 り。こはうも去にても斯捨る身となせぬれど。猶も浮  
 身のうらめじさの。執心は残るに。もかゝる心も  
 つ人かや。今ころ。誠の佛にてましますとて。妓

王は手を合せ感涙を流すはかりなり。上ロキ地。むかし語

りは扱おきぬ。さて今跡をどひ給ふ。身いかななる人

やらん。上シテ。我はたれどか岩代の。松の葉結ふ露の身

のゆくゑを何と問給ふ。上地。行簡いつくと白雪の跡を見

よとは此原の。草の穂はこゝちをれや。地。露の身をわく

「草堂の。上同。あるしは佛よといひ捨て。立さる。か

けはくさころも。尾花か袖の露分草堂のうちに。入

にけり。上。一松かせ寒き此原の。草のかり

ねの床とは。浮法をなして夜もすから。彼跡とふる

有難き。上。浮シテ上。あら有難の浮經や。はやあか

つきに。もるや。遠寺の鐘もかすかにひびき。月お

ちかゝる山かつらの。あらしはけしきかり寝の床に。

夢はしさまし給ふ。打上。不思儀や。佛の原の花

まくらに。遊女の影の見え給ふは。如何様開つる佛。浮

前の。幽れいにてうましますらむ。恥かしなから古し

への。ほどけといはれし名を便にて。輪廻の姿も歌舞

をなす。極樂世界の。浮法の。聲。佛事をなすや。此原

の。夜の舞の妙なるうて。草木木なをく。氣色か。な

上シテ。ひとり猶。ほどけは。浮名を。尋ね見ん。上地打上。をの



をの、かへる、法の、場人。法の、場人の、下シテ「法の、教へ、も、  
いく程の、世ろや、上地「前佛は、過ぬ、下シテ「後佛は、いまた、なり、  
上地「夢の、中間は、下シテ「此世の、中ろや、上地「鐘も、ひ、き、下シテ  
鳥も、ねを、鳴、上地「夜半の、中なる、夢まほろし、の、上「一、睡の、う、  
ちろ。ほ、ど、けも、有、ま、し、ま、し、て、人、間、も、下シテ「あ、ら、し、吹、雲、  
水、の、同「天、に、浮、へ、る、浪、の、下「一、滴、の、露、の、始、め、を、  
は、何、と、か、返、す、舞、の、袖、一、歩、。あ、け、さ、る、前、を、こ、ろ、下シテ  
と、け、の、舞、と、は、云、へ、け、れ、と、唄、ひ、捨、て、失、に、け、り、や、唄、ひ、  
捨、て、失、あ、け、り、

空 蟬

シテ「光源氏中將とサせし比はひかや。同彼中神はかこと  
ゆへ。此中川の傍宿り。忍ぶの亂れ淺からず。引中「  
の夜やうかまけん。何心なき空途も見る人からの天の  
原は月の光りさへ治まれる成物から。影さやか成有  
明の、上シテ「つれなきを。恨みもはてぬしの、同「  
あへぬまておどろかす。衣くの、下「名残りか、有、  
き身のうきを。歎くにわけて明る夜も。夫のみならず  
空蟬の、上「ぬけもしは馴し古しへを問せ給へや、  
\*地、上「むかし語りを開からに。いと、こゝろも法の門、

出る名残を如何にせむ。上シテ「旅人のさるてふ笠のすげ  
なくも、上「村面を降捨てたつかたに日も暮ぬ此宿りに  
もどめまほし。上地「星の逢瀬もほと近き。修住家とはこれ  
やらじ。下「恥かしなから中川の、地「宿りは爰も、下「軒ふり  
て、下「敷ならぬふせやに生る名のみは箒木の。こすゑ  
に啼はらつ蟬の。あるかとみれば其儘道にあやあ  
く成にけり、上「一偈は此世別れ空蟬の。現に顯は  
れ給ひけるろや、上「いさや修跡吊らはんと、上「夜もす  
から思ふや法の苦衣、上「袂に月の隈もなき。此  
妙經を讀誦して。かのほあををどふどかや、  
上「「あら有難の修吊らひやな。此修經は有精非精も。  
もる、かたなき妙典の。功力にひかれて空蟬の。う、  
なき世を忘れ草。菩提の種と成たるろや。有難や、  
上「「いしさをあまどるむともしもなきしの、上「めに。夢か  
現か空蟬の。すかた顯はし給ふ事、上「只是法のふしき  
なれば、上「すきはち歌舞の菩薩の舞恥かしや。聲も佛事  
をなす蟬の。羽袖を返し。舞と、上「引、上「山の端に  
雲の横さる。宵の間は、下「出るも月の。またれこゝろ  
すれ、下「待れし月もをちかたれ、下「またれし月も遠

近人に。言葉をかはず。法の如にしもへたてなき  
 の軒端の萩の露うちはらふ。風にみたる。蟬のもろ  
 こる聲。くに鶏の音も。明ゆくらの月のさむし  
 ろ敷妙の。風のためくら袖ふれて。月のさむし  
 かけの手まぐらの。夢は覺て。明にける。

松風

「あら戀しや去にても。又いつれ世の音信を」  
 松風も村雨も袖のみぬれてよしなやな。身にも及ばぬ  
 戀をさへ。須廣のあまりお罪深し跡吊らひてたひ給  
 へ。戀草の露も思ひも乱れつゝ。こゝろ狂氣  
 に馴衣のち己の日のちかはらひなゆふしての。神のたす  
 けも浪の上哀れに消し。憂身なりや。あはれいにし  
 へを。思ひ出ればなつかしや。行平の中納言みとせば  
 爰に須廣の浦。部へ上り給ひしか。此程のかたみと  
 て。彦立鳥帽子狩衣を。殘しおき給へとも。是を見る  
 たひに。いやましのおもひ草葉末にむすふ露のまも。  
 忘れられはこゝろあぢきなや。形見こゝろ今はわたなれ是  
 ちくば。忘る。隙も有なんと。讀しむことばりや。猶お  
 もひこゝろはふかけれ。宵々にぬきて我ぬるかり

衣。かけてる頼むおなし世に。住かひあははこゝろ忘れ  
 篋もよしをしと。すていも置れす。ればを。影に立  
 まさり。起ふしわか下まぐら。跡より戀の責く  
 れはせせむかた涙は。ふししつむ事うかきしき。三  
 瀬河。たぬぬあみたのうきせにも。乱る。戀の。ふら  
 はありけり。あら嬉しや。われに行平の。入あるか。松  
 風と召れさふらふ。やいて。参らふ。淺ましや。其彦  
 こゝろ故にこゝろ。執心の罪にもしつみ給へ。裳婆にて  
 の。妄執をなを。忘れ給はぬ。や。われは松にてこゝろ  
 へ。行平は。入もさふらはぬ物を。うたての人の  
 ひ事や。あの松てうは行平よ。假ひしは。別る。いとも  
 まつとしきかは。歸こんと。つらね給ひし言の葉は。如何  
 に。實さ。忘れて。さふらふ。や。た。ひしは。別る  
 へ。もまたは。こむ。の言のはを。こなたは。わすれ  
 す。松風の立かへり。こん御音信。終にも。きかは。村雨  
 の。袖しは。し社ぬる。いとも。まは。にかは。らて。歸て  
 は。荒頼。もしの。彦歌や。立わか。れ。い。さ。は  
 の山の峰に生る。まつとしきかは。今歸りて。む。か  
 うれば。いまは。の。遠山。まつ。是は。あつかし。き。み。爰

に。すまの浦廻の松の行平。立歸りこは我も  
 木陰に。いさ立よりてうまれ松の。なつかしや打上  
 松に吹来る風も狂して。須摩の高浪はけしき夜すか  
 ら。妄執の夢に見ゆるなり。我跡とひてたひ給  
 へ。いとまやてかち歸る波の音の。須摩のうらかけ  
 て吹うこしろの山おろし。關路の鳥もこゑを夢も  
 跡なく夜もわけてむらさきとせしもけき見りは松  
 風はかりや残るらんく

熊野

花前に蝶舞紛々たる雪。柳上に鶯とふ片々たる  
 金。花は流水に随て香の来る事とし。かねは寒雲を  
 隔て聲の至る事運を。清水寺の鐘のこゑ。祇園精舎  
 を顯はし。諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色。  
 娑羅双樹のこゑはありあり。生者必滅の世のあら  
 ひ。實ためしあるよろほひ。佛も本は捨し世の。あり  
 はは雲に上見ぬ。鷲のお山の名を殘す。寺は桂の橋  
 はしら立出て嶺の雲。花やあらぬ初櫻の紙園はま  
 し下河原。南をはるかに眺れば。大悲擁護  
 の薄かすみ。熊野權現のうつりまます。名もれあし今

熊野。稻荷の山の簿紅葉の。青かりし葉の秋また  
 花の春は清水の唯たのめ頼もしき松も千々の花  
 さかり。山の名の。音羽あらしの花の雪。ふかき  
 情を。人やしる。なふく。俄に村雨のして花を散  
 しはいかに。實に唯今の村雨に花のちりひよ。  
 荒こころの村雨やな。春雨の。ふるはなみた  
 か。さくら花。散をしまぬ。人やある打上荒た  
 うどや嬉しやあ。是觀音のほ利生あり。春。てあ  
 りや嬉しやあ。是迄ありや嬉しやあ。かくて都に  
 供せは。又もや多意の替るへきた。此まいに多  
 暇。夕津けの鳥かあく東路さしてゆく道の。頓  
 ておすらふ逢さかの。關の戸さしもこころして。明行  
 跡の山見ふて。花をみすつるかりかねのうれば  
 こし路われはまた。あつまにかへる名殘かあく

雲雀山

落冬あやまつて暮春のかけにはこころひ。又躑躅は  
 夜遊の人の折をねておどろく。春のゆめの中。胡蝶  
 の遊ひ色香に先しても皆これ心の花ならんや。實面  
 白き優花の友。春のこころや。惜むらん。思へさ

くら色に。ろめし袂のあしければ。衣かへらぎかけふ  
 には有けるや夫のみかいつしか春をへたつる杜若  
 ちからころもはるくの。面影残るかはよ  
 どりの鳴うつる聲迄身のうへにきく哀さよの片地  
 てう花にめて。鳥をうらやむ人こゝろ。思ひの露もふ  
 かみくさの。しけみの花衣野を分山にいていれども更  
 に人はしら露の思ひはうちにあれど色になごやわ  
 らはれぬ<sup>上シテ</sup>去にても。馴し儘にてらじきか<sup>同</sup>今は  
 むかしにあら坂や<sup>下</sup>このて。かしはの二面をにもかく  
 にも故郷の余所をにありてかつらきや。高間の山の  
 巔<sup>下</sup>はき<sup>上</sup>爰に紀て跡のさかひある雲雀山に隠居  
 て。霞の網にかいり。めちもなき谷陰の。鳴の草く  
 さらぬ身の。露に置れ雨にうたれ<sup>下</sup>のくても「消  
 やらぬ<sup>下</sup>は身の果る病はしき<sup>上</sup>」<sup>同</sup>「遠近の<sup>上</sup>」をちこちの  
 打上遠近の。たつきもしらぬ山中におほつかなくも  
 呼子鳥のや雲雀山にや待給ふ<sup>下</sup>。ささや歸らん

吉野靜

然るに彼判官は。神道をおもん<sup>同</sup>て朝家を敬ひ。中

こふる忠きんを抽てわたくしの省みさら<sup>下</sup>にさし  
 「人隠し申す共。神は正直のからへに宿り給ふなれ  
 は「静か舞の袂に。しはらく移りおはしまし。義經  
 を守り給へど。祈るる哀成ける<sup>引</sup>」抑景時か。其隠言  
 の見なかみを<sup>下</sup>思へは渡邊や流るる水にみち鹽の。逆  
 梅たてんと浮舟の<sup>下</sup>梶原か申し事。よも順義にていは  
 の<sup>下</sup>さきは義經は。直に治め<sup>下</sup>三芳野の神の誓ひの  
 まとあらは<sup>下</sup>朝朝も開し召なをされ義經。まつけきの  
 勅をうけ。洛陽の西南は是分國とあるへし<sup>下</sup>あらは  
 當山の衆徒ことく<sup>下</sup>參洛し。歸依<sup>下</sup>渴仰の<sup>下</sup>袂に。  
 恵みをいたきたまふへし<sup>下</sup>空賢不忠なし給ふな。  
 彦谷はいはし<sup>上</sup>「但し一衆徒中に。猶憤り深うし  
 て。近みて<sup>下</sup>追<sup>下</sup>駈給ふども。その名開ゆる人々を討  
 と、先申さんは。片岡ましを鷲の尾扱。忠信はなら  
 ひさきの精兵うよ人々に。防矢射られ給ふ<sup>下</sup>あど。語れ  
 はけには衆徒中に。すむ人ころ<sup>下</sup>あかりけれ<sup>下</sup>。一服や  
 しつ<sup>下</sup>「しつや腹。腹のをた巻。繰返し<sup>下</sup>。昔を今  
 む。あすよしもかな打上<sup>上</sup>大かた舞の面白さに。時刻  
 をうつしてすまぬも有けり<sup>下</sup>。又は判官の武勇に恐

れてよし、義經をはかどし、せと。僉議をがふる衆徒も有けり。去ほとに。時移つて。主君も今はたいのふか。かしてきはかり事に、んきく君をは。落し申せ。心しつかに願成就して、都へどてころ。歸りけれ。

草紙洗

上シテ「繪言なればうれしくて。落る涙の玉たすむすんてかたにうちかけて。すてに草子を洗むと」次節上同、和歌のうらはのもしは草く、波よせかけてあらはん、「天の川原にあらひしは、」上地、「秋の七日の衣をり、」上歌同、「花色きぬの袂には、」上地、「謀の匂ひや。ましるらん打上、」上歌同、「かりかねの翅は、」上地、「の敷をれどあどたためねは、」上歌同、「あらはをす、」上地、「顯川に耳をあらひしに、」上地、「濁る世をすましける、」上地、「舊昔の鬚を洗ひしは、」上地、「川原に解るうす氷、」上地、「春の歌を洗ひては霞の袖をどかふよ、」上地、「冬の歌を洗へは、」上地、「一棧も寒き水鳥の。うはけの霜に洗はん上毛の霜に洗はん、」上地、「戀の歌の文字をれば忍ひ草の墨さの、」上地、「涙はうてにふりくをてのし、」上地、「草も亂る、」上地、「忘れ草も見たる、」上地、「尺敷の歌の敷は、」上地、「蓮の糸、」上地

うみたる、」上地、「神所の歌は榊葉の、」下地、「庭火に袖うかはける、」上地、「しくれにぬれてあらひしは、」上地、「紅葉のにしき成けり、」上地、「住吉の、」上地、「久しき松を洗ひては岸によするしら浪をさつとかけてあらはむ。洗ひく、」上地、「取上てみればふしきやこはいかに、」上地、「數々の其歌の作者も題も。文字のかたちも少しもみたる、」上地、「事もなく、」上地、「いれ筆をきはらさ草の。もしは一字も、」上地、「残らて消にけり。有難や、」上地、「出雲住よし玉津島、」上地、「人丸、」上地、「赤人の、」上地、「悪みかどふし拜み、」上地、「悦ひて龍顔にさしあけ、」上地、「たりや、」上地、「春來つては。あまねくこれ桃花の水、」上地、「一石にさはりて、」上地、「置く來れり、」上地、「手まつる、」上地、「さる花の、」上地、「一枝、」上地、「桃色の衣をや。襲ぬらん、」上地、「霞立、」上地、「イ、」上地、「霞たては。遠山になる。あさはらけ打上日影に見ゆる。松は千代迄、」上地、「松はちよまて四海の浪も、」上地、「四方の國も、」上地、「民の、」上地、「とさしむ、」上地、「ね御代ころ、」上地、「堯舜の佳例され、」上地、「大和、」上地、「うたのおこりは、」上地、「荒金の土にして、」上地、「さの、」上地、「をの尊の、」上地、「守り給へる神國なれば、」上地、「花の都の春も、」上地、「長閑に、」上地、「花のみやこの松も、」上地、「のどかに。和歌の道こそめたたけれ、」上地

高野物狂

同 中にも此三鉢の松は。大同二年の浄歸朝以前に我法  
 成就圓滿の地の。印に残り留れをて。三鉢を授させ  
 給ひしに。光りと俱に飛來り。此松か枝の梢にと  
 まる。然れば諸木の中にわきて。松にとまる  
 のためし。千代万世のすゑかけて。久しかきどの  
 方便。委く舊記に。歌はし給ふ。されはにや。眞  
 如平等の松風は七葉のみねを静に吹わたり。法性  
 隨縁の月の影は八つの谷に曇らすして。誠に三會  
 の曉を待てる也。然れば即身成佛の相を歌はし  
 入定の地を示しつ。深々たる奥の院。深山鳥の  
 聲聞て。飛花落葉の嵐風まで。無常觀念の粧ひ  
 是とて。又常住の。皆令佛道圓覺の相をさすとかや  
 上。然れば時移り比さるや。四季折々のおのつ  
 から。光陰惜へし。時人をまたされは。貴賤  
 群集の雲かすみか。高野の山深み。谷峰の風  
 常樂の夢さめ。法の稱名妙音の。心耳に残り満  
 て。となへ行ふ開法の。聲は高野にて。靜なる國地成

けり。尋ねてし。霞の奥の。高野山。時しも  
 春の花壇上。月傳法院紅葉三寶院よ  
 りも。猶深し。雪は奥の院。かれよりも。是よりも  
 いつも常葉の三鉢の松かけに立よる松け。風狂じた  
 る物狂。あらし思れや。高野の内にては  
 謠ひ狂はぬ。御制戒を思れて狂ひたりゆるさ  
 せ給へ。淨聖ゆるさせ給へ。淨ひしり

藤

紫藤露の底に残る花の色。翠竹苑のうちに暮。鳥  
 のこる實面白や水のおもに。霞りる月の春もはや。  
 ねなる匂ふ花。かつらか。る致景はまた世にも。奈  
 呉の浦半もはとちかき。眺めにつく。景色かな。  
 沖津かせ吹く磯の松枝に。餘りてか。る田枯の  
 うら。藤浪のよるひるわけて。徒に。送り向へて年月  
 の。松の花ら。ふる雪深みどり。夏は桶に。袖  
 ふれし匂ひまで。聞はひかしを忍ぶ。一葉散ては秋  
 なりとゆふの月を湖の。浦吹風に。さよ更て。曉  
 と。白波立て鳴千鳥。友よふこも霜雪に。冬のけし  
 きはしらるらむ。加様に。移れば世中の。理りあか

らこに藤は咲て程なく散花を惜む人しも波の  
 うへぞ唯 朝かすみたをひく。色のみ春のかたみうと  
 しられしらすて有明の月ひるかへす舞のうて  
 紫匂ふたもどかな。藤の山にさく藤の花  
 のかつらや。棹姫の打上袖の緑の松にかいれる  
 松にかいれる。かゝれる松にうすはまの  
 へや唄へ折柳落るむめ或は花の。鶯の囀りの。聲  
 の匂ひも深みど。あをればま風田枯のうらな  
 み。打ちらし吹はらひ花も飛行切蝶の夢の。松のみ  
 しか夜明る横雲に光りかけさす朝日山の。ひより  
 影さす朝日山の梢に青葉や。残るらむ

羽衣

然るに月宮殿の有様。さよふのしゆりとこしな  
 へにして。白衣黒衣の天人の。敷を三五に分つて。一  
 月夜々のあま乙女。はうしを定め役をさす。我も  
 敷ある天をさ女。月のかつらの身をわけて假にあつま  
 の駿河舞。世に傳へたる。曲をかや。春かすみ  
 棚曳にけり久方の。月の桂の花やさく。實花かつら色

めくは春のしるしかや。面白や天あらて。爰も妙なり  
 天津風。雲のかよひちふさどちよ。乙女のすかた。  
 しはしとまりて。この松原の松の色を三保か崎  
 月。清見瀉ふしの雪いつれや春のわけはの。類ひ  
 波も松風も長閑なる浦の有様。其うへあめつちは  
 何をへたてん玉垣の。内外の神の滂末にて。月もくも  
 らぬ日の本や。君か代はあまの羽衣まねにきて。あ  
 つ共盡ぬいはほると。聞も妙あり東歌聲添て。數  
 々の簫。笛。琴。箏。篳篥。雲の外にみちく。落日  
 のくれなるは蘇命路の山をうつして緑りは波に浮  
 島かはらふ嵐に花降て。實雪をめぐらす白雲の  
 袖に妙ある。南無歸命月天子。本地大勢至あつま  
 遊ひの舞の曲。あるひは。天津みうらの見とり  
 の衣。又は春立霞のころも。色香も妙ありをど女の  
 裳裾。さゆふさ。さゆふ。蝶々の。花をかさしの。天  
 の羽袖をひくも返すも。舞のうて打上。東遊をの敷  
 々に。其名も月の。いろ人は三五夜中の。空に  
 又満願真如の影となり。侈願圓満國土成就。七  
 寶充滿のたからをふらし。國土に是を施し給ふさる

ほとけ。時移つて。天の羽ころも。うちかぜに棚ひきたち引。三保の松原うき島か雲の足高山やふしの高ぬ。かすかになりてあまつみうらの。霞あまされて。失にけり。

胡蝶

「されは春夏秋をへて。草木の花にたはふる。胡蝶と生れて花にのみ。契りを結ぶ身にしあれども。梅花に縁なき身を歎き。姿をかへて侍僧に言葉をかはし奉り。妙ある法のはちす葉の。はなのうてなるを頼むなり。唐土に。莊子かあたに見しゆめの。小蝶のすかたうつなき浮世の中う衰れなる。定めなきよといひあから。ほかさ位もかけ高さ。光源氏のいにしへも。小蝶の舞人色々の。見ふぬにかさる。金銀の。瓶にさす山吹の。襲のさぬをかけ給ふ。花園の。胡蝶をさへやした草に。秋まつむしは。よく見るらんとあかめこし。むかし語りを夕暮の月もさしいる宮のうら。めまきなる木の木にやどらせ給へわか姿。夢にかあらずみゆへしど。夕部の空に消て夢のことく。成にけり夢のことく。成にけり。

「あたし夜の夢。まの春のうた。ぬに。頼むかひかちちきりうと思ひなからも法のこゑ。たつるや花の下臥に。ころもかたしく木陰かなく。

「有難や此妙典の功力にひかれ。有情非情も隔てなく。佛果に至る花の色。深き恨みをはらしつ。梅花に戯れ白ひにまはる。胡蝶のせいこん顯れたり。打上有明の月も照るふ花の上に。さもうつくしき胡蝶の姿の。あらはれ給ふは有つる人か。一人とはいかて夕暮に。かはす言葉の花のいろ。一隔ぬ梅に飛かけりて。胡蝶にも。さうはれなまし心ありて。八重山吹もへたてぬ梅の。花に飛かふ小蝶の舞のたもとも句ふ。けしきか。打上四季折々の花さかり。梢に心をかけまくも。かしこき宮の。所からしめのうち野もほど近く。野花くわう鳥春風をりようし。花前に蝶まふ紛々たる雪を廻らす舞の袖返す。も。面白や。春夏秋の花もつきて。霜を

あひたる白菊の花折殘す。枝を廻り。めぐりめぐるや。小くるまの。法にひかれて。佛果に至る胡蝶も歌舞の菩薩の舞の。姿を殘すや春の夜の。明行雲に。



はね打かはし。わけゆく雲に羽ねうちかはして。霞に紛れて。失にけり。

六浦

先青陽の春のはしめ。色香妙成梅かたの。かつ咲りめてもろ人のこころや春に成ぬらん。又は櫻の花さかり。唯雲をのみみよし野の。千本の花に。しくはなし。月日経てうつればかはるなかもかき。櫻は散し庭の面に。咲つゝ卵の花の垣ねや雪にまかふらん。時うつり夏くれ秋もあかはに成ぬれば空さためなきむら時雨。きのふは薄きもみちはの露しくれるる山は。下葉残らぬ色とかや。去に下も。あつまの奥の山をどに。あからさまなる都人のあはれもふかき言のはれつゆの情に引きつゝ姿をま見と數々に。言葉をかはず値遇の縁。深き法を授けつゝ。佛果をなしめ玉へや。更行月の夜遊を。上地。さるなき袖をや。か。上。秋の夜の千代をひとよに。かさねても。言葉残りて鳥や鳴まし。下地。八聲の鳥もかすく。下地。八聲の鳥も數々に。鐘も聞ゆる。上。明方の空の。所は六浦のうら

風山かせ。吹しほり。散もみちはの。月に照るひてからくれ。なるの庭の面。明きは恥かし。暇申て。歸る山路に行かと思へは木のまの月の行かと思へはここのまの月のかけろふ姿と。成にけり。

陀羅尼落葉

其比柏木の衛門督とすし人。折しも春の暮つかた風吹すかしこき日影を興しつゝ。故有木立の花盛わつかあるもよよの陰に乱れつゝ。いとみ争ふ鞠の數。暮行庭におもはすも手飼の猫のまつはれし。小藤の外漏し面。かけの。身にろふ纏と成たるなり。懸の奴と成はつる思ひや宣んとはかりに。ゆかりの露を結ひしも。ちきりの中は身にうまて本よりしみにし方。ころ猶茂を行草の名の。慰めかたき袂捨てて。諸かつら落葉を何に拾ひけん。名は。睡しきかさしなれども。かくいひし言の葉の我名にあふる悲しき。其後をりを得て。思ひの未はなよ竹の。ひと夜結ひし手枕をかはず程なき衣くの袖に餘れる白露の。起。て。行空もしられぬ明暮に。うつくの露のかゝる袖の思ひの色を流石とや人の哀れの露の

けて、<sup>上</sup>「明暗の空にうき身は消さむ。夢成けりど  
 見ても責て<sup>下</sup>「なくさむへくと云聲を。聞せて出し魂  
 は我を離てさなからに<sup>人</sup>に<sup>ど</sup>まれる心地し  
 て。うつしこころも涙のみ。其身を責て絶し<sup>人</sup>に<sup>よ</sup>  
 我身はかなき契りこころ消しに増るつらさなれ<sup>む</sup>か  
 し語の言の葉の。おく床敷を同じく<sup>心</sup>に<sup>残</sup>し給ふ  
 なよ<sup>上</sup>「世語りを語ればいと古しへに又立歸る袖  
 の浪の<sup>哀</sup>は<sup>か</sup>き<sup>身</sup>の<sup>果</sup>し<sup>能</sup>々<sup>と</sup>ひて<sup>た</sup>ひ<sup>給</sup>  
 思ひよらずや御跡を。とふへき<sup>身</sup>誰ならむ此上は我  
 名をいはんゆふ霧の。迷ひをばらしおはしませと  
 同<sup>我</sup>も<sup>音</sup>を<sup>あ</sup>く<sup>雲</sup>るの<sup>の</sup>。かね寒み吹風の誘ふ  
 とはかり失にけり<sup>只</sup>今見し夢人は唯人な  
 らす思ひしに。扱は古しへの夕霧に迷ひの心を残し。我  
 に<sup>こ</sup>は<sup>を</sup>か<sup>は</sup>し<sup>け</sup>る<sup>や</sup>。い<sup>さ</sup>や<sup>夢</sup>跡<sup>と</sup>ふ<sup>ら</sup>は<sup>ん</sup>と  
<sup>上</sup>歌<sup>説</sup>や<sup>法</sup>の<sup>花</sup>の<sup>ひ</sup>も。く<sup>永</sup>き<sup>聞</sup>路<sup>も</sup>終<sup>に</sup>今<sup>は</sup>。若  
 生人天中受勝妙樂。若在佛前蓮華化生。『あら有難  
 の。傍經やな。く。有し世を思ひも出し今ははや。  
 妙ある<sup>法</sup>の<sup>値</sup>遇<sup>の</sup>縁<sup>に</sup>。玉聲の聲を管絃を奏する事  
 を思ひ。納衣の僧は倚羅の人に越たり。彌佛果を授

給へ<sup>ワ</sup>キ<sup>上</sup>かん<sup>「</sup>ふ<sup>し</sup>き<sup>や</sup>あ<sup>千</sup>種<sup>の</sup>露<sup>の</sup>色<sup>々</sup>に。錦をつら  
 ぬる花の袖くち。うこはかどなき面影は有し一夜のあ  
 るしやらん<sup>上</sup>「夢吊らひの有かたさに恥かしなから  
 古しへの草の陰をる魄靈れ是迄顯はれ参りたり<sup>思</sup>  
 ひ出たりこの所にて。何某れ律師貴き<sup>上</sup>聲<sup>を</sup>上<sup>て</sup>  
 陀羅尼誦たりし事。今のやうにおもひ出らる<sup>ら</sup>や  
 あたんだい<sup>上</sup>「たんだはち<sup>上</sup>「たんだ。はてい<sup>上</sup>「と  
 く聞是陀羅尼者當智普賢。神通之力。若但書寫。  
 是人命終當生切利天。是時八万四千の天女妓樂の聲  
 々。有<sup>か</sup>た<sup>や</sup>打<sup>上</sup>「風<sup>に</sup>した<sup>か</sup>ふ<sup>木</sup>々<sup>の</sup>落<sup>葉</sup>。く<sup>は</sup>  
 笙<sup>瑟</sup>を<sup>ふ</sup>た<sup>み</sup>。『石に嘯く。』飛泉の聲は。『雅瑟  
 を<sup>斷</sup>ふ。』伎樂の遊ひ。『の<sup>こ</sup>の<sup>夢</sup>聲。あ<sup>ひ</sup>に  
 合たり虫のね鹿の音。瀧津響きもひとつに乱る。小  
 野の千種の露に立添ふ野分の風に錦をかざりし梢の  
 もみち。にしきをかさりし梢の紅葉は。木陰の落葉  
 ぞ。朽にけり。

西行櫻

「九重に咲とも花の八重さくら。同、いく世の春をかさ  
 ぬらん<sup>下</sup>「然るに花の名高きは。先初花をいろく

ある。近衛殿の糸さくら見渡せば柳さくらをこ  
 きませて。都は春の錦。さむらんだり。千本のさくら  
 をうろをき其色を。所の名に見する。千本の花さか  
 り雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花さかり四王天  
 の榮花もこれにはいかたまざるへき上なる黒谷  
 下かはら。昔遍昭僧正の。愛世をいとひし花頂  
 山。わしのみやまのはなの色かかれにしつるのはや  
 しまておもひしられて哀なり。清水寺の地主の花松  
 ふく風の音羽山。爰は又あらし山。戸難瀬に落る  
 瀧津浪までも。花は大井河のせきに雪やかゝる  
 らん。すはや敷うふ時のつゝ見。後夜の鐘の音。  
 ひききうらふ。荒名残をしの夜遊やな。おしむへ  
 しく。得かたきは時會かたきは友なるへし。春露一  
 刻價千金。花に清香月に影。春の夜の。花のかけ  
 より。明う発て打上灰二付一鐘をもまたぬ別れころあ  
 れ。わかれころわれ。上。まてしはしく  
 夜はまた深さう。しらむは。花のかけなりけり。よ  
 うはまたをくらの山陰に残る夜さくらの。花の  
 まくらの。夢さめめにけり。ゆめはさめにけりあ

らしも雪も散まぐや花を踏ては同じく惜む少年の  
 春の夜之明にけりや翁さなし跡もなし

小 塩

「思ふ事ははて唯にややみぬへき。我にひとしき人  
 しなければ。とは思へ共人しれぬころのいろはおの  
 つから思ひうちより言の葉の露しなくにもれける  
 ろや。春日野の若紫の摺衣。まのふの乱れか  
 きりしらすもと詠せしに。陸奥の忍ふもち摺たれ故  
 乱れんと思ふ。我ならなくに。よみしも紫の色  
 にろみ香にめてしな。又ばのら衣。さつし馴にし  
 つましわれは。はるくさぬる旅をしうおもふ心の奥  
 迄は。いさ白雲のくたり月の。都なれや東山。是  
 も又あつまのはてしあの人の心や。むざし野は。  
 けふはな焼る若草の。妻もこもれり我もまたこも  
 るころは。大原や。小鹽につづく。通ひちの。行備  
 は同じ戀草の思れぬや。いまも名は昔をどころと  
 ひどもいふ。むかしかな。むかしかな。花も所  
 も。月も春。有しゆゆきを。花も思れし。花  
 も思れぬ。ころやをしほの。山風吹みたさち

らせやちらせ。散ちよふ木のもとなから。まをらめ  
は。さくらに結むすべる夢かうほ。か世人定めよ。く。  
寝てか覺てか春の夜の月。わけほの。花にや。殘る  
らむ。

遊行柳

則すなはち彼岸にいたらむ事。一葉の船ちのからさらす  
や。彼皇帝の貨狄かこころ。さくや秋ふく風の音に散  
くる柳の一葉れ上うへに。蜘蛛の乗て篠蟹の。糸引はた  
る姿よ。工み出せる舟の道是も柳の驗ならずや。  
「其外玄宗華清宮にも。宮前の揚柳寺前の花とて。詠め  
絶せぬ。名木た。かみ洛陽や。清水寺のいに  
しへ。五色に見たし瀧浪を。尋ねとりし水上に。金色  
の光りさす。朽木の柳たちまちに。楊柳。観音と顯  
はれ今に。絶せぬ跡とめて。利生あらたなる歩みを  
運ふ靈地也されば都の花さかり。大宮人の御遊にも。  
蹴鞠の庭の面。四本の木陰へた垂て。暮に數ある香の  
音。柳。櫻をこき交て。錦をかざる諸人の。  
花やかあるや。こすの渾波くる風の匂ひより。手飼  
の虎の引綱もながき思ひに。ならの葉の。其。柏木

の及びなき。戀路もよしおしや。是は老たる柳色  
の。狩衣も風折も。風に漂ふあしもの。よわ  
きもよしや老木の柳。氣力をふして。弱々を立まふ  
も夢人を。現と見るや。はかき。をしへ。嬉しき法  
の道。迷はぬ月に。つれてゆかむ。青柳に。うぐ  
ひそつたふ。羽風の舞。柳花苑を。をもほへにけ  
る。柳の曲も歌舞の菩薩の。舞の袂返すくも。  
上人の御法を受よ。と。報謝の舞も。是迄なりと  
名殘のなみだの。玉にもぬける。春の柳の。いとま  
申さんど。ふつけの鳥もなき。別れの曲には。柳  
條をわかぬ。手折は青やぎの。姿もたをやかに  
上地。結ふは老木の。枝もすくなく。としはかり  
の風やいとはむとたいよふあしもともよろ。よは  
く。たをれふし柳かりねの床の。草の枕の一夜の  
契りも他生のねむある上人の御法。西吹秋の風打  
はらひ。露も木の葉も散々に。露もこの葉とちり  
く。になりはて。殘る朽木とかりにけり

雲林院

先はこうきてむのはう殿に。人目を深く忍ひ。

心のした簾のつとつれど人はたいたすめば。我も花に  
 こいろを染て。共にあこがれたち出る。二月や。ま  
 たよひなれ月は入。我らは出る戀路かな抑日の  
 本のうち名所と云ふ事は我大内地にありかの  
 昭かつらねしはなの散積るあきた川を打はた  
 り。思ひしらすも迷ひゆくかつける衣はもみぢかさね  
 緋の袴ふみしたき。誘ひ出るやまめ男。むらさきの一  
 もと結のふちばかま。しをるすすろをかひとて  
 「信濃路やの原しげる木賊色の。狩衣のたもとを冠  
 の巾子にうちかつぎしひ出るや二月の。たろが  
 れ月もはや入て。臘夜に降は春雨か  
 をつるは涙かど。袖打はらひするをとりしをく  
 した。とたどりくもまよひゆく。をもひ出た  
 り夜遊の曲。返す眞袖を。月やしる。打上夜遊の  
 舞樂も時移れば。名残の月も山あいの葉袖返  
 すや夢れ告のまくら。この物がたり語るとも盡  
 松の葉の散うせず。末の夜までも情しる。こと  
 の葉草のかりうめは。かくあらはさる古しへの。伊  
 勢物語かたる夜もすから覺る夢と成あけりやさむる

夢となりけり

杜若

「むかし男ら冠して奈良の京。春日の里にしろよ  
 して狩にいけり。仁明天皇の御宇かどよ。いとも  
 かしてき勅をうけて。大内山のはる霞。立や彌生のは  
 しめつかた。春日の祭の勅使としてすきひたひの冠り  
 をゆるさる。君の恵みの深きゆへ。殿上にての元  
 服の事。當時其例まれなる故に。初冠りとは申どか  
 や。然をも世中の。一度は榮へたひは  
 衰ふる理りのまをりける身の行衛すみ所もとむと  
 て。東の方に行雲の。伊勢や尾張の海つらに立浪を  
 見て。敷過にし方の戀しきに。浦山しくも。  
 帰る浪かなと打詠め行は信濃なる。淺間の嶽  
 なれや。晦る煙の夕けしき。扱社しなのなる。淺間  
 のたけに立けふり。遠近人の。みやはどかめぬと口  
 すさひ猶はる。旅ころも。三河の國に着しかは。  
 爰。名にある八橋の。澤邊にははふかきつはた。  
 花。紫のゆかりならは。つましあるやと思ひ  
 る出る都人。然るに此物語り。其しなをほき事をから

取分此八橋や。みかはの水の底意なく契りし人々の  
 数々に名をかへ品をかへて人待女ものやみ玉簾  
 の光りも乱れて飛はたるの雲の上まてい  
 ぬへくは。秋風吹とかりに顯れ衆生濟度の我ろ  
 どは知やいぢやよの人の暗きにゆかぬあり明の  
 同光り普き月やわらぬ春や昔の春ならぬわか身ひ  
 どつは。まもとの身にして本覺眞如の身をわけ  
 陰陽の神といはれし。唯業平の事うかし。か様に  
 申物語り疑はせ給ふを旅人はるくきぬるか  
 ら衣。きついや舞をかあつらん。花前に蝶まふふ  
 んくたる雪。柳上に鶯とふ。片々たる金  
 うへあきし。むかしの宿の。かきつはた打上灰色は  
 かりころむかし也けれ。色斗ころ。昔男の  
 名をとめし。花たちはなの。匂ひうつる菖蒲のか  
 つらの。色はいつれにたりや似たり杜若はな  
 わや先梢に鳴は。蟬の唐ころもの打上袖白妙の如  
 花の雪の。夜もしらしらとあくるしのいめのあさ  
 むら咲のかきほはたの花もさどりのころひら  
 けて。すはや今ころ草木國土すはや今ころ草木國

土悉皆成佛の御法をなて社。失にけれ

誓願寺

「神といひ佛といひ。唯是水波の隔あり。然れば  
 和光の影廣く。一身分身顯はれて衆生濟度の御本尊た  
 り。されは毎日一度は。西方淨土に通ひたまを  
 て。來迎引接の。誓ひを顯はしおはします。笙歌  
 片地。遙に聞ゆ。孤雲の上されや。聖衆來迎す。落日の  
 まへどかや。昔在靈山の。御名は法華一佛。今西方の  
 彌陀如來。慈眼視衆生顯はれて娑婆しけむ觀世音  
 三。世利益同一休有難や。我らかための悲願なり。  
 若我成佛の。光りをうくるよの人の。わか力には  
 行かたき御法の。御舟のみされ描さくてもはたる  
 彼岸に。たりく。て樂みを極る國の道されや  
 十惡八邪のまよひの雲も空晴。眞如の月の西方も。  
 爰を去事遠からず。唯心の淨土とは此誓願寺を  
 拜むま。歌舞の菩薩のままの佛事を  
 せる。心か。獨なを。ほそけの御名を。尋見  
 打上をの。歸る法の塲人。法の塲人の  
 實も妙成稱名の數々。一虚空に響くは。音樂のこ

系「地異香薫して。花ふる雪の上同袖をかへすや返すくも。貴き上人の利益哉とほさつ聖衆は面々に。御堂にうてる。六字の額を。皆一同に。禮したまふは。あらた成ける。奇瑞かな

葛城

上ツテ折から雪もふる物をしもとゆふ葛城山に降雪は。問なく時をくもほゆるるれとよむうたの言の葉うへて大和舞の袖のゆきもふる世の余處にのみみし白雲や高間山のみねの柴屋の夕煙まつか枝うへて焚ふよくかつらきや木の間に光る稻妻は。山伏のうつろ火かど社みれや實やよの中は。電光朝霜いしの火の光りの間うと思へた。我身の歎をも取添て思ひましはを焚ふよ。捨人の。昔の衣のふる深く。法に心は墨染の袖もさなからし妙の雪にやいろを蘇民かくたの。徳。懸も牙まざるしもとを集柴を焚。寒風を防くかつらきの。山ふしの名にし負。かた敷袖の枕して。身を休め給へや。岩橋の昔の衣の袖うへて。法のむしろのことばに法味をなして終夜。彼葛城の神

心よるの行ひ澄澄て。一心敬禮。我葛城のよもすから。和光の影に顯はれて。五表の眠を無上正覺の月にままし。法性真如の寶の山に。法味にひかれて來りたり。よく勤。をはしませ。ふしきやを俄くたる山の常陰より。女体の神と覺し。玉の并玉かつらの。なをかけ添て葛かつらの。這まどはる小忌衣。是見給へや明王の。さほくはかゝる身を戒めて。猶三熱の神ころ。年ふる雪や

標ゆふ。葛城山の岩橋の夜なれと月雪の。さもいしるき神体の見苦し顔はせの神すかたは耻かしや。芳野の山葛。かけて通へや岩はしの。高間のはらは是をれや神樂歌はしめて大和舞いさやかなてん。降雪の標ゆふ花の。しらにさて。高天の原の岩戸の舞。天のかくやも向ひにみへたり。月白く雪白く。何をも白妙の氣色なれとも。名にふ葛城の。神の顔かたちおもなや。面はゆや。耻かしや淺間しや。淺間にも成ぬへし。明ぬ先にと葛城の。明ぬ先にとかつらきの夜の。磐戸にう入たまふ磐戸のうちにう入給ふ

雨月

軒端の松に吹来るるや上同雨にてはなかりけり。小  
 夜の嵐の吹落て。中へ空は住よしの。所からなる月  
 をも見ゆ。雨おもまけとふく。園の軒端の松の風ハチ  
 はすみよしの。岸うつ浪も程ちかし。假寝の夢  
 もいかならん。よしとても旅まくらさらても夢はよ  
 もあらし。いさゝか礎うたふよ。礎うたふよ  
 うき世のわけを賤の女は。風寒しとて衣うつ身ハチの爲  
 はさもあらて。秋の恨みのさよ衣月見かてらにうた  
 ふよ。上同「時雨せぬ夜も時雨する。木の葉の雨の音信  
 に老のなみたもいと深き心をろめて色々。のち木  
 の葉ころもの袖のうへ。露おもやとす月影に重ね  
 て落る紅葉はの。色にもまじる塵ひちの積る木の  
 葉をかき集め雨の名残と思はん。」ハチ「はや夜も更たり旅  
 人も御休み候へ。」下同「爰は元來所からどしも津守の小尉  
 なれば我も。」下同「老衰の眠深き故に夢にかへる古へ  
 をか松かね枕して友にいさやまどろまむ。」上同「荒おも  
 しろの詠吟やあ。陰陽二つの道をまもる。うの空をば  
 かけて五体とす。木火土金水なり。上下は則天地人

の三才は是。詠吟あるし。我をは誰どか思ふ。かた  
 しけなくも西の海。あをきか原の波間より。あらはれ  
 出し。住よまの。「神託まに。うたかはけれ。う  
 もく。此神の因位を尋ね奉るに。むかしは都率の内  
 院にして。降喜徳王菩薩と號し。いまはまた玉垣の。  
 うちの國に跡をたれ。和歌を守りて住のゆや。松林  
 のもとにすむて。久しく風像を送る。爰に和歌の人ま  
 れある所に。西行法師あゆみをはこひ給ひ。心を述る  
 和歌の友とて。神明納受垂給ふ。是によつて神慮の程  
 をしらしめん。と。宣ねか頭にのりうつる。謹上。  
上同再拜。打上。有難の影向や。返すこころも住よし  
 の。岸うつ浪も松風もさしうつ浪も松風も。颯々の  
 鈴の聲。ていとうの鼓のをと。和歌の詠吟まひの袂  
 もれなしく。心言葉に顯はる。其風ひとしかり  
 けり。是迄なりや今は。やうたかはて神託を仰ぐ。  
 しどゆふしての神は。あからせ給ひければ。もとの  
 片地。「宮人となりて本宅にかへりけりやもとのうたに  
 歸りけり。」

三輪



中にもこの敷島は。人敬つて神力ます。五濁の塵にまじはり。しはしこころは足曳の大和國に年久敷夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿かはらぬ色をたのみけるに。ヤサされども此人よるはくれ告ひるみ。す。有夜のむつとに御身いかなる故により。かく年月を送る身の。ひるをは何とうはたまのよるをあらてかよひ。給はぬはいと不審おほき事なり。唯同じくはとこしなへに契りをこむへしと有しかは。彼人答へ云やう。實も姿ははかしのもりて余處にやしられなむ今より後はかよふまし。契りもこよひはかりなりと。念頃に語れば。さすかわかきの悲しさに。かへる所をしらんをて。をた巻に針をつけ。裔にこれをどち付て跡をひかへてしたひゆく。また青柳のいとなか。結ふやはや玉のおのか力にさ。蟹の。と繰返し行程に此。日本の神かきや。杉の下。枝に留りたり。こはうもあましや契りし人の姿か。其糸の三わけ残りしより。三輪のしるしのすきし世を語るにつけてはつかしや。上。實有難き御相好。聞につけても法の道おほしも頼む心かな。上。迎も神代

の物語り。委しくいさや顯し彼上人を慰光ん。上。先は岩戸の其はしめ。あくれし神を出さんどて。八百万の神遊ひ。是。神樂のはしめなる。上。千早ふる。天の岩戸を。引立て。一神は跡なく入給へは。常關の世ど。はやありぬ。八百万の神達岩戸の前にて是をなけき。神樂をうらしてまひ給へは。上。天照太神其時に岩戸を。少しひらき給へは。又。と。閨の雲晴て。日月ひかりか。やけは。人のれもてしろ。と見ゆる。上。面。白やと神の御聲の。たへなるはしめのもの。かたり。打上思へは伊勢と三輪の神。一。身。分身の御事い。ま更何と岩くらや。其。關の戸の夜も明か。く。ありがたき夢のつけ。さむるや名殘。成らん

龍田

然れば當國寶山に至る。天地治まる御代のためし民安全に豊かあるもひとへに當社の御故なり。一。梢の秋の四方の色千秋の見かけ。もくせんたり。年とにもみち葉流る龍田河。みちとや秋のとまりなる。秋山も動せず海邊も浪靜にて。たのしみのみ秋

の色<sup>つ</sup>名<sup>な</sup>こ<sup>こ</sup>龍田の山かせも静まりけり然れば代々の歌人もこころをうめて紅葉はの立田の山に朝かすみ。春はもみちにあらねども。たゞ紅色にめて給へはまけなより龍田のさくら色なき。夕日や花の<sup>さ</sup>時雨なるらんと<sup>か</sup>讀しもくれないに心を染し詠歌なり<sup>下シテ</sup>神<sup>カミ</sup>あひの。三室のさしやくつるらん。龍田の川の<sup>さ</sup>水は濁るとも和光の影や明らけき真如の月はなをてるや<sup>上</sup>龍田川紅葉乱れしあどなれや<sup>古</sup>しへはにしきのみ今はこほりのま<sup>た</sup>紅葉。荒うつくしや色々の。もみち襲の薄氷。はたらは紅葉も氷も<sup>重</sup>ねて中たゆへしやいかて今は渡らん<sup>下シテ</sup>去ほどに夜神樂の<sup>か</sup>く<sup>か</sup>時うつり事去て。きねか鼓も<sup>敷</sup>至りて月も霜も白和幣<sup>を</sup>振上て聲すむや<sup>上シテ</sup>謹上<sup>地</sup>一再拜<sup>カミ</sup>久かたの。月も落くる。たきまつ<sup>下</sup>波の立田の<sup>地</sup>神の御前に。散はもみち葉<sup>シテ</sup>すなはち神のぬ<sup>地</sup>龍田の山風の時雨ふるおどは<sup>下シテ</sup>「さつ」の鈴のこゑ<sup>地</sup>「たつや河なみは<sup>上</sup>ふれうしらゆふ。神風松かせ吹みたれくもみち葉散どふたつと<sup>さ</sup>りの<sup>か</sup>見らさもぬさる。ひるかへる小

思ころも。謹上再拜さいはい再はいと。山河草木國土おさまりて。神はあからせたまひけり。

巻 結

「されは樂しむ世にあふ事。これまたうらちの義によきり。言葉すくなうして理りを含み。さんちみ見いたててしやくねんかんちやうの床の上には。ねふ<sup>り</sup>逢に眼をさる。是によつて本有の靈光。忽ちに照し自性の月。漸くもあまされり。一首を詠すればよろづの悪念を遠ざかり天をうれば清く。地をうれば安しあらかしめゆふらふしつさうゆら一金剛とはどかすや。されは天竺の波羅門僧正は。行基菩薩の御手を取<sup>て</sup>靈山れ。釋加のみもとに契りて真如くちさすわひみつと詠歌あれば御返歌に<sup>か</sup>か<sup>ら</sup>むらむに契りし事のかひ有て。文珠の御顔を。れりむ也とたかひに<sup>か</sup>ほ<sup>と</sup>け<sup>く</sup>をあらはすも和歌の徳にあらずや。又神は出雲八重垣かたらの寒きよのためしいはすとも傳へ開つへし<sup>か</sup>神のしめ<sup>ら</sup>糸柳の風の<sup>と</sup>け<sup>ら</sup>思はする謹上再拜<sup>す</sup>抑當山は。ほつしやうこのたつみ

金剛山のれいくわう。此地ふとんで鑑地となり。今の  
 大峯是なり。されは御嶽は金剛界のまんだら一けさう  
 世界。熊野は胎藏界。「見つこん淨土」ありかたや  
 打上ふしきや祝詞のみ物狂ひ。のさむわらた  
 なる。飛行祝出して。神語する社。恐ろしけれ  
 打上澄誠殿は阿みた如来。「十悪をみちひき」  
 をわはれむ。「中このせむは」。「薬師如来」  
 とまつて。「二世をたすく」。「一萬文珠」。「三世  
 の覺母たり」。「十萬普賢」。「まんざん護法」。「數々の  
 神々彼かんさきにつくも髪。御幣もみたれて空  
 にとふ鳥の。かけりくつて地にまた躍り。珠數をもみ  
 袖をふり。ころくけうくの舞の手をつくま。是迄され  
 や。神はあからせ給ふといひ捨る。聲のうちより  
 狂ひさめて又本性にうなりにける。

梅枝

下シテ「去をから妙成法の受持にわは」。變成男子のすか  
 たとは。おとや御覽し給はぬろしからは御吊ひのちの  
 ちにて。下同クセ。「うかりし身のむかしを懺悔も語り申さ  
 る。さるにても我なから。よしなら。戀路に犯され

ておなかく悪趣に墮しけるよ。されはにや女こい  
 ろのみたれかみ。ゆひかひちくも戀ころもの。夫の  
 知管をいたしき此狩衣を着しつ。常には打し此大鼓  
 の知ねもせず起もせず涙。敷妙のまくらよみに  
 ち。殘る執心をはらしつ。佛所に至るへし嬉まの  
 今のをしへや。「思ひ出たる一念の發るは」やま  
 ふと成つつかさるは是藥なりと故人の教へされ  
 は。思はしく戀わすれ草も住よしの。岸に生てふ  
 花あらは。手折やせまし我心の。契りあささぬの  
 片思ひ執心をたすけ給へや。上ロキ地。「實面白や同じくは  
 懺悔の舞をかなて。愛着の心をすてたまへ」。「いさ  
 くけうは妄執の雲霧をはらふ夜の。月もなかはな  
 り夜半樂をかきてん」。「こころも花に住よしの。松の障  
 より詠れば」。「涙もて結る淡路かた」。「沖も静に青海の  
 下シテ。「青海波の浪かへり」。「かへすや袖の折をえて」  
 軒端の梅に驚の。さなくやはさの越殿樂。「唄へやう  
 たへ」。「梅か枝。梅かわたにこころ。驚はそをくへ。風ふ  
 かはいかにせんばなにとるうくひす打上」。「おもしろ  
 や。驚の」。「片地」。「聲に誘引せらきて花のかけにきた

りたり上地キリ我も御法にひき誘はれて引。今目前に。たちまふ舞の袖是ころ女のをつとを戀る。想夫戀の樂の鼓うついな下の我。ありさまやな打上上思へは古しへを下同。語るは猶も執心ろと申せは月も入音樂のれとは松風下にたへて。有し姿はわけくれにをもかけはかりや殘るらん下。

富士太鼓

上上かねてよりかくあるへさとおもひなは同。しうこうか手を出しやはむらうか涙にてもとむへき物を今更上に。神あらぬ身を恨みかこちを歎くう哀なるなけくろ哀成ける。上上荒うれしやわれに夫の敵の立たるは如何に。子方かん「あれは太鼓にてころ候へ。何と御覽してかたきとは仰候う。思ひの餘りに御心乱れ。すちなき事を仰候うや。荒淺ましや候。上上うたての人のいひ事や。あかて別れし我夫に。離るゝ事も何故る太鼓の役を争ふゆへあり。上上唯うらめしきは太鼓あり。夫のかたきよいさうたふ。子方「實をばりなり父こせに。別れし事も太鼓ゆへ。さあらは親の敵うかし。討て恨をばらすへし。上上童か爲には夫の敵いさやねら

はむ諸共に。子方「男の姿狩衣に。上上物具なれや鳥。甲上恨みのかたきをうちおさめ。上上鼓を苔に埋まんと。上上するや時の聲立て。秋の風より冷ましや。上上うてや。上上と責鼓。上上荒切こりの。なくねやを打上上猶も思へははらたちや。上上けしたる姿に引かへて。上上る言葉も及はれぬ。ふしか幽霊來ると見えて。上上しなの恨みや。もどかしと太鼓うちたるや。上上打上上持たるをちをば鼓と定め。上上。嗔恙の煙は太鼓の烽火の天に上上れは雲の上人上まことのふしおろしにたはすもまれて裾野のさくさ。四方へはつとちるかを見みて。花ころもさす手もひく手も伶人のまひなれば。太鼓の役は本より開ゆる名上のしたむなまからす。類ひさやなつかしや。上上實や女人の悪心は煩惱の雲晴て五常樂を打給へ。上上修羅の太鼓はうちやみぬ。此君の御命。千秋樂とらとよ。上上さて又千世やよろつ代と。民も榮へて安穩に。上上泰平樂を唄ふよ。上上日もすてにかたふさぬ。上上やまの端を詠めやりて招きかへす舞の手のうられしや今社は思ふ敵を討たれ。討れてねをや出す覽われにわはる。胸

のけふり<sup>下キリ</sup>富士<sup>上</sup>から<sup>上</sup>のらみ<sup>上</sup>をば<sup>上</sup>らせは<sup>上</sup>なみた<sup>上</sup>ころ<sup>上</sup>上  
 をかり<sup>上</sup>けれ<sup>上</sup>。是<sup>上</sup>迄<sup>上</sup>かり<sup>上</sup>や<sup>上</sup>人々<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>。暇<sup>上</sup>申<sup>上</sup>て<sup>上</sup>さら<sup>上</sup>は<sup>上</sup>と  
 伶<sup>上</sup>人の<sup>上</sup>姿<sup>上</sup>鳥<sup>上</sup>甲<sup>上</sup>。皆<sup>上</sup>脱<sup>上</sup>捨て<sup>上</sup>我<sup>上</sup>こ<sup>上</sup>ろ<sup>上</sup>。さ<sup>上</sup>みた<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>髪<sup>上</sup>乱<sup>上</sup>れ  
 等<sup>上</sup>。か<sup>上</sup>ゝる<sup>上</sup>思<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>忘<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>し<sup>上</sup>と<sup>上</sup>。又<sup>上</sup>立<sup>上</sup>か<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>太<sup>上</sup>鼓<sup>上</sup>こ<sup>上</sup>ろ<sup>上</sup>う<sup>上</sup>き  
 人<sup>上</sup>の<sup>上</sup>た<sup>上</sup>見<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>けれ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>見<sup>上</sup>置<sup>上</sup>て<sup>上</sup>る<sup>上</sup>歸<sup>上</sup>り<sup>上</sup>ける<sup>上</sup>跡<sup>上</sup>見<sup>上</sup>直<sup>上</sup>て<sup>上</sup>る<sup>上</sup>  
 か<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>り<sup>上</sup>ける

天鼓

「實<sup>上</sup>や<sup>上</sup>世<sup>上</sup>々<sup>上</sup>の<sup>上</sup>か<sup>上</sup>り<sup>上</sup>の<sup>上</sup>親<sup>上</sup>子<sup>上</sup>に<sup>上</sup>生<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>きて<sup>上</sup>。愛<sup>上</sup>別<sup>上</sup>離<sup>上</sup>苦<sup>上</sup>の  
 思<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>深<sup>上</sup>く<sup>上</sup>。恨<sup>上</sup>む<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>し<sup>上</sup>き<sup>上</sup>人<sup>上</sup>を<sup>上</sup>恨<sup>上</sup>み<sup>上</sup>。悲<sup>上</sup>し<sup>上</sup>む<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>し<sup>上</sup>き<sup>上</sup>身<sup>上</sup>を<sup>上</sup>歎<sup>上</sup>  
 きて<sup>上</sup>。我<sup>上</sup>と<sup>上</sup>心<sup>上</sup>の<sup>上</sup>闇<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>か<sup>上</sup>く<sup>上</sup>。輪<sup>上</sup>廻<sup>上</sup>の<sup>上</sup>波<sup>上</sup>に<sup>上</sup>た<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>事<sup>上</sup>生<sup>上</sup>  
 々<sup>上</sup>世<sup>上</sup>々<sup>上</sup>も<sup>上</sup>い<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>迄<sup>上</sup>の<sup>上</sup>。お<sup>上</sup>も<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>な<sup>上</sup>な<sup>上</sup>か<sup>上</sup>き<sup>上</sup>世<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
 苦<sup>上</sup>し<sup>上</sup>み<sup>上</sup>の<sup>上</sup>海<sup>上</sup>も<sup>上</sup>。沈<sup>上</sup>む<sup>上</sup>と<sup>上</sup>か<sup>上</sup>や<sup>上</sup>。地<sup>上</sup>を<sup>上</sup>走<sup>上</sup>る<sup>上</sup>獸<sup>上</sup>物<sup>上</sup>。空<sup>上</sup>を<sup>上</sup>  
 か<sup>上</sup>ける<sup>上</sup>翅<sup>上</sup>。送<sup>上</sup>親<sup>上</sup>子<sup>上</sup>の<sup>上</sup>哀<sup>上</sup>し<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>や<sup>上</sup>。ば<sup>上</sup>ん<sup>上</sup>や<sup>上</sup>佛<sup>上</sup>性<sup>上</sup>。同<sup>上</sup>  
 躰<sup>上</sup>の<sup>上</sup>人<sup>上</sup>間<sup>上</sup>。此<sup>上</sup>生<sup>上</sup>に<sup>上</sup>お<sup>上</sup>こ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>身<sup>上</sup>を<sup>上</sup>浮<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>す<sup>上</sup>は<sup>上</sup>。つ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>時<sup>上</sup>か<sup>上</sup>  
 生<sup>上</sup>死<sup>上</sup>の<sup>上</sup>海<sup>上</sup>を<sup>上</sup>渡<sup>上</sup>り<sup>上</sup>山<sup>上</sup>を<sup>上</sup>越<sup>上</sup>て<sup>上</sup>。彼<sup>上</sup>岸<sup>上</sup>に<sup>上</sup>至<sup>上</sup>る<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>。親<sup>上</sup>子<sup>上</sup>  
 は<sup>上</sup>。三<sup>上</sup>界<sup>上</sup>の<sup>上</sup>首<sup>上</sup>か<sup>上</sup>せ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>。さ<sup>上</sup>け<sup>上</sup>は<sup>上</sup>。誠<sup>上</sup>に<sup>上</sup>老<sup>上</sup>心<sup>上</sup>を<sup>上</sup>別<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>み  
 た<sup>上</sup>の<sup>上</sup>雨<sup>上</sup>の<sup>上</sup>袖<sup>上</sup>。し<sup>上</sup>ほ<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>増<sup>上</sup>る<sup>上</sup>草<sup>上</sup>こ<sup>上</sup>ろ<sup>上</sup>も<sup>上</sup>身<sup>上</sup>を<sup>上</sup>恨<sup>上</sup>み<sup>上</sup>て<sup>上</sup>も<sup>上</sup>其<sup>上</sup>  
 か<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>の<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>き<sup>上</sup>世<sup>上</sup>に<sup>上</sup>沈<sup>上</sup>む<sup>上</sup>罪<sup>上</sup>科<sup>上</sup>は<sup>上</sup>た<sup>上</sup>い<sup>上</sup>の<sup>上</sup>ち<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>や<sup>上</sup>  
 明<sup>上</sup>暮<sup>上</sup>の<sup>上</sup>時<sup>上</sup>の<sup>上</sup>鼓<sup>上</sup>の<sup>上</sup>う<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>も<sup>上</sup>思<sup>上</sup>は<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>。身<sup>上</sup>社<sup>上</sup>う<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>み

上<sup>上</sup>ロ<sup>上</sup>シ<sup>上</sup>キ<sup>上</sup>地<sup>上</sup> 鼓<sup>上</sup>の時<sup>上</sup>も<sup>上</sup>う<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>。さ<sup>上</sup>み<sup>上</sup>た<sup>上</sup>を<sup>上</sup>ど<sup>上</sup>めて<sup>上</sup>老<sup>上</sup>  
 人<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>急<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>鼓<sup>上</sup>う<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>。實<sup>上</sup>に<sup>上</sup>是<sup>上</sup>は<sup>上</sup>大<sup>上</sup>君<sup>上</sup>の<sup>上</sup>か<sup>上</sup>た<sup>上</sup>し<sup>上</sup>け  
 な<sup>上</sup>し<sup>上</sup>や<sup>上</sup>勅<sup>上</sup>命<sup>上</sup>の<sup>上</sup>。老<sup>上</sup>の時<sup>上</sup>も<sup>上</sup>う<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>なり<sup>上</sup>急<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>み<sup>上</sup>打<sup>上</sup>  
 ふ<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>。上<sup>上</sup>地<sup>上</sup> 「う<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>や<sup>上</sup>う<sup>上</sup>た<sup>上</sup>す<sup>上</sup>や<sup>上</sup>老<sup>上</sup>浪<sup>上</sup>の<sup>上</sup>。立<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>影<sup>上</sup>も<sup>上</sup>夕<sup>上</sup>月<sup>上</sup>の<sup>上</sup>  
 雲<sup>上</sup>龍<sup>上</sup>閣<sup>上</sup>の<sup>上</sup>光<sup>上</sup>り<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>す<sup>上</sup>。玉<sup>上</sup>の<sup>上</sup>階<sup>上</sup>。玉<sup>上</sup>の<sup>上</sup>床<sup>上</sup>に<sup>上</sup>老<sup>上</sup>の<sup>上</sup>步<sup>上</sup>  
 み<sup>上</sup>も<sup>上</sup>足<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>く<sup>上</sup>薄<sup>上</sup>氷<sup>上</sup>を<sup>上</sup>踏<sup>上</sup>と<sup>上</sup>く<sup>上</sup>にて<sup>上</sup>お<sup>上</sup>こ<sup>上</sup>ろ<sup>上</sup>も<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>や<sup>上</sup>う  
 さ<sup>上</sup>。此<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>み<sup>上</sup>つ<sup>上</sup>う<sup>上</sup>て<sup>上</sup>は<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>し<sup>上</sup>き<sup>上</sup>や<sup>上</sup>う<sup>上</sup>の<sup>上</sup>聲<sup>上</sup>の<sup>上</sup>。心<sup>上</sup>耳<sup>上</sup>を<sup>上</sup>  
 澄<sup>上</sup>す<sup>上</sup>て<sup>上</sup>出<sup>上</sup>て<sup>上</sup>。實<sup>上</sup>も<sup>上</sup>親<sup>上</sup>子<sup>上</sup>の<sup>上</sup>驗<sup>上</sup>の<sup>上</sup>聲<sup>上</sup>。君<sup>上</sup>も<sup>上</sup>哀<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>と<sup>上</sup>  
 思<sup>上</sup>し<sup>上</sup>召<sup>上</sup>て<sup>上</sup>。龍<sup>上</sup>顔<sup>上</sup>に<sup>上</sup>御<sup>上</sup>な<sup>上</sup>み<sup>上</sup>た<sup>上</sup>を<sup>上</sup>。浮<sup>上</sup>へ<sup>上</sup>た<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>ろ<sup>上</sup>有<sup>上</sup>難<sup>上</sup>き<sup>上</sup>  
 上<sup>上</sup>歌<sup>上</sup> 「糸<sup>上</sup>竹<sup>上</sup>呂<sup>上</sup>律<sup>上</sup>の<sup>上</sup>聲<sup>上</sup>々<sup>上</sup>に<sup>上</sup>。法<sup>上</sup>事<sup>上</sup>を<sup>上</sup>な<sup>上</sup>して<sup>上</sup>な<sup>上</sup>き<sup>上</sup>あ  
 と<sup>上</sup>を<sup>上</sup>御<sup>上</sup>吊<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>ろ<sup>上</sup>有<sup>上</sup>難<sup>上</sup>き<sup>上</sup>。頃<sup>上</sup>は<sup>上</sup>初<sup>上</sup>秋<sup>上</sup>の<sup>上</sup>空<sup>上</sup>な<sup>上</sup>け<sup>上</sup>は<sup>上</sup>早<sup>上</sup>三<sup>上</sup>  
 伏<sup>上</sup>の<sup>上</sup>夏<sup>上</sup>た<sup>上</sup>け<sup>上</sup>。か<sup>上</sup>せ<sup>上</sup>一<sup>上</sup>聲<sup>上</sup>の<sup>上</sup>秋<sup>上</sup>の<sup>上</sup>空<sup>上</sup>夕<sup>上</sup>月<sup>上</sup>の<sup>上</sup>色<sup>上</sup>も<sup>上</sup>照<sup>上</sup>う<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>て<sup>上</sup>。  
 水<sup>上</sup>滔<sup>上</sup>々<sup>上</sup>と<sup>上</sup>して<sup>上</sup>。な<sup>上</sup>み<sup>上</sup>悠<sup>上</sup>々<sup>上</sup>たり<sup>上</sup>。上<sup>上</sup>歌<sup>上</sup> 「わ<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>有<sup>上</sup>難<sup>上</sup>の<sup>上</sup>御<sup>上</sup>吊<sup>上</sup>ひ  
 や<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>。勅<sup>上</sup>を<sup>上</sup>背<sup>上</sup>き<sup>上</sup>し<sup>上</sup>天<sup>上</sup>爵<sup>上</sup>にて<sup>上</sup>。呂<sup>上</sup>水<sup>上</sup>に<sup>上</sup>沈<sup>上</sup>み<sup>上</sup>し<sup>上</sup>身<sup>上</sup>に<sup>上</sup>し<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>れ  
 は<sup>上</sup>。後<sup>上</sup>の<sup>上</sup>世<sup>上</sup>迄<sup>上</sup>も<sup>上</sup>苦<sup>上</sup>し<sup>上</sup>み<sup>上</sup>の<sup>上</sup>。海<sup>上</sup>に<sup>上</sup>沈<sup>上</sup>み<sup>上</sup>浪<sup>上</sup>に<sup>上</sup>う<sup>上</sup>た<sup>上</sup>れて<sup>上</sup>。呵  
 責<sup>上</sup>の<sup>上</sup>せ<sup>上</sup>め<sup>上</sup>も<sup>上</sup>障<sup>上</sup>を<sup>上</sup>かり<sup>上</sup>し<sup>上</sup>に<sup>上</sup>思<sup>上</sup>は<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>る<sup>上</sup>外<sup>上</sup>の<sup>上</sup>御<sup>上</sup>吊<sup>上</sup>ひ<sup>上</sup>に<sup>上</sup>。浮<sup>上</sup>  
 ひ<sup>上</sup>出<sup>上</sup>たる<sup>上</sup>呂<sup>上</sup>水<sup>上</sup>の<sup>上</sup>上<sup>上</sup>。く<sup>上</sup>も<sup>上</sup>ら<sup>上</sup>ぬ<sup>上</sup>御<sup>上</sup>代<sup>上</sup>の<sup>上</sup>。有<sup>上</sup>か<sup>上</sup>た<sup>上</sup>さ<sup>上</sup>よ<sup>上</sup>。  
 上<sup>上</sup>打<sup>上</sup>ふ<sup>上</sup>し<sup>上</sup>き<sup>上</sup>や<sup>上</sup>あ<sup>上</sup>は<sup>上</sup>や<sup>上</sup>更<sup>上</sup>過<sup>上</sup>る<sup>上</sup>水<sup>上</sup>の<sup>上</sup>面<sup>上</sup>に<sup>上</sup>け<sup>上</sup>ま<sup>上</sup>たる<sup>上</sup>人<sup>上</sup>の<sup>上</sup>見<sup>上</sup>み  
 たる<sup>上</sup>は<sup>上</sup>。如<sup>上</sup>何<sup>上</sup>ある<sup>上</sup>者<sup>上</sup>う<sup>上</sup>名<sup>上</sup>を<sup>上</sup>な<sup>上</sup>の<sup>上</sup>れ<sup>上</sup>。上<sup>上</sup>歌<sup>上</sup> 「是<sup>上</sup>は<sup>上</sup>天<sup>上</sup>鼓<sup>上</sup>か<sup>上</sup>亡<sup>上</sup>靈

あるか。御吊ひの有難きに。是迄顯はを参りたり。天鼓か手向の鼓。うちて其聲出ならは。實も天鼓かしるし成へしはやく。鼓を仕れ。嬉しや扱は勅。詠ろと。夕月輝く玉座のわたり。玉の笛の音聲澄て。月宮の昔もかくやとばかり。天人も影向。菩薩も爰に。天降とます氣色にて。同じく打なり天の鼓。打ならず其聲の。呂水の波は滔々と打なり。汀の聲の。よりひく糸竹の手向は舞樂は有難や。打上。面白や時もけに。秋風樂。あれや松のこゑ。柳葉を拂つて月も涼しく星もあひあふ空なれや。鳥の橋の本に。紅葉を敷。二星のやかたの前に。風冷かに夜も更て。夜半樂にもはや成ぬ。人間の。水は南。星はきたに。たんだくの。天のうみつら雲の。浪立うらや。呂水の堤の月に。囀き水に。戯れ波をうかち。袖を返すや。夜遊の舞樂も時去て。五更の。一天鐘もなり。鳥は八。こゑのはの。夜も明し。らむ時の。鼓。数は六つ。の。ちまたの聲に。又打よりて。現か夢か。また打よりて。現か夢まは

ろしとこそなまにけれ

邯鄲

上シテ。國土安全長久の。築花もいやましに。猶よろこひはまさり。草れ。菊のさかつき。取くに伊さや。呑ふよめくれや。さかつきの。流は菊水の流に。ひかれてとく。過れば。手まつさ。菊衣の。花の袂をひるか。へして。指も引も。光りなを。蓋の影の。廻るうらう久しき。我宿の。わかやとの。のしら。露けふ。こを。いく。世積りて。淵とるらん。よも。盡しよも。つさしく。すりの。水も。泉なれば。涙。と。も。く。も。い。や。まし。に。出。る。菊。水。を。の。め。は。甘。露。も。か。く。や。覽。と。こ。い。ろ。も。晴。や。ら。に。飛。た。つ。は。か。り。有。明。の。よ。る。ひ。る。と。さ。きた。の。し。み。の。築。花。に。も。築。暈。にも。實。此。上。や。有。さ。か。つ。つ。ま。て。ろ。築。花。の。春。も。と。さ。は。に。て。打。上。猶。幾。久。し。有。明。の。月。月。人。男。の。舞。な。れ。は。一。雲。の。羽。袖。を。重。ね。つ。よ。ろ。こ。ひ。の。歌。を。唄。ふ。よ。も。す。か。ら。の。唄。ふ。夜。も。す。か。ら。日。は。また。出。て。あ。き。ら。け。く。な。り。て。よ。る。か。と。思。へ。は。晝。に。も。り。ひ。る。か。と。思。へ。は。月。又。さ。や。け。し。春。の。花。さ。け

は、下シテ「紅葉も色こく」上地「夏かと思へは」シテ「雪もふりて」同  
四季折々は目のまへにて。春夏秋冬。萬木千草も  
一日に花さけり。面白やふしきや。な打上かくて時  
過頃されは。五十年の榮花もはけて。まことは夢  
のうちなれば。皆消くを失果て。有つる邯鄲  
のまぐらの上に。眠の夢は覺にけり。上シテ打上廬生はゆ  
めさめて。同五十の松あきの。榮花もたちまちに  
た。忙然と。起上りて。シテはかり多かりし。地女御更  
衣の聲をきらしは。シテ松風の音とあり。地宮殿樓閣は  
た。邯鄲の假の宿。榮花のほとは。シテ五十年。下地一扱  
夢のあひたは粟飯の。シテ炊の間をり。地ふしき成や  
はかりかたしや。下シテつらく。人間の。あり様を。案  
するに。同百年の歡樂も命終をは夢ろかし。五十年  
の榮花ころ。身の爲には是まてなり。榮花の望もよは  
ひのあかさも五十年の歡樂も王位になれは是まてな  
すけに。何事も一睡の夢。下シテ南無三寶。上地  
能々思へは出離を求る。智識は此まぐらあり。けに有  
かたや邯鄲の。實有難や邯鄲の夢の世ろと悟り  
ぬて。のうみかへなて歸りけり。

唐

船

上シテ是はまとか中々に。有かたの御事や。誠に諸天納  
受して。此子を我らにあたへ給ふか有かたや。斯  
く餘りのうれしさに。時刻をうつさす。いと申てか  
らひとは。船お取乗をし出す悦ひのあまりにや。樂を  
奏し船子ども。棹のさす手も舞の袖。折から浪のつ  
みの。舞樂につれて面しろや。上キト陸にはふかく  
に乗しつ。引名残押照海つら遠く成ゆくま  
に。招くは追風船には舞の。袖のは風も追手と  
やならん。帆をひきつれて船子ども。帆を引つれて  
ふな子どもわ。よろこひいさみて。唐土さして。急  
さける。

三 笑

上シテ三國無双の此瀧を。今まで拜せぬ心。社愚か成  
けれ。本より琴詩酒の友なれば。こゝろ静にむ  
かしをいさや語らん。下クセ抑この淵明と申は。彭  
澤の令となり。官に有事を。八十余日。印をど  
いてさるとかや。日。片地夜に酒を愛し。松菊を断ふ。菊  
を東籬のもとにとつて。南山をみる事も。君に忠ある

故とかや、<sup>上シテ</sup>まを陸修は静、<sup>同シテ</sup>宋の明帝の御時に仙の法を學んで。陸道士と申なり。後には當山の簡寂觀に。隠居してましませり。此人は天下にならふかたもあき事あれば。廬山の虎溪にも劣らぬ光りなりけり。<sup>下シテ</sup>菊の白露積りつもつて。不老不死の藥のいつみ。よも盡し。<sup>上シテ</sup>幾万代も限らし。あ<sup>引</sup>上地。打上さす盃の廻るよも。明ればくるも白菊の<sup>上</sup>花をさかなに立まふ。秋酒狂の舞とや人の見ん。よろつ代を。<sup>引</sup>萬代を。松は久しきためしな<sup>下シテ</sup>年も老松の縁はわか木の姫小松。四季にも同し。葉色の常盤木の松菊を愛まかなた。たへ足もどは泥々。ていといと。苔むす橋をよろめき給へは淵陸左右に。かいしやくし給ひて虎溪を終に出給へは。淵明禪師にきて。禁足は破らせ給ふかど。一度にとつて手を打わらせて。三笑のむかしど。なりけり。

枕 慈 童

<sup>上シテ</sup>此妙文を菊の葉に。をくした。りや露の身の。不老不死の藥と成て七百歳を送りぬる。汲人も汲さる

も。延るや千歳なるらん。面白の遊舞やな。有かたの妙文やな。<sup>引</sup>すなはち此文菊の葉に。こどこどく顯る。さきはにや。取も芳しくした。も句ひの淵ともなるや。谷陰の水の。所は。鄴懸の山のした。り菊水の流を。泉はもとより酒をれば。酌ては勸め。すくひては施しはか身も香なり。や。月も露の間其身も醉に。ひかれてよろ。たよひ寄て。まぐらを取あげ戴き奉り。實も有難き君の政徳と岩ねの菊を。手折ふせ。しき妙の袖ま。ら。花を薙にふしたりけり。<sup>下シテ</sup>元來藥の酒なれば。同。醉にもぶかされす其身もかはらぬ七百歳をたもちぬるも。此御枕の故をれば。いかにも久しき千秋のみかど。萬歳の我君といのる慈童か七百歳を我君に授けおき所は。鄴懸の山路の菊水。くめや結へや香とも。盡せしや。と菊かさわけて山路の仙家に。其ま。慈童は。かへりけり。

浮 舟

先此里に古へは。人々あまた住給ひける。たくひな



ら。取ト公ト此ト浮舟は驚る中將のかりそめに。すね給ひし  
 名ナなり。人ヒトからもなつかしく心さまよし有てお  
 ほとかに過し給ひしを。ものいひさかき世の人の  
 おほのめかし聞みしを。色深き心にて兵部卿の宮を  
 ん忍ひて尋おはせしに。おちぬふはさのいとまなき。よ  
 ひの人目もかきしくて。垣間見しつゝはせし。いと  
 不便ありしわさされや。其よにさても山住の。めつら  
 かなりし有様の。心にしみて有明の月澄のはる程なる  
 上ウに。水ミヅの面も曇りなく。舟フネさしとめし行衛とて  
 汀ツツミの永ふみ分て。道は迷はずと有しも。浅アサからぬ御  
 契ケツりあり。かたは長閑にてとはぬ程ふる思ひを  
 へ。晴ハレぬ詠ウタめと有しにも。あみたの雨や増りけん。  
 世ヨにかくに思ひわひ。此世にさくもならはやど。  
 歎ナレバきし未マははかなくて。終ハレにわとなく成にけり。  
 浮舟の御事は委承りぬ。さて。御身はいつに  
 住人シヤろ。是はこれ所に唯かり初に通ひくる者也。童  
 か栖は小野の者。都のつてに問給へ。荒ふしきや何と  
 やらんことをかひたるやうに候。借小野にては誰どか  
 尋ね申へ。かくればわらし大ひえの。杉のしるしは

なけれ共。横川の水のすむかたを。日枝をか尋  
 ね給ふへし。猶物怪の身に添て。惱むことさむ有  
 身ミなり。法ホウ力を頼み給ひつゝ。われにて待申さんと  
 うウ立雲の跡もさく行方しらす。成にけり。  
 かくて小野には來れ共。いつくを宿と定む。所  
 の名を。をのなれば。草クサのまぐらは。理りや。  
 こよひは爰ココに經スをよみ。彼御跡をどふと。かや  
 なき影カゲの。絶ツぬもをなし。なみた川。よる。定めぬ浮  
 舟フネの。法のちからを頼むなり。浅アサましや本より我は  
 うウき舟の。よるかたわかてた。よふ世に。うウき名もれ  
 んと思ひ伴。この世になくもならはやど。明れは思ひ  
 わつらひて。人皆ねたりしに。妻戸メカドをはさち出たれば  
 風カゼはけしう。河浪カハナミわらふきこえしに。しらぬ。をこ  
 のよりさつ。ささきひゆくと思ひし。心も空に  
 成ナはて。あふさるるの事もな。我がのけし  
 浅アサましや。浅アサましや。あがましや。またちはあ  
 上ウ地チの。色はかはらしを。此ココうき船フネうよる。へしられ  
 ぬ。大慈大悲の。とはりは。世ヨに廣ヒロけれと殊ツにわ  
 か。こコろひとつにをこたらず。あけては出る日の影

を<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>ぬの<sup>光</sup>り<sup>と</sup>あ<sup>ふ</sup>さ<sup>つ</sup>。暮<sup>て</sup>は<sup>闇</sup>に<sup>迷</sup>ふ<sup>へ</sup>  
 き<sup>後</sup>の<sup>世</sup>か<sup>け</sup>て<sup>頼</sup>み<sup>し</sup>に<sup>下</sup>シ<sup>テ</sup>。頼<sup>み</sup>し<sup>ま</sup>の<sup>観</sup>音<sup>の</sup>慈<sup>悲</sup>。  
 同。は<sup>つ</sup>せ<sup>の</sup>た<sup>よ</sup>りに<sup>横</sup>川<sup>の</sup>僧<sup>都</sup>に<sup>み</sup>つ<sup>け</sup>  
 ら<sup>れ</sup>つ<sup>い</sup>小<sup>野</sup>に<sup>伴</sup>ひ<sup>。新</sup>り<sup>か</sup>へ<sup>じ</sup>て<sup>物</sup>怪<sup>の</sup>け<sup>し</sup>も<sup>夢</sup>  
 の<sup>よ</sup>に<sup>猶</sup>々<sup>く</sup>る<sup>し</sup>み<sup>は</sup>大<sup>日</sup>枝<sup>や</sup>横<sup>川</sup>の<sup>杉</sup>の<sup>古</sup>き<sup>事</sup>  
 とも<sup>。ゆ</sup>め<sup>に</sup>顯<sup>れ</sup>み<sup>給</sup>ひ<sup>今</sup>此<sup>聖</sup>も<sup>同</sup>し<sup>便</sup>に<sup>と</sup>ふ<sup>ら</sup>ひ<sup>う</sup>  
 う<sup>け</sup>ん<sup>ど</sup>思<sup>ひ</sup>し<sup>あ</sup>。お<sup>も</sup>ひ<sup>の</sup>ま<sup>に</sup>執<sup>心</sup>は<sup>れ</sup>て<sup>。都</sup>卒<sup>に</sup>  
 生<sup>る</sup>。嬉<sup>し</sup>き<sup>と</sup>云<sup>か</sup>と<sup>思</sup>へ<sup>は</sup>明<sup>立</sup>横<sup>川</sup>。い<sup>ふ</sup>か<sup>と</sup>思<sup>へ</sup>  
 へ<sup>は</sup>あ<sup>け</sup>た<sup>つ</sup>横<sup>川</sup>の<sup>。杉</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>し</sup>や<sup>殘</sup>る<sup>覽</sup>杉<sup>の</sup>。あ<sup>ら</sup>  
 しま<sup>や</sup>殘<sup>る</sup>ら<sup>じ</sup>。

玉葛

あ<sup>は</sup>れ<sup>思</sup>ひ<sup>の</sup>玉<sup>葛</sup>か<sup>け</sup>て<sup>も</sup>い<sup>さ</sup>や<sup>し</sup>ら<sup>ざ</sup>り<sup>し</sup>。心<sup>中</sup>  
 つ<sup>く</sup>し<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>間<sup>の</sup>月<sup>。雲</sup>の<sup>余</sup>處<sup>に</sup>い<sup>つ</sup>し<sup>か</sup>ど<sup>。鄙</sup>の<sup>中</sup>  
 住<sup>居</sup>の<sup>う</sup>き<sup>の</sup>み<sup>か</sup>さ<sup>て</sup>し<sup>も</sup>絶<sup>て</sup>有<sup>へ</sup>き<sup>身</sup>を<sup>。猶</sup>し<sup>は</sup>  
 ば<sup>り</sup>行<sup>人</sup>心<sup>の</sup>。あ<sup>ら</sup>き<sup>浪</sup>風<sup>立</sup>へ<sup>た</sup>て<sup>。た</sup>よ<sup>り</sup>と<sup>な</sup>  
 な<sup>れ</sup>。は<sup>や</sup>船<sup>に</sup>の<sup>り</sup>を<sup>く</sup>れ<sup>ま</sup>と<sup>松</sup>浦<sup>か</sup>た<sup>。唐</sup>土<sup>の</sup>船<sup>を</sup>  
 した<sup>ひ</sup>し<sup>に</sup>心<sup>ろ</sup>か<sup>は</sup>る<sup>我</sup>は<sup>た</sup>い<sup>。浮</sup>島<sup>を</sup>漕<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
 ても<sup>行</sup>か<sup>た</sup>や<sup>何</sup>く<sup>と</sup>ま<sup>り</sup>と<sup>自</sup>波<sup>に</sup>ひ<sup>い</sup>さ<sup>の</sup>灘<sup>も</sup>す<sup>き</sup>。  
 思<sup>ひ</sup>に<sup>さ</sup>わ<sup>る</sup>方<sup>も</sup>な<sup>し</sup>。か<sup>く</sup>て<sup>都</sup>の<sup>中</sup>と<sup>て</sup>も<sup>。我</sup>。

は<sup>浮</sup>たる<sup>舟</sup>の<sup>う</sup>ち<sup>。猶</sup>や<sup>う</sup>き<sup>め</sup>を<sup>水</sup>鳥<sup>の</sup>陸<sup>に</sup>ま<sup>と</sup>へ<sup>る</sup>  
 心<sup>地</sup>して<sup>た</sup>つ<sup>き</sup>も<sup>し</sup>ら<sup>ぬ</sup>身<sup>の</sup>程<sup>を</sup>。思<sup>ひ</sup>な<sup>け</sup>き<sup>て</sup>ゆ<sup>き</sup>  
 あ<sup>や</sup>む<sup>。足</sup>曳<sup>の</sup>大<sup>和</sup>路<sup>や</sup>唐<sup>土</sup>迄<sup>も</sup>聞<sup>ゆ</sup>あ<sup>る</sup>。初<sup>瀬</sup>の<sup>寺</sup>  
 に<sup>詣</sup>て<sup>つ</sup>。上<sup>シ</sup>テ<sup>。一</sup>年<sup>も</sup>へ<sup>ぬ</sup>。祈<sup>る</sup>契<sup>り</sup>は<sup>泊</sup>瀬<sup>山</sup>。尾<sup>上</sup>  
 の<sup>鐘</sup>の<sup>よ</sup>う<sup>に</sup>の<sup>み</sup>。思<sup>を</sup>絶<sup>に</sup>し<sup>古</sup>し<sup>へ</sup>の<sup>人</sup>に<sup>二</sup>度<sup>ふ</sup>  
 た<sup>本</sup>の<sup>杉</sup>の<sup>立</sup>所<sup>に</sup>た<sup>つ</sup>ね<sup>つ</sup>と<sup>。古</sup>川<sup>野</sup>邊<sup>と</sup>詠<sup>め</sup>  
 ける<sup>。け</sup>ん<sup>の</sup>逢<sup>瀬</sup>も<sup>同</sup>し<sup>身</sup>を<sup>思</sup>へ<sup>は</sup>法<sup>の</sup>こ<sup>ろ</sup>も<sup>の</sup>  
 玉<sup>なら</sup>は<sup>玉</sup>か<sup>つ</sup>ら<sup>。迷</sup>ひ<sup>を</sup>て<sup>ら</sup>し<sup>給</sup>へ<sup>や</sup>。上<sup>ロ</sup>ン<sup>キ</sup>地<sup>。實</sup>  
 ふ<sup>る</sup>き<sup>世</sup>の<sup>物</sup>か<sup>た</sup>り<sup>。さ</sup>け<sup>は</sup>涙<sup>も</sup>こ<sup>も</sup>り<sup>え</sup>に<sup>こ</sup>も<sup>れ</sup>  
 る<sup>水</sup>の<sup>哀</sup>か<sup>る</sup>。上<sup>シ</sup>テ<sup>。あ</sup>は<sup>れ</sup>れ<sup>も</sup>思<sup>ひ</sup>は<sup>初</sup>瀬<sup>川</sup>。早<sup>く</sup>  
 く<sup>も</sup>し<sup>る</sup>や<sup>あ</sup>さ<sup>か</sup>ら<sup>ぬ</sup>。地<sup>。縁</sup>に<sup>ひ</sup>か<sup>る</sup>。心<sup>と</sup>て<sup>唯</sup>  
 頼<sup>む</sup>る<sup>よ</sup>法<sup>の</sup>人<sup>。吊</sup>ら<sup>ひ</sup>給<sup>へ</sup>我<sup>こ</sup>ろ<sup>は</sup>。な<sup>み</sup>た<sup>の</sup>露<sup>の</sup>  
 玉<sup>の</sup>名<sup>と</sup>名<sup>乗</sup>も<sup>や</sup>ら<sup>す</sup>な<sup>り</sup>に<sup>け</sup>り<sup>。切</sup>は<sup>玉</sup>  
 葛<sup>の内</sup>侍<sup>の</sup>りに<sup>顯</sup>れ<sup>給</sup>ひ<sup>ける</sup>ら<sup>や</sup>。上<sup>ル</sup>ん<sup>。縦</sup>業<sup>因</sup>重<sup>く</sup>とも<sup>も</sup>  
 上<sup>。照</sup>ら<sup>め</sup>や<sup>日</sup>の<sup>光</sup>り<sup>。大</sup>慈<sup>大</sup>悲<sup>の</sup>誓<sup>ひ</sup>あ<sup>る</sup>  
 の<sup>法</sup>の<sup>燈</sup>火<sup>あ</sup>ら<sup>か</sup>に<sup>。な</sup>き<sup>影</sup>い<sup>さ</sup>や<sup>と</sup>ふ<sup>ら</sup>は<sup>ん</sup>  
 戀<sup>は</sup>た<sup>る</sup>。身<sup>は</sup>ろ<sup>れ</sup>ち<sup>ら</sup>て<sup>。玉</sup>葛<sup>の</sup>い<sup>か</sup>  
 かな<sup>る</sup>筋<sup>を</sup>。尋<sup>ね</sup>さ<sup>ぬ</sup>らん<sup>。尋</sup>ね<sup>て</sup>も<sup>。法</sup>の<sup>教</sup>へ<sup>に</sup>逢<sup>ん</sup>  
 どの<sup>。こ</sup>い<sup>ろ</sup>ひ<sup>か</sup>る<sup>。一</sup>筋<sup>に</sup>。其<sup>儘</sup>な<sup>ら</sup>て<sup>玉</sup>か<sup>つ</sup>

らの。乱るゝ色ははつかしや。つくもかみカキ「つくも髪。我や愛らし面影に」<sup>上</sup>「立やわたなる越の身は」<sup>上</sup>「拂へ」と執心の「長き關路や」<sup>引下</sup>「黒髪」の「あかぬやいつれ寝亂れかみ。むすはれゆく。思ひかな」<sup>上</sup>「賢妄執の雲霧の」<sup>〃</sup>「迷ひもよしやうかりける」<sup>下</sup>「人を初瀬の山下風。烈しく落て。露も涙も散々に秋のはの身も。朽果ね恨めしや」<sup>下</sup>「恨みは人をも世をも」<sup>下</sup>「さうらみは人をも世をも。思ひ思はしたる身ひとつ」<sup>〃</sup>「報ひの罪や数々のうき名に立しも懺悔の有様或まひは涌かへり。岩もる水の思ひにむせひやあるひはこがるゝやみより出る玉と見るまでつゝめどもはたるにみたれつる。影もよしなや恥かしやと。此妄執をひるかへす。心は真如の玉。葛こころは真如のたまかつら。長き夢路は覺にけり

紅葉狩

「林間に酒をあたためて紅葉を焼とかや。實面白や所ら。いはほの上の菩提。かたしく袖も紅葉衣のくれ。ちる深さかほはせの」<sup>下</sup>「此世の人ともおもはれす」<sup>同</sup>「胸うちさわく斗なり」<sup>下</sup>「ささたに人こころ。乱る

いふしは竹の葉のつゆはかりたに受しとは。おもひしかども盃に。向へはかはる心かな。されは佛もいまし先の。道は様々おほけれど。殊に飲酒を破りおは邪淫忘語ももろ共に。みたれこころの花かつら。かゝる姿はまた世にも類ひあらしの山櫻。よろの見るめもいかならん」<sup>上</sup>「よしや思へは是どても」<sup>同</sup>「前世の契り淺からぬふかき情の色見えて。かゝる折しも道の邊の。草葉の露のかことをもかけてう頼む行末を。契るもはかあうちつけに。人のこころもしら雲の立わつらへるけしきかあ。かくて時刻もうはりゆく雲にあらしの聲す也。ちるかこころのかつらぎの。神の契りのよるかけて。月のさかつささす袖も。雪を廻らす袂かあ。堪す紅葉」<sup>上</sup>「堪す紅葉青苔の地打上たへす紅葉青たの地。又涼風くれ行空に。雨うちうしく夜嵐の。物冷しき山陰に月待はどのうたねに。片敷袖も露深し。夢はし覺し給ふなよ」

歌占

「一生はた、夢のことし。誰か百年の齡ひを期せん

下<sup>同</sup>。万事は皆空し。何れか常住の思ひをあらん<sup>上シテ</sup>  
 命は水上の淡。風に随つて江廻るかごとし。魂は  
 籠中の鳥の。開くを待て去に同じ。消る物は二度見  
 みず。去ものは重ねてきたらぞ<sup>引クセ</sup>。須臾に生滅し。  
 刹那に離散すめしき哉。や。釋<sup>片地</sup>。迦大師のをん  
 こんの教を忘れ。悲しきかなや。閻魔法王の。呵責の  
 こと業をさく。名利身をたすくれども<sup>ヨ</sup>。いまたはく  
 はらのけふりをまぬかれず<sup>ヲ</sup>。恩<sup>ヲ</sup>。愛<sup>ヲ</sup>。こころを腦  
 ませども<sup>ヲ</sup>。誰か黄泉の責にしたのはさる。是かた先  
 に馳走す<sup>ヲ</sup>。しよとくいくはくのりけや。是によつて追求  
 こそ。所作たさいなり。暫く目をふさいて<sup>ヲ</sup>。往事を思  
 へば。舊友皆亡す。指を折て<sup>ヲ</sup>。故人をのろふれば。親  
 疎多くかくれぬ<sup>ヲ</sup>。時うつり事去て<sup>ヲ</sup>。今なんぞ<sup>ヲ</sup>。へらは  
 うたらんや人ぞ。ま<sup>リ</sup>我ゆくたきか<sup>又</sup>常あらん<sup>上シテ</sup>  
 「三界無安猶如火宅。天仙をほし死苦の身あり<sup>ハ</sup>。いはん  
 や下<sup>界</sup>。貧賤のはうに於ておや。おと<sup>カ</sup>其罪かるから  
 ん死に<sup>シ</sup>。苦しみをうけかさね。業に悲しみ猶ふる  
 せん<sup>ハ</sup>。さんすい地獄のくるしみは。さうちうにて身を斬事  
 截断して血痕<sup>片地</sup>。藉たり<sup>ハ</sup>。一日の其中に。万死<sup>片地</sup>。万生<sup>片地</sup>

たり。劍樹地獄の苦しみは。手に劍の樹をよとれば。百  
 節れいらくす。足に刀山踏時は。劍樹共にけすとかや  
 せきくはつ<sup>ハ</sup>。地獄の苦しみは。よりやうかいの大石も  
 ろくの。罪人を砕く次の火盆地獄は。かうへに火  
 烟を戴けは。はくせきせ骨頭より。烟々たる火を出す  
 。或時は焦熱大焦熱の。ほのほにむせひ<sup>ハ</sup>。或時は<sup>ハ</sup>  
 紅蓮大紅蓮の<sup>ハ</sup>。氷<sup>ハ</sup>。に<sup>ハ</sup>。閉られ<sup>ハ</sup>。鉄杖頭を砕き<sup>ハ</sup>。火爐<sup>ハ</sup>  
 な<sup>ハ</sup>。うらをやく<sup>ハ</sup>。上<sup>シテ</sup>。飢ては<sup>ハ</sup>。鉄丸<sup>ハ</sup>。をのみ<sup>ハ</sup>。渴し  
 ては<sup>ハ</sup>。銅汁を飲どかや<sup>ハ</sup>。地<sup>ハ</sup>。この苦しむも無量なり  
 餓鬼の。苦しむも無邊なり。昔生修羅の悲しみは。  
 我らに<sup>ハ</sup>。かて増るへき。身より出せる科なれば。こ  
 ろの鬼の身を賣て。か様に苦おは受るあま。月の  
 タの<sup>ハ</sup>。うき雲は後の世の迷ひあるへし<sup>上同</sup>。後の世のやみ  
 は何と<sup>ハ</sup>。か。照すらん<sup>上同</sup>。胸のかしみよ心にこすなく<sup>ハ</sup>  
 上<sup>シテ</sup>。荒悲しや唯今参り候に。是程はなとやお貴わ  
 るろ。荒悲しあらかなしや<sup>上同</sup>。ふしきやあ又彼人の  
 神氣とて。面色變りなまうついなきうの有様。「五脉  
 さなから苦しめて。白髪は乱れ遊のみ。」「ゆきをち  
 らせることくにて。」「天に叫び。」「地に倒れて。」「<sup>上同</sup>神風

の「もみもんで」時しも卯の花くたしの五月雨もふるやと斗おもてには白汗をなかして袂には露のしけ玉。時ならぬ霞たまるる。足踏は滔々を手のまひ笏柏子打をとは窓の雨の。振ひわさき立つ居つ肝膽をくたく神のおこたり申上るとみおつるか神はあからせ給ひぬとてはうくと狂ひさめて。さや我子よ打つれて。思ふ伊勢路のふるさとに又もかへりなは二見のうら。またも歸らばふたみの。浦千鳥友よひて伊勢の國へ歸りける。

山姥

「一洞空しき谷の壁。梢に聞く山彦の。無聲音をきく便となり。聲に響かぬ谷もかなど。望しも實かくやらん。殊に我住山家のけしき。山高うして海近く。谷深うして水遠し。前には海水滔々として。月真如の光りをかひけ。後には嶺巖々として風常樂の夢を破る。けしへんかまこちて盤ひさしくさる。かんて音ふかうして。鳥驚かすとも。さひつへし。遠近のたつきもしらぬ山中に。覺束あくる呼子鳥のたてあすこき折々は伐木丁々として。山さらに幽なり。

法性 峯ろひひては上 求菩提をあらはし無明谷 深き粧ひは下 化衆生を表して金輪際に及べり。抑山姥は。生處もしらす宿もなし。唯雲水を便りにて至らぬ山の奥もあし。然れば人間にあらすとして。隔つる雲の身をかへ。假に自性を變化して一念。化生の鬼女を成て。目前に來れども邪正一如と見る時は。色即是空其まに。佛法われは。世法わり煩惱われは菩提あり。ほとけわれは衆生有衆生われは山うはもあり。柳は緑。花は紅の色々。切人間に遊ぶ事我時は山賤の樵路に通ふ花のかけ。休む重荷に肩をかま月諸ともに山を出さど送送る折もあり。又或時は織姫の。五百はた立る窓に入て中枝のうくひすいと線紡績の宿に身をおき人を助くるわさをのみか賤のめに見みぬ鬼とや人のいふらん。世を空蟬れから衣。拂はぬ袖にをく霜は夜寒の月に埋もれ。うちすさむ人の絶間にも千聲万聲れ。さぬたに聲の。四手うつは只山姥かはさなれやのみやこに歸りて世かたりにせさせ給へど。思ふは猶も妄執か。たうち拾よ何事もよし足曳の山

姥か山登りする苦しき。上シテ「足曳の山廻り」  
 一樹の陰一河は流れ。皆是化生の縁うかし。ましてや  
 我名を夕月の。淨世を廻る一節も。狂言綺語の道す  
 くは。謫佛乗の因うかし。荒御名殘おしや。「いとま  
 申して。歸る山の。」上地「松は梢に咲かど待し」「花を尋ね  
 下山廻り」秋はさやけき影を尋て。「月見るかた  
 にと山めぐり」冬を冴ゆく時雨の雲の「ゆきをを  
 ろひて山めぐり」廻りく「て輪廻を離れぬ忘執  
 の雲ちり積つて山姥とされる鬼女か有様みるや  
 くをみねにかけり谷にひきて今迄爰に。有よど  
 見ゆしか山また山に。山廻りや。ま又山に山めぐり  
 して。行衛もしらす成にけり

花月

「されはにや大慈大悲の春の花。十悪の里に、かう  
 はしく。三十三身の秋の月。五濁の水に影清し」  
 抑此寺は。坂の上の田村丸。大同二年の松の頃。草  
 創有し以來。今も音羽山。みねのしつえのした。り  
 に。濁るどもなき清水のなかれを誰か汲さらん。わ  
 るとき此灘の水。五色にみねて落ければ。うれをあや

しめ山に入。其水上を尋るに。こんしゆせん岩の洞  
 の。みつの流れに埋れて名は青柳の朽木あり。其  
 木より先りさし。靈香四方に薫すれば。さてわ疑ふ  
 所あり。楊柳。觀音の。御しようんにてましますかど  
 皆人手をわはせ。猶も其奇とくをしらせてたへと申  
 せは。朽木。木は柳は緑ををし。さくらにあらぬ老木ま  
 て。皆白妙に花咲けり。扱。こ。う。千。手。の。誓。ひ。に  
 は。枯。た。る。木。に。も。花。咲。を。今。の。世。迄。も。申。な。り

我はもとつくしの者。あたり近き彦山に登りしに。  
 七つのだし天狗に。下地「とられて行し山々。くを思ひ  
 やるころ悲しけれ。まつつくしには彦の山。深きお  
 もひを四王寺。巖岐には松山降さむ雪のしろみね。扱  
 伯耆には大山偕はうきにはたしさん。丹後丹波は境  
 ある鬼か城。を聞しは天狗よりも恐ろしや。上「扱京ちか  
 き山やま。さて京近き山々。あたこの山の太郎坊。ひ  
 らの。峯の次郎坊。名高き比叡の大嶽お。少し心の  
 すみし。社。下「八月の横川の流れなれ。日頃は余所への  
 み。見てややみなんとなかめしに。かつらさや高  
 間の山。三。上。大峯釋迦の嶽。富士のたかねにわ



前には。うゐの轉變を悟り。電光石火の影の中には。生死の去來を見ること。始て驚くへきにはあらねども。いづくの夢を纏はりし。假の親子の今をたに。ろひ果もせぬ道芝の露の憂身の置所。誰に問まし。旅の道。是も浮世の。あらひや。悲しみの涙。まきこに。遮り思ひのけふり胸にみつ。つらく。是を案づるに。三界に流轉して。猶人間の忘執の。晴かたき雲のはの月の御影や。明らかけき。眞如平等の臺にい。たらんとたにも歎かすして。煩惱のきつなむすは。いれぬるる悲しき。罪障の山高く。生死の海深しい。かたとして。か此生に。此身を浮へんと。けに歎けども。人間の身三口四意三の十の道多かりき。されははしめの御法にも。三界。一心なり。心外無別法。心佛及衆生。と開時は。是三無差別何疑ひの有へき。や。己身のみた如来唯心の淨土成へくは。尋ねへ。からす此寺の御池の蓮のえん事を。まどか知さらむ。只願はくは影たのみ。聲を力の助け舟。こかねの岸に至るへし。ちもく。樂しみを極むる致へ。あまたに生れ行。道様々の品なれや。寶の池の水。功德池の

濱の眞砂。數々の玉の床。露も品々のたのしみを極め。量なき命のはとけ成へしや。若我成佛十方の世界あるへし。本願誤り給はまは。今の我等かねかはしき。つまのゆく術を白雲のたなひく山やに。しの空のかの國に迎へつ。ひとつ淨土の縁と。かし望みを叶へ給ふへしと。稱名も鐘の音も。あかつきかけて。ともし火の。よき光りりと。あふくなりや。南無歸命彌陀尊願ひをかなへ給へや。上ロキ地。今は何をかつ。むへき是。こち御子花はかといふにもす。む涙かな。我子と。聞は餘りに堪かぬる。夢かと思ひ子。のいつれ。切もふしきや。な。とも。に夫とは思へ共。かはるすかたは墨染の。一見しにも。あらぬおも。忘れ。母のすかたも。うつ。あさ。狂人といて。衰へ。といひ。たかひに。あきれて。有なから。能々見を。は。まき。の原や。ふせや。に。生るは。き木の。ありとは。み。て。あはぬ。どころ。聞し物。を。今は。之や。疑ひも。なき。ち。ろのは。や。子に。逢ふ。ころ。うれし。かり。けれ。く。

櫻川

岸花紅井に水を照し。洞樹縁に風を含む。山花開



けて錦に似たり。淵水たいてゐるのとし。下シテ「面白や  
 思はず爰にうかれきて。同 名もあつかしき櫻川の。一樹  
 の陰一河のあかれ。汲てしる名も所からあひにわひ  
 なは櫻子の。是また他生の縁なるへし。引クセ 實やとし  
 をへて。花のかいみと成水は。散かゝるをや。盛ると  
 いふらむ。誠ちりぬれば。後、はあくたにさる花と。  
 思ひしる身も扱いかに。我も夢なるを花のみと見  
 るろはかなき。されは梢よ。あたに散ぬる花なれば  
 落ても水の哀れとはいさしら浪の花にのみ。馴しも今  
 は先たいぬ悔の八千度百ちどり。花にまれゆくあ  
 たしみは。はかなきほどにうらやまれて。かすみをあ  
 はれみ露をかなしめる。さるさる。上シテ「去にても。名に  
 のみ開てはる。思ひはたりし櫻川の。なみかけ  
 て常陸帯の。かこと。はかりにちる花を。わたにな  
 さしと水をせき雪をた。えてうき浪の。花のし  
 からみかけま。かたしけましや是とて。この  
 花咲や姫の御神木の花なれば。風もよきて吹水  
 も陰をにこす。さたもどをひたし。もすうを。しほらか  
 きて。花によるへの。水。せきとめて。さくら川

になさふ。下シテ「あたら櫻の。く。さ。り。は。さ。る。う  
 恨みふる。花もらし風もつらし。ちれば。さ。る。う。下シテ  
 「誘へはうちる花かつら。上シテ「かけてのみ詠めしは。下シテ  
 猶青柳の糸さくら。上シテ「かすみのまには。下シテ「櫻雲を  
 見しは。下シテ「三吉野の。下シテ「みよしの。見よしの。川よ  
 と瀧津浪の。花をすくはし。くす魚や。かいらま  
 し。また。は。さ。くら。を。さ。る。開。も。み。つ。か。し。や。何。れ。も。白  
 妙の。は。な。も。さ。くら。も。雪も波も見なからに。すくひ  
 集め持たれども。是は木々の花。誠は我尋ぬる。  
 さくら子。さくらこひしき。わが櫻子。戀しき。上シテ「如何  
 にやいかに狂人の。この葉開はふしきや。なもしも  
 つくしのひとやらん。上シテ「今迄は誰ともいさやしらぬ  
 ひの。つくし人かどの給ふは何のお爲にとひ給ふ。上シテ  
 何をか今はついでへき。親子の契り朽もせぬはな櫻  
 子。御覽せよ。下シテ「櫻子と。上シテ「開は夢か。見もはか  
 すい。つれ我子。さくらん。上シテ「三年の日数は。さふりて。別  
 れも遠き親と子の。もとの姿は。かはれども。地。さ。す。か  
 見されしおもたてを。一能々みれば。さくら子の。花  
 の顔はせの。こは子ありけり。鶯の。あふ時。も。さ。く

音ころ嬉しき涙をりけれ。下キリ「かくてともなひ立かへり。母をも助け様かへて佛果の縁とありにけり。二世安樂のぬん深き。親子の道ありかたきく。

花 篋

同 李夫人の御別れを歎き給ひあさまつりこと神さひてよるのおとしいたつらた唯思ひの涙御衣のたもとを濡す。又李夫人は好色の。花の粧ひ衰へてしはる。露の床の上。ちりのかいみれ影を恥て。つゝに帝に見み給ははしてさり給ふ。やみかどふかく歎かせ給ひつゝ其御かたちを甘泉殿の壁にうつし我も畫圖に立ちひて明くれ歎き給ひけり。れどもあか。御思ひは増れ共。物云かはす事なきを。深く歎き給へは。りせうと申太子のいせけなくましますか。父帝に奏し給ふやう。上シテ「李夫人は本はこれ。上界の驥妾。くはすいこの仙女なり。一旦人間に。生るゝとは申せども終にもとの仙宮に歸りぬ。泰山府君にまうさく。李夫人の面影を。しはらく爰に招くへしとて。九花帳のうちにして。反魂香を炷給ふ。夜ふ

け人しつまり。風すさましく。月秋なるに。うれかど思ふ面影の。有かなきかにかへ問へは。猶いやましの思ひ草葉末に結ぶ白露の。手にもたらては。ともなくたいいたつらに消ぬれば。漂渺。悠揚として。また尋ぬへさかたを。上シテ「かさし。の餘りに。李夫人の住なれし。甘泉殿を立ざらす。空しき床を打はらひ。ふるさす。ま古き枕ひとり。袂をかたしく。上シテ「宣旨にて有る其花篋をまゐらせ上候へ。餘りの事に胸ふさかり。こころ空なる花かたみを。恥かしなから参らす。上シテ「帝は是を敬覽わけて。疑ひもなき。田舎にて。御手に馴し御花篋。おさしくと。先置給ひし御玉章の恨を忘れ。狂氣をといめよ本の如くに召仕はんと。の宣旨なり。上シテ 實有難き御恵み。直なる御代にかへるしるしも。思へはたもちしかたみのとく。上キ「彼是ともは時にあふ。上シテ「花の篋の名をどめて。上キ「戀まき人の手馴し物を。上シテ「かたみと名付うし。上キ「此時よ。上シテ「はしまりける。上同 ありかたやかく。情の未をしら露の。恵みにもさぬ。花かたみの。かたまし。まさぬ。君のみこ。ろろ有か。上キ「御遊も既に時過て。今は還幸を。し奉

らんど。供奉の人々御車やりつゝけもみちは散どふ御前を拂ひはらふや。袂も山風に。さうはれゆくや玉穂の都。さうはれ行や玉はの都に。盡せぬちさう有かたき。

百 萬

「午羊經街にかへり。鳥雀ゑたの深きにあつまる。實世の中はあな浪の。よるへは向く雲水の。身のはていかにならの葉の梢の露の故郷に。うき年月を送りしに。さしもふたよとかけし中の契りの末は花かつら。結ひもと先ぬあな夢のなかせ別れと成はてて下シテ。比目の枕しき浪の。哀はかきさ。契りか。奈良坂の。このてかしかはのふた面。とにもかくにも倅人のちなき跡のあみたこす。袖のしからみ障なきに。思ひかきさるとし並の。流る。月のかけをしき。西。大寺の柳陰みどり子のゆく衛白露の。起わかれていつちどもしらす失にけり。一かたをらぬ思ひ草葉末は露も青月よし。奈良の都を立出て。歸り三笠山佐保の川を打渡りて。山城に井手の里。玉水は名のみして影うつす。面かけ淺ましき姿なりけり。かくて月日を

送る身の。ひつしのあゆみひまの駒。あしにまかせて行程に。都のしにと聞ゆる嵯峨の。寺に参りつゝ。四方の氣色を詠れば。はなのうき。の龜山や。雲にさかる。大井川。誠。に浮世のさかなを。かり過行。山櫻あらしの風。松の尾小倉の。里の夕霞。立。こつ。け小忌の袖。かさしる多き花ころも。貴賤群集する此寺の法を尊き。かれよりも是よりも。唯この寺有難き。かたしけなくもかゝる身に申わ恐れあれども。二佛の中間我らことさの迷ひある。道あきらめんあるしとて。昆首羯摩。か作りし。赤梅檀の。尊容聴て。神力を現して。天竺震旦。我朝三國に渡り。有かたきも此寺に現し給へり。安居の御法を申も。御母摩耶婦人の。孝養の御爲なれば。佛も御は。を悲しみ給ふ道ろかし。況や。人間の身として。なごらはは。をかなしませぬと。子を恨み身をかこち感歎して。祈りける親子あふむの袖をれや百萬か舞を見給へ。わら我子。悲しや。是はと多き人の中に。さどやわか子のなさをらん。あら我子こひしや吾子たへさふ。南無釋迦牟尼佛と。狂人なからも子にもや

逢<sup>ト</sup>。信心はなきをなむあみたふつ。南無釋迦牟尼佛  
 南無あみた佛<sup>ト</sup>。こころならすも逆縁なからちかいに  
 あわせて。たひたまへ。打上<sup>ト</sup>あまりに見るも痛わ  
 しゃ。是<sup>ト</sup>ころおことの尋ねる子よ。能々よりて見給へ  
 ども。恨めしやとくにも名乗給ふならば。か様にはちを  
 はさらさし物を。荒<sup>ト</sup>恨めしとははもへとも。たまへ  
 あふは優曇花の<sup>ト</sup>はなまちはたりゆえかうついかま  
 ほろしか<sup>ト</sup>。能々物を案するに。く。彼御本尊は元  
 よりも。衆生の爲の父なれば。母諸どもに廻りあふ。  
 法のちからう有かたき。ねかひもみつの車路をみや  
 こにかへる嬉しさよく

加茂物狂

「實<sup>ト</sup>や往昔に祈りし事は忘れしを。哀はかけ。加茂  
 の川浪。立<sup>ト</sup>かへりきて年月の誓ひを頼む逢瀬はす  
 シテ。あはれみ垂て玉すたれ。かゝる氣色を。守り給  
 へ。我も其。して涙うかゝりにき。又いつか  
 と思ひ出し。なみたあからに立別れて。都に  
 も心どめし。東路の末遠くは。其名もなつ  
 かしの思ひ乱れし忍ぶ摺<sup>ト</sup>たれ故ういかにとかこた

んとする人もなし。鄙の長路におちふれて。尋ねるか  
 ひもさくく。其<sup>ト</sup>佛の見ゆされは。猶行方の登束さ  
 く。参河にわたす八橋の。蜘蛛に物をおもふ身はいつ  
 くをうことしらねども。岸邊に波をかけ川。小夜の中山  
 中<sup>ト</sup>。命のうちには白雲の又越へしと思ひきや  
 花<sup>ト</sup>ひらさきの藤枝の。幾春かけて匂ふらん馴にし  
 旅の友たにも。こころ。岡部の宿とかや。つたの  
 細道分<sup>ト</sup>過て。きされ衣を。うつの山現や夢に成ぬら  
 ん。見開に付て愛思ひ。猶こりすまの心どて。又歸り  
 くる都路のおもひの色やはるの日の。光<sup>ト</sup>りの影も一  
 入<sup>ト</sup>の。柳。さくらをこきませ。錦をさらすた  
 てぬきの。の衣のにはやかに立まふ袖も梅か香  
 の。花<sup>ト</sup>やかなりし春過て。夏もはや北祭けふ又花の  
 都人行<sup>ト</sup>。かふ袖の色々に。貴賤群集の粧ひも  
 ひるかへす袂ありけり。一月にめて。月<sup>ト</sup>にめて  
 花を詠し。いにしへの打上<sup>ト</sup>跡は。こゝに在<sup>ト</sup>原なる  
 りの業平の。結縁の衆生に。契<sup>ト</sup>りむすふの。神  
 どや岩本の。一本の身あれとかりの世に出て。月やあ  
 らぬ。春やむかしの。はるならぬくおもへは我も

「唯、つとなく、同、片地。う、こ、も、涙、の、み、思、ひ、  
 を、り、て、我、身、一、つ、の、憂、世、の、中、の、悲、し、き、上、ロ、ン、キ、地。は、ま、め、  
 より、み、れ、は、正、し、く、そ、れ、ろ、と、は、思、へ、と、人、先、つ、い、ま、し、や、  
 上、テ、人、め、を、も、我、は、思、は、ぬ、身、の、行、衛、。心、ま、よ、ひ、の、あ、や、  
 し、く、も、さ、す、か、に、ろ、れ、ろ、と、知、け、し、き、恥、か、し、け、れ、は、  
 い、ひ、あ、へ、す、上、地。よ、し、や、樂、ひ、に、し、ら、ま、月、か、へ、る、家、路、は、住、  
 な、れ、し、シ、テ、「五、條、あ、た、り、の、夕、顔、の、地「つ、ゆ、の、や、と、は、シ、テ、  
 い、ろ、あ、て、に、下、同「ろ、れ、か、あ、ら、ぬ、の、空、目、も、あ、ら、し、あ、ら、  
 た、る、。神、の、誓、を、仰、き、つ、。更、ぬ、や、う、に、て、引、別、れ、  
 て、テ、此、河、嶋、の、行、末、は、逢、瀬、の、道、に、あ、り、に、け、り、く、

源氏供養

「爰に數ならぬ紫式部。頼みをかけて石山寺。悲願を頼み籠りて。此物語りを筆にまかす。下、同され共終に供養をせざりし科により。妄執の雲も晴かたし「今逢かたき縁に向つて。心中の所願をおこし。ひとつ下の巻物に寫し。無明の眼をさます。南無や光源氏の幽靈成等正覺。抑きり壺の夕の煙すみやかに法性のうらに至り。はき木のよるの言の葉は終に覺樹の花ちりぬ。うつ蟬の空しき此世をいとひては夕

顔の露の命を觀し。わか紫のくものむかへ上、テ、末、  
 摘花のうてなに座せば。紅葉の賀の秋の落葉もよしや  
 た、テ、たま、く、佛、意、に、あ、を、あ、ら、し、め、同「愛、別、離、苦、  
 を、ね、か、ふ、へ、し、上、シ、テ、「花、ち、る、里、に、す、む、と、も、同「愛、別、離、苦、  
 の、こ、と、は、り、ま、ぬ、か、れ、か、た、き、道、と、か、や、片、地。唯、す、へ、か、ら、く、  
 は、上、生死、流、浪、の、す、ま、の、浦、片、地。を、出、て、片、地。四、智、圓、明、の、あ、  
 か、し、の、う、ら、に、み、を、つ、く、し、い、つ、ま、て、も、あ、り、あ、ん、唯、蓬、生、  
 の、や、と、な、か、ら、。菩、提、の、道、を、願、ふ、へ、し、上、松、風、の、吹、と、て、も、  
 業、障、の、薄、雲、は、は、る、こ、と、更、に、あ、し、秋、の、風、き、ぬ、す、し、  
 て、上、し、ま、忍、辱、の、藤、袴、上、上品、蓮、臺、に、こ、ろ、を、か、け、て、上、真、  
 ある、七、寶、莊、嚴、の、眞、木、は、し、ら、の、も、と、に、ゆ、か、ん、梅、か、枝、  
 の、匂、ひ、に、移、る、わ、か、こ、ろ、。藤、の、う、ら、葉、に、お、く、つ、ゆ、の、  
 ろ、の、玉、か、つ、ら、か、け、は、し、し、朝、顔、の、光、り、頼、ま、れ、す、上、テ、あ、  
 した、に、は、梅、檀、の、陰、に、宿、り、木、名、も、高、き、。つ、か、さ、位、を、  
 あ、つ、ま、や、の、う、ち、に、こ、め、て、上、樂、し、み、さ、か、ぬ、を、浮、舟、に、た、ど、  
 ふ、へ、し、と、か、や、是、も、か、け、ろ、ふ、の、身、あ、る、へ、し、上、夢、の、う、  
 き、は、し、を、打、渡、す、。身、の、來、迎、を、ね、か、ふ、へ、し、。南、無、や、西、  
 方、彌、陀、如、來、。狂、言、綺、語、を、ふ、り、捨、て、上、紫、式、部、か、後、の、  
 世、を、た、す、け、給、へ、と、諸、共、に、上、鐘、う、ち、あ、ら、し、て、廻、向、も、す、

てに終りぬ。上ロキ地。實面白や舞人の名。幾今はどなく鳥のゆめをもかへすたもどか。上シテ。「光源氏の御あどを吊ふ法のちからにて。我も生れんはちすの花のえんは頼もしや。上地。「實や朝は秋のかり。下シテ。「夕へには影もあし。上肩。朝顔の露。稻妻の影。何れかあたらぬ定めなのうさ世や。下キリ。能々物を案するに。く。むらさき式部と申之彼石山の観世音かりに此世に顯れて。かゝる源氏の物語。是も思へは夢のよど。人に知せん御方便けに有かたき誓ひかな。思へは夢れ浮橋も夢のあひたのこと葉なま〜

田村

「然るに君の宣旨には。同。勢州すいかの悪魔をしつを都鄙安せんになすへしどの。仰によつて軍兵をどいのへ。既に殘く時節に至りて此觀音の佛前にまゐり。祈念をいたし立願せしに。下シテ。「ふしぎの瑞驗あらたあれは。同。歡喜微笑の頼みをふくむて。急ぎ凶徒。引。打立たり普天の下。率士の中いづれ王地にあらざるや。頼て名にしあふ。關の戸さしてあふ坂の。山をこゆればうら波の。粟津の森や蜻蛉の。石。山寺をふし拜み

これも清水の一佛也。頼みはあひに近江路や。上。勢田の長橋ふみならし駒もあしきみやいさむらん。上。既。に伊勢路の山ちかく。同。弓馬の道も先かけんと。かつ。色。見せたる梅かねの。花も紅葉も色めさて。猛きころはあらかねの。土も木も我大君の神國に。ともどり。觀音の御誓ひ佛力といひ神力も。猶かすくにますらをか。まつとはしらてさをしかの。鈴鹿の御禊せし世々迄も思へは佳例あるへし。上。去程に山河を動かす鬼神の聲。天にひいき地にみちて。萬木せいさん動搖せり。上。いかに鬼神も慥にさけ。昔もさるためあり。ちがたといひし。同。逆臣に仕へし鬼も。王位を背く天罰にて。ちかたを捨れば忽亡ひうせしをかし。上。か。ましてやまらかき鈴鹿山。上。振放みれば伊勢の海。く。あ。松原村立來つて。鬼神は。黒雲。鉄火をふらしつ。千手。身に身を變して山の。ことくに見わたる所。下。あれを見よふし。同。味方の軍兵の旗の上に。千手觀音の光りを放つて虚空に飛行し。千の御手毎に。大悲の弓には。智恵の矢をはめて。一度放せは

千の矢さき。雨霰とふりかゝつて。鬼神のうへに。乱れ落れば。ことごとく矢先にかゝつて鬼神は残らず討れにけり。有かたし。誠は呪明諸毒藥念彼。觀音のちからを合せて。則還着於本人す。あはち還着於本人の。かたきは亡ひにけり。是觀音の佛力なり。

八 嶋

其時兼房申やう。口惜の御ふるまひや。渡邊にて景時か申しも。是にて社候へたとひ千金をのへたる御弓なりども。御命にはかへ給ふへきかど。あみたを流し申ければ。判官是を聞き召。いやと弓をおしむにあらす。義經源平に。弓箭を取てわたくしあし。然れども佳名はまたなかはあらす。されは此弓を。敵にとられよしつねは。小兵也といはれむ。無念の次第なるへし。よしうれ故に討れんはちからなし。義經か運の極と思ふへし。おさらすは敵にはたさし。とて浪にひかる。弓執の名は。末代にあらすや。語り給は兼房。さて其外の人までも皆感涙を流まけり。智者は。まとはす。勇者は。をうれすの。やたけころの梓弓かたきには取つたへ

し。を。しむは名のためをしまぬ。命なれば。身を捨て社後記にも佳名を。弓筆のあどあるへけれ。また修羅道の時の。一矢さけひの音。しんとせり。けうのしゆらの敵はたぞ。何能登守教經とや。あら物々しや手みはしりぬ。思ひろ出る擅の浦の。舟軍今ははや。闇浮にかへる生死の。海山一同に震動して。船よりは時の聲。陸には波のたて。月にしらむは。つるさのひかり。うしはにうつるは。かふとの星のかけ。水やうらくゆくもまた雲の浪の打合さし。ちかふる。船軍のかけひ。さうき沈むせし程に。春の夜の涙より明て。敵と見らしは群るかも。時の聲と聞えしは。浦風ありけり。高松の。浦風ありけり。たかまつのおを。あらしと。うなりける。

忠 度

中にも此忠度は。文武二道を受給ひて。世上に服たかし。後白河院の御宇に。千載集を撰る。五條の三位俊成の卿。うけ給つて。是を撰す。年は壽永の秋の頃。みやこを出しときなれば。さも。いうかは

しかりし身の。く。こころの花か乱菊のきつね河よりひきかへし。俊成の家に行歌の望みを歎きえに。望み足ぬればまた弓箭にたつさはりて。西海の波の上。しはしと頼むすまの浦源氏のすみ所。平家のためはよしおしをしらさるはかなき去程に一の谷の合戦。今はかうよと見えし程に皆々船に取乗つて海上にうかふ。「我も船にのらんとて。汀の方に打出しに後をみれば。むさしの國の住人に。岡部の六彌太忠澄と名のつて。六七騎にて追駈たり。爰る望む所よと思ひ。駒の手綱を引かへせは。六彌太頼てむすと組。兩馬のあひにとうと落。かの六彌太をとつて押へ。既にかたなに手をかけしに。六彌太か郎等。御後より立まはせ。うへにまします忠度の。右のかひきを打おとせは。左の御手にて六彌太をとつて投のけ今は叶はしとおほし召て。このき給へ人々よ西拜まんと。のたまひて。光明。遍昭。十方。世界。念佛。衆生。採取。不捨との給ひし。御聲のしたよりもいたはしやあへなくも。六彌太太刀を抜もちついに御首を打おとす。六彌太心に思ふ様。痛はしや彼人の御死骸

を見奉れば。其年もまたまき。長月ころの薄くもりふりみふらすみ定めなき。時雨通ふ村もみちの錦の直垂はたし世の常によもあらし。いか様是は公達の御中にころあるらめと御名床しき所に。系ひらをみればふしきやな短冊を付られたり。見れば旅宿の題をす。ゆきくれて木のした陰をやとせは花やこよひの。あるしならまし。忠度とかけたり。扱はうたかひあらしのあとに開けし薩摩の守にてます痛はしき。御身この花のかけに立寄給ひしを。かく物語申さむとて日を暮しとめしなり。いはは疑ひよもあらし花は根にかへる也。我あどとひてたひ給へ木陰を旅の宿とせは。花ころあるしきりけれ

籠

「東は生田の杜。西は一谷を限つて。其間三里か程はみちくたり。浦には數千艘の船をうかへ。陸には赤旗いくらも立ならへ。松風に靡き天にひるかへる有様。みよう火雲を灼のを見たり。惣して此城の。前は海うしろは山。左は須摩右はわかしの。とよりかくより行かふ舟の。ともねの千鳥も聲こゑ



あり。時しも如月上旬の空の事あれば。須摩の若木の櫻もまた咲かぬる薄雪の返かへる浪爰許に。田のおのほからさかりをねて。かつ色見する梅枝一花開けては天下の春よど軍の門出をいはふ心の花も先駈ぬ去はどに味方の勢。六萬余騎を二手に分て。範頼義經の追手搦手の。海山かけて須摩の浦。四方をかこみておしよする。魚鱗鶴翼もかく。山松に群ゐるは。残の雪の白妙に掛をたしむまな鶴の。翅をつらぬる其景色。雲にたくへて夥し。浦には海人をまづくに。漁父の船影數みぬて。いさりたく火もかけらふや。あらしも波も須摩の浦野にも山にも漕よする。兵船はさなから。天の鳥船もかくやらむ。飯まくら一夜の宿をかし給へ。雪の花のあらしと思しめさは下臥に待給へ。花のあらしとおもへどは。御身いか成人や覽。草の。其景季か幽靈をり。樹の陰の花の緑に。鶯宿梅の木のもとに宿らせ

給へ我はまた世をうくひすのねくらは此花よどて矢にけり此花よどてううせにける。の衣を返しつ。澄夜終花の木かけにふしにけり。魂は陽に歸り。魂は陰にのこる。執心やくら。修羅の一念。さつて生田の名にしをへる。血は涿鹿の河となり。紅波楯を流しつ。白刃骨を碎く苦しみ。月をも日をも。手にとる影かや長夜の闇やみと眼もくらみ。こゝろも乱る。修羅道の苦しみ。御覽せよ。れやなくひに梅花の枝をさま。さも花やかに見え給へ。わ。いか成人にたまします。今は何をかつむへき。是は梶原平藏景時か嫡男に。源太景季。他生の縁の一樹の陰に。夢中の對面向顔をさす。御身たつき人なを。法味を得むと魄靈の。魂に移りて來りたり跡とひ給へどにはんとすれば。また噴黒の修羅の敵の責。あれ御覽せよ御ひしり。實々見れば恐しやつるきは雨どふりかいつて。雲にひいて地に動。山も震動。海もなり。雷火も乱れ。悪風の紅煙

の旗をさひかしくて。烟浮に歸る生田川の浪をた  
 て水を返し。山里海川も。皆修羅常の。巷と成ぬ。  
 こはいかに淺ましや。暫く心を静めてみれば。同  
 しはらく心を静めてみれば。所は生田也けり。時  
 も昔の春の梅の花さかりなり。一えた手折て  
 るひらにさせは。本より窺たる若武者に。相逢若木  
 の花かつら。かかれは。旅の花も源太も我先駈ん。さ  
 き駈んどの。このころの花も梅も。ちりかいつて面白や  
 上。敵のつはもの。是を見て。天晴かたきよ。逃すをどて八  
 騎か中に取こめらるれば。かふとも打おとされて。大  
 はらはのすかたとなつて。郎等三騎に後を合せ。向  
 ふ者をは。おかみ打。又めぐりあへは車切。蜘蛛か  
 く。細十文字。鶴翼飛行の秘術をつくすと見ゆつ  
 るうちに夢覺て。しらく。と夜も明れば。是迄ありや  
 旅人よ。暇申て花は根に。鳥はふる巢にかへる夢の鳥  
 は古巢に歸るを。能々とひてたひ給へ。

清經

下シテ「扱は佛神三寶も。捨果給ふと。ころほろく。て。  
 一門は氣を失ひ力を。おとして。足よは車のすこす

こと。還幸を。し。奉る。哀なりし。有様。か。り。ける。所  
 に。長門の國へ。敵向ふと。聞しか。は。又舟に。取乗て  
 つくとも。さく。押出す。心の中。う。哀なる。實や。世の中  
 の。うつる。夢。こ。ろ。誠。され。保元。の。春。の。花。永。壽。の。秋。の。も  
 みち。と。て。散。々。に。なり。浮。ふ。一。葉。の。舟。な。れ。や。や。さ。き。か  
 浦。の。秋。風。の。追。手。か。は。さ。る。跡。の。浪。し。ら。鷺。の。群。あ  
 る。松。み。れ。は。源。氏。の。旗。を。さ。ひ。か。す。多。勢。か。と。肝。を。け。す  
 爰。に。清。經。は。こ。ろ。に。こ。めて。思。ふ。や。う。去。に。て。も。八  
 幡。の。御。詫。宣。わ。ら。た。に。心。魂。に。の。こ。る。こ。と。は。り。ま。ま。と。正  
 直。の。か。う。へ。に。宿。り。給。ふ。か。と。唯。一。筋。に。思。ひ。と。り。上シテ

わち。き。な。や。迎。も。消。へ。露。の。身。を。猶。お。き。か。は。に。浮。草。の  
 さ。浪。に。誘。れ。舟。に。漂。ひ。て。いつ。ま。て。か。た。う。さ。め。を。水。鳥。の  
 沈。み。果。む。と。思。ひ。き。ま。う。人。に。は。い。は。て。岩。代。の。ま。は。と。あ  
 り。や。曉。の。月。に。う。ろ。ふ。く。氣。色。に。て。舟。の。へ。いた。に。立  
 か。い。り。中。腰。よ。り。や。う。て。う。ぬ。き。出。し。音。も。す。み。や。か。に  
 吹。な。ら。し。今。様。を。唄。ひ。朗。詠。し。越。方。行。未。を。か。い。み。て。終  
 には。何。時。か。あ。た。波。の。歸。ら。ぬ。は。古。へ。と。ま。ら。ぬ。は。心。盡。し  
 よ。此。世。と。も。旅。う。か。し。荒。思。ひ。残。さ。す。や。と。よ。う  
 め。に。は。を。た。ふ。る。狂。人。と。人。や。見。る。ら。ん。よし。人。は。何。と

も見るめをかりの夜の空。西にかたふく月を見を  
 はいさや我もつをむと。南無阿彌陀ふつみた如来の  
 かへさせ給へと。唯一聲を最期にぞ。舟よりかつは  
 と落盤のや。庶のみくほと沈み行ら身の果る悲し  
 き。「聞にこころも呉服とり。うき寝に沈む涙の雨の恨  
 めしかりける。契りかな。いふならく。奈落も同  
 し。うたかたの。哀は誰も。かはらざりけり。下キリ。扱。  
 修羅道におちこちの。同。たつきは。敵。雨は箭先。  
 士は清劔山は鉄城。雲の旗手をついて。憍慢の劔  
 を捕へ。邪見の眼の光。愛欲どの一通玄道場。無明も  
 法性も。乱る。敵。うつは。波引はうしは。西海  
 四海の因果を見せて。是迄なりや。まとは最期の十念  
 乱れぬ御法の舟に。頼みし儘に。船ひもなく。實も心は  
 清經か。實もこころは。清つねか。佛果を得し。ころ。有  
 かたけれ

經政

「しや雨にてはなかりけり。同。あれ御覽せよ雲のはの  
 上同。月にならひの岡の松のや葉風や吹落て。むら。雨  
 のことくに音信たり。面白や折からなとけり。大絃

はさうくとして。村雨のことし扱。小絃はせつ  
 ととして。さうめこと。こと。さうす。第一。第二の  
 絃は。素々として秋のかせ。松をばらつて。疎韻お  
 つ。第三。第四の絃は。冷々として衣の鶴の子を  
 おもつて。籠のうちにさく。には。とりも心して。夜遊の  
 はかれと。いめよ。上。一。聲の風管は。あき。秦嶺の雲  
 をうかかせは。鳳凰も。是に。花て。梧竹に。飛くたり  
 て。つ。は。さを。つらねて。舞遊へは。律呂の。聲を。は。こ  
 いる。壁には。つす。聲。あや。を。さす。事。も。む。かし。を。返。す  
 舞の。うて。衣。笠山。もち。の。う。り。さ。お。おも。しろ。の。夜。遊。や  
 あら。面白。の。夜。遊。や。上。同。あら。名。残。を。しの。夜。遊。や。さ。さ。り  
 「荒名こり。惜れ。夜遊。や。適々。閻浮。の。夜遊。にか。へ。つて。心  
 を。の。ふる。折。ふ。し。に。下。同。また。瞋。患。の。起。る。恨。め。し。や  
 上。上。さ。き。に。み。ぬ。つ。る。人。影。の。猶。顯。は。る。わ。つ。ね。政。か  
 荒愧かしや我姿。はや人々はにみゆるや。あのと  
 も。ま。火。を。け。し。給。へ。と。下。同。燈。火。を。脊。け。て。は。く。共。に  
 あ。は。れ。む。深。夜。の。月。を。も。手。に。と。る。や。帝。釋。し。ゆ。ら。の。の。  
 た。い。か。ひ。は。火。を。ち。ら。し。て。瞋。患。の。猛。火。は。雨。と。あ。つ。て。  
 身。に。か。い。れ。は。拂。ふ。つ。る。さ。は。他。を。ま。や。ま。し。我。と。身。を

さる。こうはわかへつて猛火となれば。身を焼苦思  
 恥かしや。人に見ゆし物を。あのももし火をけさむ  
 きて。其身は愚人夏の虫の火を消んと飛入て。嵐  
 と共に燈火を。あらしと共に。ともしひをふきけし  
 て暗紛れより。魄靈は失にけり。魄靈の影は失にけ  
 り。

教盛

然るに一門かどをあらへ。る。やう枝をつらぬし  
 粧ひ。まどに楳花一日の榮におなし。よきを勸る教に  
 は。あふこと難き石の火の。光りのまうと思はさり  
 し身のならばしころはかなけれ上は有てはしむをさや  
 まし。富ては驕りを。しらするなり。然るに平  
 家。世を取て二十餘年。誠に一むかしの過るは夢の  
 中あれや。壽永の秋の葉の。四方のあらしに誘れ散  
 々になる。一葉の舟にうき波にふして夢にたにもか  
 へらす。籠鳥の雲をこひ。歸馬連をみたるなる。空さ  
 ためなき旅衣。日も重りて年並の立かへる春の頃此  
 一の谷に籠りてしはしは爰にすまの浦。うしろの  
 山風吹おちて。野も冴かへる海きはに舟のよると

なく。晝どなき千鳥の聲も我うても波にしほる。磯  
 まくら。海士の苦やにともねして。須摩人にのみ  
 るなれ松の立るや夕煙。柴といふもの折敷て。思  
 ひをすまの山里の。かゝる所に住むして。須摩人を成  
 はつる一門の果る悲しき。扱も着更衣六日の夜にも  
 成しかは。親にて候經盛我らを集め。今様を唄ひ舞遊  
 ひしなり。倍は其夜の修遊ひなりけり城のうち  
 にも。さも面白き笛のねの。よせ手の陣まで聞えしは

夫社さしも教盛か最期迄持し笛竹の  
 とふしを唄ひあろふ。今様朗詠。聲々に。柏子を  
 揃へ聲をわけ。さる程に。舟をはきめ。打上  
 一門皆々我もくと船に泛はのりおくれしと。汀に  
 打よれば。修座船も兵船も遂に延給ふ。せむかた  
 浪に駒をひか。あきれ果たる。有様なり。か  
 りける處に。うしろより。熊谷の次郎直實  
 遁さしと追駈たり。教盛も馬ひつ返し。波の打  
 物扱て。打三打は打と見しか馬の上にて。  
 ひは組て。浪うち際に落重つて終に。うたれてうせし  
 身の因果は廻り會たり。敵は是を討んとするに。寇

を思にてはほらしの念佛して吊はるれば。終には共に生るへき同じ蓮の蓮生法師かたきにてはかりけり跡とふらひてたひ給へおと吊ひてたひ給へ

俊成忠則

「をよる歌には六義あり。是六道の巷に詠し。同。ちはや振神代の歌は。文字の數も定めなし。其後天照太神の謬このかみ。うさのをのみとよりう。三十一字に定め置て。末世未代の。しるへどかや。其故は素盞鳴尊の女とすみ給はんとて。出雲國にゐまして大宮作せし所に。八色雲のたつを。謬覽してみこと。の一首の謬詠かく斗。八。雲たつ出雲八重垣つまごめに。やへかきつくるうのやへかきをを神詠もかたしけなや今の世のためし成へし。倍も我須戸のうらに。旅寝して詠めやる。明石の浦の朝霧と。讀しも思ひしられたり。上人齋世に。くなりて。歌の事と。まりぬと。紀貫之もみつねもかくころ。書置しかとも。松の葉の散失す。まさきのうつら。なかくつたは。り鳥の跡あらん其程は。よもつきせし。敷島の。歌には神の納受の。男女夫婦の。媒とは此歌

の情なるへし。荒名殘をしの。夜すからやな。ふしきやみれば忠則の。けしきかはりて氣疎き有様。こは。ろもいかなる事やらむ。一あれ謬覽せよ修羅王の。梵

天に責のほるを。帝釋出わひ修羅王を。本の界におつ。くたす。すは敵陣は乱れわひ。かあめささけへは忠。則も。瞋恚のはのはは。わら磯れ。波の打。物ぬひて。切てかいは敵人は。鉾を揃へて。かへり給へは。忠則。わひ向つて打拂へは。うのま。見ぬ。す敵を失ひあき。れてたては。天よりは。火車降か。せ。抛よりは。鉄刀あ。しをつらぬき立もた。れすゐるも居られぬ。修羅王。のせめ。こはいかに。淺ましや。や。有てさ。波。や。志賀の都は。あれあしをむかしなからの。山櫻か。梵。天感し。給ひしより。劔の責のまぬ。かれて。暗闇となりしか。は。ひを背けては。どもに憐む深夜の月。花をふむては。ほしく。惜む少年。の春の夜も。はやしらく。と。明わたれば。有つる。姿。は消々。有つるすかたは。け。いらうのやま。かく。れて。失にけり跡。かくれてうせにけり。

生田敦盛

下シテ「扱も身孝行のこゝろ深きゆへ。加茂の明神に歩  
 みをはこひ。夢にちりとも我父の。姿を見せてたひ給  
 へど祈誓申す。明神憐みおはしまし。焔王に仰つかは  
 さる。焔王仰を承りしはしの暇を給はるなぞ。親  
 子の契りも今を限り成へし。」下歌同「ふけ行月のよもすから  
 むかしをいさや語らん。」下クセ「さしかるに平家の。榮花を極  
 し其はしめ。花鳥風月のたはふれ詩歌管絃のさま  
 く。に春秋を送り迎へしに。いかなる折かきたりけん  
 木曾のかけとし越てたにおもはぬ敵におとさ  
 れて。主上を始め奉り一門の人もことごとく。  
 花の都を立出西海のうらに趣きぬ。おらはぬ旅の道す  
 から山を越海を渡りしはは天さかる。鄙の住の  
 の身ありしに。又立歸るうら波の須戸の山路や。  
 一の谷生田の森に着しかは。爰はみやこも程近  
 まど。一門の人々もよろこひをなし折節に。上シテ「範  
 より義經の其勢。雲や霞のことくにて。暫くたしか  
 ふと。共平家は運もつよ引れやたけ心もよわ  
 く。皆散々に成はて。哀も深き生田川の。身  
 を捨し物語。かたるもよしあかりける。」下シテ「られしや

か。夢のちきりの假初なから。親子あふむの袖ふれ  
上同「名残つきせぬ。心か。」引シテ「われに見えたるを  
 いかなるものろ。何焔魔宮よりの使とや。片時のい  
 とまを給られしに。今迄の遊参心得すと。焔王いから  
 せ給ふろ。」上同「いふかど見れとふしきやな。く。黒  
 雲にはかに立來り。猛火を放し劍をふらして。うらの  
 敷しらする修羅の敵。天地をひかし満々たり。下  
 物々し明暮にや馴つる修羅のかたきろかしと。太刀眞  
 かうにさしかさま。爰やかしこに走廻り。火花を散  
 して戦ひしかしはらく有て黒雲も次第に立さり修羅  
 の敵もたちまちに消失て。月澄わたりて明々たる  
 わかつきのうらとら成たりける。」下シテ「愧かしや子なか  
 らも。かく苦しみを見る事よ。いろを歸りてあき  
 跡をねんころにをてたひ給へど。かく。袂を引  
 わかれ。たちさるすかたは蜻蛉の。小野の淺茅の  
 露霜どかたはさぬて。うせにけり。」

實盛

上シテ「洗はせて伊覽候へど。申も敢す首を持。」下同「修前  
 を立てあたまある。此池浪の岸に臨みて。水のみどり

も陰うつる柳の糸の枝たれて、<sup>上歌</sup>氣はれては風新柳の髪を振り、氷消ては。波舊昔の髪を洗ひて見れば、如墨は流れおちて本の。白髪と成にけり。實名を惜む弓取は。誰もかくこり有へけれや。荒やさしやとて皆感涙を流しける。又實盛か。錦の直垂を着る事わたくし。あらぬ望也。實盛都を出し時、宗盛公に申様。古郷へは錦をきて。かへるといへる本文あり。實盛生國は越前の者にて、いひしか。近年。此たひ北國に。罷り下りて候は。定先て討死仕るへし。老後の思ひ出是に過し。涉免われど望しかは。赤地の錦の直垂を下し給りぬ。然れば古歌にも紅葉はを。分つゆきは錦着て。家にかへると。人や見るらんと詠しも。此本文の心あり。されは古しへの。朱買臣はにしきの袂を會稽山にひるかへし。今の實盛は名を北國の街にわけかき。なかりし弓執の名は。未代に有明の月の夜すから。懺悔物語。申さん。上ロキ地。實や懺悔の物語。こころの水の底清く濁りを残したまふ。よ。其執心の修羅の

業。廻りく。又爰に。木曾と組んとたくみしを。手塚めに隔てら。し無念は今にあり。上地。つづく。兵誰々ど。名の中にも先すいひ。手塚の太郎光盛。地。郎等は主を討せし。かけ隔りて實盛と。押ならへて組處を。あつはれをのれは。日本一の剛の者と。軍諍すよとて。鞍の。前輪にをし付て。首かき切て。捨てけり。其後手塚の太郎。實盛か弓手に廻りて。草摺をた。み上て。二かたな指處をむす。と組て。二疋は。あひに。とうと落けるか。老武者の悲しさ。は。軍には。しつかれたり。風にも。枯木の。ちかちかも折て。手塚か下になるところを。郎等は。落合て。終に首をはかき落されて。篠原の土と成て。影も。かたちも。跡の。影も。貌も。南無阿彌陀佛。吊らひて。たひ給へ。跡吊らひて。たひ給へ。

錦木

申つるたには。かりあるに。猶もむかしをあらはせとの。御僧の仰に。隨て。織細布やにしき。の。千度。百夜をふる。とて。此執心は。よも盡し。然れども。今逢かたき。縁によりて。妙なる。一乘妙典の。功力を。

んぞ懺悔のすかた。夢中に猶も。顯すなり。カセ、  
 とは錦木を運へは女は内に細布の。機をるむしの音  
 にたて、問迄ころなれども。またかひに内外に有  
 るとは。知れしらる。中垣の。草の戸さしは其儘  
 にて。夜は既に明けはす。くと立歸りぬ。去は  
 どに思ひの數も積りきて。錦木はいろ朽てさなから  
 苔に埋れ木の。人しれぬ身あらはかくて思ひも留るへ  
 きに。錦木は朽を共。名はたちろひて逢事は。おみ  
 たも色にいてけるかや。戀の染木ども。此錦木をよ  
 みしあり。上シテ。おもひきや。楊のはし。かきのきつめて  
 同。百夜も同じ九寐せん。と。讀したに有物を。責てはひ  
 どせ待のみか。ふたとせ。餘り有く。ては。陸奥のけふ  
 迄も。年くれあるの錦木は。千度に。あれば。いたつら  
 に。我も。門邊に。立をり。錦木と。共に。朽ぬへき。袖  
 の。おみたの。たまさかにも。などや。見み。ぬ給はぬ。ろ。ッ  
 借いつか。三年は。みちぬ。荒つれ。あつれ。なや。一にしき  
 いは。上シテ。千束に。成ぬ。今。社わ。一人に。しられぬ。里の中  
 見ぬ。下シテ。嬉しや。な。今宵。あふむ。の。さかつきの。雪を  
 廻らす。舞の。袖か。あ。く。下シテ。舞を。まひ。舞を

まひ。歌を。唄ふ。も。妹背の。あか。た。ち。た。つ。る。は。に。し。き。  
 下シテ。一。織は。細布の。打。上。と。り。く。さ。ま。く。の。夜。遊。の。盃  
 に。移。り。て。有。明。の。影。は。つ。か。し。や。く。あ。さ。ま。に。や。成。お  
 ん。覺。ぬ。さ。ら。こ。ろ。夢。人。なる。もの。さ。め。あ。は。錦。木。も  
 細。布。も。夢。も。破。れ。て。松。風。さ。つ。く。た。る。あ。した。の。原。  
 野。中。の。墳。ど。ろ。成。に。ける

松 虫

あ。した。に。落。花。を。踏。て。あ。ひ。伴。つ。て。い。つ。夕。へ。に。は。飛  
 鳥。に。した。か。つ。て。一。時。に。歸。る。下シテ。然。れ。は。花。鳥。遊。樂。の。瓊  
 筵。同。風。月。の。友。に。誘。れ。て。春。の。山。邊。や。秋。の。野。の。草。葉。に  
 か。た。く。虫。迄。も。き。け。は。心。の。友。あ。ら。す。や。引。中。ク。セ。一。樹  
 の。陰。の。宿。り。も。他。生。の。縁。を。聞。物。を。一。河。の。な。か。れ。汲。て  
 する。其。心。淺。か。ら。め。や。奥。山。の。深。谷。の。した。の。菊。の。水。  
 く。め。ども。汲。ども。よ。も。つ。さ。し。流。水。の。さ。か。ほ。き。は。手  
 先。さ。み。さ。れ。る。こ。ろ。なり。され。は。廬。山。の。い。にし。へ。虎  
 溪。を。さ。ら。ぬ。室。の。戸。の。其。戒。を。破。り。し。も。志。し。を。淺  
 から。ぬ。思。ひ。の。露。の。玉。水。の。景。迹。を。出。し。道。と。か。や。上シテ  
 ろ。れ。は。賢。さい。にし。へ。の。世。も。た。け。こ。ろ。さ。えて。道  
 あり。友。人。の。數。々。積。善。の。餘。慶。家。々。に。普。く。ひろ。き。道



と、か、や、の、今、は、濁世の人間こそにつたなき我々に  
 て、こゝろもうつらふや菊をたへ竹葉の世は皆  
 る、りさらは我ひとり醒もせて。萬木皆紅葉せり  
 只、松むしの獨り寝に友をまぢ醉をなして舞かれ  
 て遊はん、さかつきの、雪を廻らす花の袖、  
 面しろや。千種にすたく。虫の音の、はたをる音  
 は、はたりちようきりはたりちようつ  
 りさせてふきりくす蟬脱。色々のいろ音の中に  
 わきてわかしのふ松むまの、聲りんりんく  
 して。夜のこのめい、たり打上すは、離波の、鍾も  
 明方の。あさまにも成ぬへし。さらはよ友人名残のう  
 てを。まねく尾花のはのかにみぬし。跡絶て。草花  
 々たる朝の原の。くさはうくたるあしたのはらむ  
 しの音はかりやの、こるらん虫のねはかりや、残るら  
 む

蘆刈

「あるは男山のむかしをわもひ出下。女郎花の一時  
 をくねるといへども。いひ慰る言のはの。露もたは  
 に秋萩の。もとの契りの消かへりつれなかりけるい  
 の

ち、か、ち、上、は、は、か、は、ど、に、衰、へ、て、身、を、は、つ、か、し、の  
 杜、あ、れ、ど、も、言、葉、の、花、こ、う、た、よ、り、あ、れ、  
 に、咲、や、こ、の、花、冬、籠、り、今、は、春、へ、と、さ、く、や、こ、の、は、な、ど、  
 さ、か、ね、給、ひ、け、る、仁、徳、天、皇、と、開、ぬ、さ、せ、給、ひ、し、は、難、波  
 の、御、子、の、御、事、又、淺、香、山、の、こ、の、は、采、女、の、盃、  
 取、取、ぬ、恨、を、述、去、故、を、か、や、こ、の、二、歌、は、今、ま、て、の、歌  
 の、父、母、成、故、に、世、々、に、あ、ま、ね、き、花、色、の、こ、の、葉  
 草、の、種、ど、り、て、我、等、こ、の、手、習、ふ、初、め、成、へ、し、然、  
 れ、は、め、に、み、ぬ、ぬ、鬼、神、を、も、和、ら、け、物、部、の、こ、ろ、を、く  
 さ、む、る、夫、婦、の、情、し、る、事、も、い、ま、身、の、上、に、し、ら、れ、た  
 り、津、の、國、の、な、に、は、の、春、は、夢、さ、れ、や、蘆、の、枯、葉、に  
 風、わ、た、る、波、の、立、居、の、ひ、ま、と、も、淺、か、る、へ、し、や、わ  
 た、つ、み、の、濱、の、真、砂、は、よ、み、つ、く、し、盡、す、其、此、道  
 は、つ、き、せ、め、や、唯、も、て、遊、へ、名、に、し、負、な、に、は、の、う、ら  
 み、打、忘、れ、て、有、し、契、ま、に、歸、り、あ、ふ、縁、社、婚、し、か、ど、け  
 れ、今、は、恨、も、波、の、う、へ、立、舞、袖、の、か、さ、し、か  
 り、上、キ、リ、難、波、江、の、  
 を、越、る、し、ら、涙、の、月、も、の、こ、り、花、も、さ、か、り、に、津、の、國  
 の、こ、や、の、す、ま、る、の、冬、籠、り、今、は、春、邊、と、都、の、空、に、伴

ひ行や大伴の。みつの浦邊のみつゝを契りに。歸る事こそ嬉しけれ

小督

「たどへをしるも數ならぬ。身には及ばぬ事あれ共。殊背の道は隔なき。彼漢王の其むかし甘泉殿のよるの思ひたぬぬ心や胸の火の煙に残る面影も一見しは程なきあはれの色。中々なりし。契りかな。唐帝のいにしへも。驪山宮の私語もさし初光を尋るに。あたる露の淺芽生や袖に朽にし秋の霜。忘れぬ夢を問わらしの。風のつてまで身にしめる心成けり。人の國迄訪ひの。あはれをしきは常ならてなき世を思ひのかすく。に。餘りわりなき戀心身をくたさてもさやましの。戀慕のみたれなるとかや。是はさすかに同じ世の頼みも有明の月の宮古の外までも。敬應にかゝる御恵みいとも賢き勅おれば宿はと問れてさしとはいかし答へん。是迄あれやさらはとて。直の御返事給はり御暇申立出る。月にとふ宿りは假の露の世に。是やかきりの御使と思ひての名残ろとしたひて落る涙かお。なみ

たもよしや星合の。今は稀なる中ありと。終にあふ瀬は。ほとあらしの迎への舟車のやりてころ参らめと。へと名残のころとて。酒宴をなして糸竹の。こゑ澄わたる。月夜か。月夜よし。木枯に。吹あはすめる。笛の音を引上爪付ひきこむ。言のはもなし。言のはもなし。の葉もなき君は御悪。我らか身迄も物思ひに。立まふべくもあらぬ。今。は歸りてうれしさを。何についまん唐衣ゆたかに袖打合せ御いと申や急ぐ心も勇める駒に。ゆらりと打乗歸る姿のあどはる。小督は見をくり仲國は都とてころ。かへりけれ

盛久

「しがるに我此光陰を頼み。日夜朝暮に怠らす。彼御經を修讀せしに。取わき此時節刑戮にちかき身と思つて。片時怠る事もなく。初夜より後夜の一点まで。蕭然として座したりしに。六窓いまた明ざるに。耿然たる一天虛明なるうちに思はずも八旬にたけ給ひぬと見えさせ給ふ老僧の香染の袈裟をか

水品の數珠をつまくり。鳩の杖にすかりつゝ妙  
 もんたいしき御聲にて。我は洛陽東山。清水の  
 わたりより汝が爲に來りたり。本より大慈大悲の誓願  
 などか空しからん。唯一音なりども。我を念する  
 時節の有難の災はのかるへし。いはんや汝年月  
 多年のまことを拙ひて。發心人にとれたりの心易く  
 思ふへし我汝か命にかはるへしと宣ひて夢はすおは  
 ち覺にけり。盛久とく。思ひて觀喜のこころかきりな  
 し。頼朝是をきこし召。此曉の御夢相も。同  
 し告るとあらたある御信威は限りなし。其時盛久  
 は。夢の覺たる心ちして。感涙をどめかね御前をまか  
 り立ければ。如何に盛久しはしとて。御簾をあけて召  
 るれわ。せんたもなき盛久か。のちは千秋萬  
 成の春をいはふと。御さかつきを下さるれば。  
 種は千世と菊のさけ。一花をうけたる。袂かな。  
 有難し。得かたきは時去難きは貴命なり盛久か。  
 る時節に逢事。世もつて類ひあるへからず。おこり  
 ちひく時をれや。一天四海のうちのみか。人の國迄  
 日の本の。もちしかはらも。このとこに打上酒宴

なかはの春の興。曇らぬ日影のそかに。君を  
 祝ふ千秋のつるか岡の松。の葉のちりり失すして  
 正木のかつら。長居は恐をあり。なのは恐れあ  
 りとまかり申つかまつり。退出しける盛久か。こころ  
 のうちうゆしきく

春 榮

十二因縁より二十五有の沉輪。生しては死し  
 死しては生し。流轉にめぐると生々の親子皆もつて誰  
 か又自他ならん。然れば羊鹿牛車に乗。火宅のさ  
 かひを出すして。煩惱業苦のみつの網に繋れ來ぬ。  
 はかきよ。夫。生死に流轉して。人間界に生る  
 れは。八つのくるしみ離れず過去因果經をおもん見よ  
 殺の報殺のねんたどへは車輪のことし。我人を失  
 へは。か。世々生涯苦しみの海に  
 うき沈みて。御法の舟橋を渡りもせぬる悲しき。殊  
 更此國は神國といひなから。又は佛法流布の時。敢  
 へれば法もさうむまり。に所はあつまた。佛法東  
 街にあり。有明の月の。僅か成人界いろひて來迎  
 の夜念佛聲。清光に彌陀の國の。すしき道ならば唯

心の浄土成へし<sup>上シテ</sup>所<sup>ヲ</sup>を思ふも頼もしや<sup>同</sup>爰は  
あつま路の。古郷を去て伊豆のころ<sup>ナ</sup>南無や三嶋れ  
明神。本地大通智勝佛過去塵点のとくにて<sup>ナ</sup>黄泉  
中有の旅の空。長閻冥の巷迄も我等を照去給へど<sup>上</sup>深  
く<sup>ク</sup>所警申ける雪のふるぬの枯てたにふたひ花や  
咲ぬらん<sup>上</sup>「けうは殊更最上吉日なれば。高橋か家に  
傳はる重大の太刀。春榮殿に奉り。重て千秋万歳の<sup>上</sup>  
猶よろこひの盃の。影も廻るや朝日影<sup>ナ</sup>伊豆の三  
嶋の神風もふき治むへき代のはしめ幾久しきとも  
限らしや<sup>ナ</sup>嘉辰。今月とは此時をいふうめてたき<sup>上</sup>猶  
々廻る盃の。度重なれば春榮も。お抄に立て親と子  
の。定めをいはふ祝言の<sup>ナ</sup>千秋万歳の舞の袖。蹴し  
まふどかや<sup>上</sup>「千代にやちよをさしれ石の<sup>上</sup>祝ふ心  
は萬歳樂<sup>上</sup>「東路の。ちよの山の。松の葉の<sup>上</sup>  
打上<sup>ナ</sup>千代の陰うふ若みどりかな<sup>上</sup>わかみどりかあ  
<sup>上</sup>「若木も若みどり<sup>下</sup>「立やわか竹の<sup>下</sup>  
親子のちきり<sup>上</sup>又は兄弟彼といひ是と云いつれも  
むつましく。親子兄弟の榮ふる事も。これ孝行  
を守り給ふ。三嶋の宮の御利生とふし拜み。おや子

兄弟さむむつましくうちつれて。鎌倉へこり参  
りけれ

安宅

「實や現在の果を見て過去未來をしると云事。今に  
知れて身の上。うき年月の二月や。下の十日のけ  
ふの難を遁れつるころふしきされ<sup>下</sup>「唯さながら  
に十余人。夢の覺たる心ちして。樂ひに面を合せつ  
い。泣はかりある。有様か<sup>上</sup>然るによしつね。弓  
馬の家に生れきて<sup>ナ</sup>命を頼朝に奉り<sup>ナ</sup>かはねを西  
海の浪にしつめ<sup>ナ</sup>山野海岸に起ふしあかず武士の<sup>ナ</sup>  
鎧の。ろてまくらかたしく際も波の上。ある時は舟  
にうかひ風波に身を任せ或時は山脊の馬蹄も見ぬ  
雪の中に<sup>ナ</sup>海すこしある夕浪の立くるをどや須磨の  
かしの<sup>ナ</sup>かく三年の程もなく。敵をはるはしあ  
ひく世の。其忠勤もいたつらに<sup>ナ</sup>ありはつるこの身  
のうもさにといへる因果や<sup>上</sup>「實や思ふ事。叶はね  
はころうき世なれど<sup>上</sup>しれどもさすか猶。おもひかへ  
せば梓弓の<sup>ナ</sup>直なる人は苦しみて讒臣はいやまし  
の世に有て。遠東南の雲を起し<sup>ナ</sup>西北の雪霜

責られ埋る憂身を。とわり給ふへきあるに唯  
 世には神も佛もましきまぬかや恨めしの浮世や荒  
 らちめしのうきよや。實々是も心得たり。人の情の  
 盃に。うけてこころをどらんや。是につけても人々  
 上。心ちくくれろくれはと。あやしめらるる面々  
 と辨慶に諫められて。此山陰の人やどりに。さうり  
 と圓居して。所も山路の菊の酒を香ふよ。おも  
 しうや山水に。さかつきをうかへては。流にひ  
 かる。曲水の手まつ。へきる袖ふれて。いさや舞  
 をまはふよ。本來辨慶は。三塔の遊僧。まひ延年の  
 時の和歌。是成山水の。落て。巖にひくころ  
 なるは。たきの水。上。なるは。瀧のみつ。打上日は照と  
 も。絶すと。うたり絶すと。うたりと。くたてや。つか  
 弓の。心ゆるす。關守の人々。暇申て。さらはよと  
 て。笈をおつ。取肩に打かけ。虎の尾をふみ。毒蛇の口を  
 のかきたる。心ちして。むつの國へ。くたりける。

元服會我

實や人のをやの迷ふ事。誠の關にはあらねども。同  
 子を思ふ道にはたどると云と。雲井の鶴は月影のさや

けさ空と思へども。夫も子をのみ思ひの關に。聲をか  
 はして鳴とかや。我々は又親の跡に。残りて物を  
 思ひの露の。雨ともふり涙ともす。つかは晴む心  
 の關の。名をや埋まん。苦の下。くつるはうき世  
 引。ならひなる。龍門原上の土に。身は成ども。  
 屍の跡を思へたい。おしみて。惜むへきは。こうめい  
 のあさけり。されは。大國に。千里をかくる。虎は。一毛  
 を惜んで。吹來る風を。含みて。其身をかへて。死すとかや。や  
 日本。の弓。取は。其名を。未代の家におしめ。一命を  
 輕んずるも。これ皆めいけい。に。本文を。思ふこころ。なり  
 身は。一代名は。未代。理りや。世の中は。電光朝露。石の火  
 のあるにも。あらね草の露。消るさかひは。夢を。れや。  
 今の我等。か有様を。思ふも。うき命の。惜からぬ。身な  
 れども。本望を。とくる。途を。たのむ。たよりや。兄弟  
 主従。去に。すこ。と。髪を。はやして。祝言の。どの  
 は。うふる。は。つ元結。行衛は。めて。たかる。へしや。おや。孝  
 行も。かく。斗。さ。こそ。草の。陰に。われら。を守り。給ふら  
 ん。元服祝は。んど。別當に。傳はる。重代の。太  
 刀。伊豆。權現。の。力を。うへ。思ふ。本望。遂給へ。と。箱王

殿に奉り<sup>上同</sup> やかて祝ひの御酒ひとつ。すいめ申せや人々を。同じく共にまどむし酒宴を社ははしめけれ<sup>上シテ</sup>。「さく頃れ。梢時めく折に來て<sup>上地</sup>。一糸はし櫻の花を見舞<sup>引上シテ</sup>。菊の名の。曾我のむかまの。秋のくれ打上灰付よろつ代いはふこころあれ<sup>引上シテ</sup>。心言葉は人の情<sup>地</sup>。いたつらに朽ぬる身はおしむへし名はのこりある代の。跡の世かたり。夢ならは覺なんらつ。どもしらま月。ひきはか<sup>上シテ</sup>。さきはかへさし富士の高根にかちらす名をわけて。あとの世かたり。どおほしめさるへし。これこころ名こりの酒宴のたはふれ。是こころ名こりの酒宴のたはふれ。師弟のなざけろ有難き。

七騎落

下シテ 嬉しなきの涙は。おにかつ。まん唐衣。日も夕暮にちりぬれば。月のをかつきどり。主従共に悦びの<sup>上地</sup>。心うれしき。酒宴かな<sup>引上キリ</sup>。かくて時日をめぐらす。西國のつはものはせ。参すれば。ほとなく御勢二十萬騎に成給ひつ。たなこころにて治め給へる此君の御代の。めてたき例。

しも實平正しき忠勤の道に在る實平正しきちうさんのみちに在る弓矢の家こころ久しけれ

護法

もとは摩伽陀國のあるしとして。御代を治め國家を守り。大悲の海ふかうして。萬民無縁の御影をうけて。日月の波しつかなり。まかりとは申せとも。猶も和光の御結縁。あまねきあめのわし引の。やまとしまねに移りまして。此秋津國どなし給ふ。所は紀の國や。むろの郡に宮るして。行人征馬のあゆみをはこふ心さし。直なる道と成しより。四海なみ静にて。八天塵おさまれり。中にも本宮や澄誠殿を申は。本地彌陀にてまします。十方界に恭現して光を遍さ御誓ひ頼むへし。やちほどもはるけき陸奥の。ひかの國のおくよりも。南のはてに歩みして。終には西方の。靈になどか座せさらん。大悲擁護の霞は。熊野山の嶺に棚ひさ。靈。無雙の神明はおどかし川の河風の。聲は万成か峯の松の。千とせの坂既に。むろちに。至る陸奥の。名取の老女かくはかり。受られ申神慮。けに信われは徳ありや。有かた

しありかたきつけろめてたかりける。上シテかん、い、て、く、  
 臨時の幣帛をさしつけ。神慮をすししめ申さんと。一、あ、  
 まの羽袖や白木綿はあ。シテ、神前に捧げ諸共に。謹上再、  
 拜。仰願くはさをしかの。はつこの御耳をふり立て。  
 利生の翅をならへ。苦界のうらに翔りて。一天泰平、  
 國土安全諸人快樂。福壽圓滿れめくみを遍くほどこ、  
 し給へや。南無三所權現護法善神。上シテかん、打上、ふしき、  
 やる老女か捧るへいはくの上。けしたる人の虚空に、  
 かけり。老女かかうへをなて給ふは。如何ある人にて、  
 まします。事もおろかや權現の御使護法善神よ。シテ、  
 「なに權現の御つかひ護法善神とや」中くのこと。シテ、  
 「有難や。まのあたり成御さうかう」神はきねか習ひ、  
 をうけ、人神の徳をしるへとして。上地、まゐり、  
 のたうには「むかひこはうのせんたちどな」倍又下、  
 向の道にかへれば「國々迄も。おくりこはうの。打上、  
 さいなんを去つ、惡魔をおふをくり迎ひの。こはう、  
 善神あり打上。夫我國は小國也と申せ共。く、太神光、  
 を指ふ。ろし給ふおろのはこのしたりに大。片地、日、  
 の文字と顯れ給ひしよ。大日の本。國と號して

胎、金、兩部の密教たり。下ツレ、然るに本よりも。日、  
 本第一たいりやうけんゆや三所。權現と顯れて衆生、  
 濟度の方便をたくはへて。發身の門を出て。いは、  
 た川の波をわけて。煩惱のわかす。けは水のまに、  
 く。道をつけて。あやうさかけちの苦をはしれはし、  
 たにも行や。あし早船の。波のうらかみなれ。掉、  
 下れはさし上れば引つ。あても三葉柏にかく神託の、  
 道は遠し。年は古ぬる名取の老女か。子孫に至るまで、  
 二世の願望三世の所望。みなことく。願成就の。神、  
 託あらたに告しらせて神託あらたに告しらせて護法は、  
 わからせ給ひけり。

是界

シテ、外には忿怒の相を現すといへども。内心慈悲の御、  
 惡み。凝然不動の理を顯はし。但住衆生心想之中實、  
 有難き。悲願か。あ。さしかりとはいへ共。輪廻の道を、  
 去やうて。魔境に沉む其歎き。おもむしらすやわれを、  
 からず。過去遠々の間に。さすか見佛開法の。其結、  
 縁の功によと。三惡道を出なから。猶も鬼畜の身を、  
 かりて。いと。佛敵法敵となせる悲しきよ。今此事、

をなげかすわ未 氷永々をふるどても。いつか  
 若の智水を得て、火生三味の烟をのればは、  
 「世中は。夢が現かうつゝとも。夢共いさやしら雲  
 のかかいる迷ひをひるかへし、歸服せんとは思はず  
 して。いよく我慢の辨矛の。なひきもやらていた  
 つらに行者の床をうかいひて、降魔の利劍を待てるは  
 かあかりけれ。かくては時刻うつりなむ。さ  
 もろ共に立出て比叡の山邊のしるへせん。法のた  
 め、今う愛宕の山の名に。頼みをかけて思ひたつ雲れ  
 かけはし打渡り。一我名や余所に高雄山。ひかしをみ  
 れは大比叡や。横河の杉の梢より、南につく。如意  
 か嶽わしのお山の。雲や霞もあらしと共に、失にけり  
 「勅をうけ。我立袖を出なから。急ぐも  
 同し名と高き。大内山の。みちあらん。打上かくてや  
 うく大比叡を。おろつゝ行はふしきやま。われに見  
 わたる山の端の。梢の嵐吹まはり。雲と成雨  
 とある。山河草木震動し。天にかいやくいなひあり  
 大地にひくいかつちは。きも魂をくらまかす。て  
 はうも何の。故やらんく。是は。大唐

の天狗の首領善界房とは我事也。荒物々しや如何に  
 御房。今更何の觀念をかあせる。夫若作障碍即有。一  
 佛。魔境を説り。あらし痛はしや。欲界の。うちにな  
 る。遣は。悟りの道や其まに。魔道のちまたと。な  
 りぬらん。打上ふしきや雲の。うちより。邪法  
 を唱ふる。聲すな本より魔佛。一如にして。凡聖不  
 二なり。自性清淨天然うきなき是を不動と。名付た  
 り。打上聽我説者得大智慮。うんたらたかんまむ。打上  
 其時御聲のしたより。明王あらはれ出給へ  
 は。狩迦羅制多伽十二天。各々降魔の力を合せて。み  
 さまを拂つて。おはします。打上明王諸天は。扱おき  
 下。東風吹風。にひかしをみれば。山王權現  
 「南に男やま。西に松の尾北野や加茂の。神かせ松風  
 吹はらへは。さまむに飛行の翅も地に落ちからもつ  
 きゆみの八嶋の浪の。立さると見みしか又飛來り。去  
 にも。加程にたへ成。佛力神力今より後は。來る  
 ましと。いふ聲はかりは虚空にのこり。いふこゑはか  
 り虚空に残つて。姿は雲路に入にけり

野守



「<sup>上</sup>ワキ<sup>上</sup>」かゝる奇特にあふ事も。是行徳の故なりと。思ふていろを便めて。鬼神の住ける塚の前にて。肝膽をくたき祈けり。我年行の功をつめる。其法力の具あらは。鬼神の明鏡あらはして。我に奇特を見せ給へや。南無歸依佛。有難や。天地を動かし鬼神を感せしめ。土砂山河草木も。佛成道の法味にひかれて。打上鬼神に横道憂りもなき野守のかゝ見は。顯はれたり。打上<sup>上</sup>ワキ<sup>上</sup>。おろろしやうちひかゝやく鏡の面に。うつる鬼神の眼のひかり。おもてをむくへきやううなき<sup>上</sup>テ<sup>上</sup>。恐れ給はし歸らんと。鬼神は塚に入んとすれば。暫く鬼神待給へ。夜はまた深き後夜のかね。時はとらふす野守のかゝみ。法味にうつり給へとて。かさねて珠數を。れしもんで。台額の雲をしのみ。年行の功を積と一千余箇。日しはしは身命をれしすさいくは。きほすいに障をぬす。一こんからせいたり。三にくりのら七八大金剛章子。東方。打上<sup>上</sup>東<sup>上</sup>方。降三世明王も此鏡にうつり<sup>上</sup>地。又は南西北方を寫せは。八面玲瓏と明らかに<sup>上</sup>地。天を寫せは。ひさうひさうてん迄隈なく。扱

又大地をかゝみ見れば。下<sup>下</sup>テ<sup>下</sup>。地獄道。先は地獄の有様をあらはす。一面八丈の。しよはりの鏡となつて。罪の輕重罪人のかしやく。擲や鉄杖の數々悉く見ゆたり扱ころ鬼神に横道をたす。明鏡のたからなれ。すこや地獄にかへるうとて大地をかつはどふみあらし。大地をかつはどふみやふつてあらくのうこあろ入にける

鵜飼

「しめる。續松より立て。藤の衣の玉たすき。鵜籠をひらき取出。しまつすおろしあら鵜ども。此河浪に。はつと。放せは。面白の有様や。底にも見ゆる箭火に。おそろく魚を追まはし。かつき。上すくひあけ。障なく魚を喰時は。罪も報も後の世も忘れはて。おもしろや。濁る水の淀ならは。いけすの鯉や上らしたま嶋川にあらねとも。小鮎さはしるせいら木にかたみて魚はよもためし。ふしきやなかり火の。燃ても影のくらくなるは。思ひ出たり。月になりぬる悲しさよ。鵜舟のかゝり影をて。開路に歸る。此身の名殘惜さをいかにせんく。河

瀬の石をひろひ上。妙成法の御經を、一石に一字書けて。波間に沈め、吊らはし。さどかはうかまざるへき。夫地獄遠きにあらず。眼前の境界悪鬼外になし。抑かの者。若年の昔より。江河に流つて其罪おひたし。されは鉄札數を盡し。金紙をよこす事もなく無間の底に墮罪すへかつしを一僧一宿の功力に引れ。急き佛所にをくらんと。鵜船をくせいのみねになし。法花の御法の助け舟。かゝり火も浮ふ。けしきか。迷ひの多きさうき雲は。實相の風荒く咲て。千里か外も雲晴て。真如の月や出ぬらん。打上。有難の御事や奈落に沈む悪人を。佛所に送る給ふなる。其瑞相のあらたさよ。法花は利益深きゆへ。魔道に沈む群類を。すくはん爲に來りたり。實有難き誓ひかな。妙の一字は扱ひかに。夫はほろひのことはにて。妙なる法と説れたり。經とはおどはなつくらん。うれ聖教のどめいにて。二三つもさく。唯一葉の徳によりて。奈落に沈み果て浮ひ難き悪人の。佛果を得ん事は此經のちからならずや。是を見かきを聞時は。たとひ悪人

成とも。慈悲の心を先として。僧依を供養するをあらは。其結縁に引れつ。佛果菩提に至るへし。實往來の利益ころ。他を助くへきちからあれ。

女郎花

一夜臥男鹿の角のつかの草。陰よりみねし亡魂を。吊らふ法の聲立て。南無幽靈出離生死頓証菩提。あふ廣野人稀あり。我古墳あらて又何者。骸を争ふ猛獸は。禁するにあたはず。あつかしや。さけはむしの秋の風。うら紫か葛の葉のかへらはつれよ。妹背の波。打上消にしたまの女郎花。花の夫婦は顯れたり荒有難の御法やな。打上影のとくに亡魂の。顯を給ふしきよ。童は都に住し者。彼頼風に契りをこめしに。少契りのさはりある。人まを誠と思ひけるか。女ころのはかなさは都を獨りわくかれ出て。猶も恨みの思ひ深き。放生川に身を投る。頼風是を開けて。驚き騒ぎ行みれば。あへなき死骸はかりあり。なくく死骸を取上て此山本の土中にこめしに。其墳より女郎花一本生出たり。頼風ころに思ふ様。扱は我妻の。をみかへ

しに成けるよど。猶花色もあつかしく。草のたもとも我袖も。露ふれ初て立よれば。此花恨みたるけしきにて。夫のよれば靡きのき。又立のけはもとのとし下同。爰によつて貫之も。男山のむかしを思つて女郎花の一時を。くねると書し水菫の跡の世までもなつかしや。頼風うの時に。彼哀さを思ひどり。無慙やな我故に。よしなき水の泡と消ていたはらある身とあるもひとへに我科うかし。かしく。浮世にすまぬ迄をおかしみちにあらんとて。上テ。ついで此河に身を投て。さどもに土中おこせしより。女塚に對して又男山と申也。其墳はこれ主は我まほろしなから來たり。あど。吊ひてたひ給へ。あら。閻浮同。戀しや。上キリ。打上邪淫の悪鬼は身を賣て。其念力の道もさかしさつるきの山の。上に悲しき人は見たり。嬉しやとて。行上れば。つるきは身を返し磐石は骨をくたくこはるも。いかにおろろしや。つるきのえたのたわむまて如何成罪の。あれる果ろやよしなりのりける。花の一時を。くねるも夢ろ女郎花。露のうてなや花の縁に。うかへてたひ給へ。罪を浮へてたひ

給へ

春日龍神

然るに入唐渡天といつは。佛法流布の名をどめし。古跡を尋ん爲りかし。天台山を拜む。くは。比叡山に參るへし。五臺山の望みあらは。芳野筑波を拜すへし。むかしは靈鷲山。今は衆生を度せんとして。大明神と示現。此山に宮むし給へは。即。鷲の太山共。春日の御山を。拜むへし。我をしれ釋迦牟尼佛世に出て。さやけき月の世を照すと。はの御神詠もあらたかり。然れば誓ひある。慈悲萬行の神徳の。迷ひを照すゆへなれや。小機。衆生の益なきを。悲しひ給ふ御姿。瓊瑤細。輦の衣を脱。鹿幣の。散衣を着し。ついで四諦の御法を説給ひし。鹿野苑も爰あれや。春日野に起ふすは鹿の園をらすや。其外。當社の有様の。山は三笠に陰さすや。はる日るなたに。顯れて誓ひを四方に春日野の宮路も未ありや。曇りなき西の大寺。月澄て。光りろまざる七大寺。御のしの花も八重櫻の。みやことて春日野の春ころのどけかりけれ。實有難き御事かな。即是を御神詠とお

もひ定めて。此度の入唐をは思ひとまらへし。偕々御身は如何成人ろ。御名をなのと給ふへし。入唐渡天をどしまり給はし。三笠の山に五天竺をうつし。摩耶の誕生伽耶の成道鷲峯の說法。双林の入滅までことごとく見せ奉るへし。はらう候に待給へど。木綿四手の神の告。我は時風秀行ろとてかき消様に。失にけり。神託まにあらたなる。盛れうちより光さし。春日野の山金色の。世界と成て草も木も佛跡と成ろふしきある。太打上時に大地震動するは下界の龍神の參會か。すは八大龍王よ。難陀龍王。跋難陀龍王。娑伽羅龍王。和修吉龍王。一徳双迦龍王。阿那婆達多龍王。百千眷屬ひきつれ。平地に波瀾をたて。佛の會座に出來して御法を聽聞する。其外妙法。緊那羅王。又持法。緊那羅王。乾闥婆王。樂音乾闥婆王。阿修羅王。羅候阿修羅王の悦沙のけんろく引つれ。是も同じく座列せ。女か立舞波瀾の袖。白妙なきや和田の原の。拂ふはしら玉立はみどりの。うらうるもうつる海原や。沖

ゆくはかまに月のみふねのさまの川つらに。浮い出れば八大龍王打上八大龍王はやつの冠をかたふけ。所は春日野の月の三笠の雲にのほり。地に下りて烽火の野守も出て見よや摩耶の誕生鷲峯の說法。双林の入滅ことごとく終て。是迄ありや明恵上人扱入唐はとまらへし。渡天は如何に。渡るまし。偕佛跡は尋ねまや。尋ねても。此上あらしの雲にのりて。龍女は南方に飛去ゆけは。龍神は猿澤の池の青浪蹴たてけたて。其丈千尋の大蛇と成て。天に群かり地に。蟠りて池水をかへして失にけり。

國栖

上シテ身は十善のかひうなき。一葉の舟の行末。はんせうの位つるになど歸らさらめやみやと路にわかはるも同じ秘津洲の。よしや世の中治らは。命の恩を報せんと。偷言肝にめいしつ。夫婦の老人はかたしけなきに位居たり。去程に更靜とて物すこし。いかにとしてか此ほどの敬慮をなくさめ申へき。しかも所は月雪の。三吉野なれや花鳥の色音によせて系